

味覚を表現する形容詞の意味構造と語彙体系

中央大学大学院文学研究科

金容美(キム ヨンミ)

<目 次>

第1章 はじめに	5
1. 研究目的	6
2. 先行研究	8
2.1 生理学における味覚の体系	8
2.2 「味覚表現の形容詞」の体系	9
3. 本研究の立場および研究方法	12
4. 研究対象の範囲と用例収集	15
第2章 「甘い」の多義構造	16
1. 本章の目的	17
2. 先行研究及び問題提起	17
3. 「甘い」の意味構造	21
3.1 味覚の形容	21
3.2 態度の形容	25
3.2.1 「顔(表情)」との組み合わせ	25
3.2.2 人に対する態度	26
3.2.3 物事に対する態度	27
3.3 モノの動き・ありよう	29
3.4 様態に対する評価	30
4. 「甘い」の多義構造	32
5. 本章のまとめ	35
第3章 「辛い」の多義構造	36
1. 本章の目的	37
2. 先行研究及び問題提起	37
3. 「辛い」の二つの構文	38
4. 「辛い」の意味構造	40
4.1 味覚の形容	40
4.2 態度の形容	45

5.	「辛い」の多義構造	47	
6.	「甘い」と「辛い」の対義関係	50	
6.1	「甘い」の意味構造	50	
6.2	「味覚の形容」における「甘い」と「辛い」	51	
6.3	「態度の形容」における「甘い」と「辛い」	52	
6.4	「甘い」と「辛い」の対義関係	53	
7.	本章のまとめ	54	
第4章 「渋い」の多義構造			55
1.	本章の目的	56	
2.	先行研究及び問題提起	56	
3.	「渋い」の意味構造	58	
3.1	味覚の形容	58	
3.2	態度の形容	60	
3.2.1	「顔(表情)」との組み合わせ	61	
3.2.2	物事との組み合わせ	62	
3.2.3	「食い」との組み合わせ	62	
3.3	モノの動き・ありよう	64	
3.4	様態に対する評価	65	
4.	「渋い」の多義構造	68	
5.	「渋い」と「甘い」の関係	70	
6.	本章のまとめ	72	
第5章 「苦い」の多義構造			73
1.	本章の目的	74	
2.	先行研究および問題提起	74	
3.	「苦い」の二つの構文	77	
4.	「苦い」の意味構造	79	
4.1	味覚の形容	79	
4.2	態度の形容	82	
4.2.1	「顔(表情)」の組み合わせ	82	

4.2.2 物事に対する態度	84	
5. 「苦い」の多義構造	85	
6. 本章のまとめ	86	
第6章 味覚・嗅覚を表す形容詞「酸っぱい」	88
1. 本章の目的	89	
2. 先行研究及び問題提起	89	
3. 味覚・嗅覚の形容	92	
4. 本章のまとめ	97	
第7章 「味覚の形容」と「態度の形容」の語彙体系	99
1. 本章の目的	100	
2. 「味覚の形容」の語彙体系	100	
3. 「態度の形容」の語彙体系	108	
4. 本章のまとめ	115	
第8章 おわりに	117
1. 本論文のまとめ	118	
2. 今後の課題	120	
参考文献	122
資料	125

第1章 はじめに

1. 研究目的

形容詞は、客観的な性質を表す「属性形容詞」と、主観的な感情・感覚を表す「感情形容詞」に分類される¹。感情形容詞は人の感情・感覚を表すため「人」が主体になり、文の中で欠かせない役割をする。属性形容詞はモノの性質や状態などを表し、文を語る際にモノが主体になるため「人」は排除されやすい。しかし、例えば、部屋の広さについて聞いたとしたら、ある人は「広い」と答え、他の人が「狭い」と答えるような互いに異なる答えになりうる。これは、人の個人的・主観的な感覚が強く反映されるためである。

動詞の場合には、椅子に座っている人を見て「立っている」と答える人がありえないように、ある程度の客観性が保たれている。属性形容詞は、判断・評価する人を排除しては文として実現しない。個人の感覚を離れては成り立たないからである。この点は形容詞が動詞と区別される大きな特徴であり、人間の知覚が形容詞の語彙研究においても重要なポイントである。

本研究で注目したいのは、視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚と言われる「人の感覚」言わば「五感」である。五感とは感覚器官(目、耳、鼻、舌、皮膚)を通して外界の物事を感じ、認識することである。そのため、感覚に関連する言葉は異なる言語であってもある程度の普遍性が保たれる。味覚を表現する形容詞も舌という人間共通の感覚器を基にして成り立っているので普遍性があると想定できる。

- (1) 水戸市の千波湖で 18 日、走りながらメロンを食べるイベント「茨城メロンメロンラン」があった。約 4500 人が走りながら、メロンの甘い味を楽しんだ。
(2017. 6. 18. 朝日新聞記事)
- (2) 大鍋で水あめと砂糖を煮詰め、上地産米を加工したポン菓子に絡めると甘い匂いが漂った。(2017. 2. 28. 朝日新聞記事)
- (3) 本番ではモーツァルトのピアノソナタのほか、「スピードが速く甘いメロディーもある」とお気に入りのリストの「巡礼の年報第 2 年補稿『ベネチアとナポリ』」などを演奏。(2016. 3. 3. 朝日新聞記事)

(1)はメロンの味を、(2)は水あめと砂糖を絡めたお菓子の匂いを、(3)は演奏のメロディーをそれぞれ「甘い」と表現している。日本語を母語としない外国人でも(1)から(3)までの意味は理解できるし、特に食べ物を形容する味をドメインとしない(2)の嗅覚、(3)の聴覚を形容する「甘い」までもその意味は通じる。しかし、(4)、(5)の「甘い」はどうだろう。

¹ 西尾(1972:21)

- (4) 被告人質問で寺井被告は「ネット上で知り合った人なら多少迷惑をかけてもいいかな、と甘い考えだった」と述べた。(2017. 3. 2. 朝日新聞記事)
- (5) 甘いマスクと圧倒的なバリトンの声量はスター性十分だ。(2017. 6. 15. 朝日新聞記事)

(4)は考え、(5)はマスクを「甘い」が修飾しており、日本語母語話者以外の人はその意味がなかなか理解しにくい。人間共通の感覚器を通して認識した言葉はある程度の普遍性が保たれるはずであるが、(1)、(2)、(3)はその意味が理解でき、(4)、(5)は理解できないという差が生じる。(1)、(2)、(3)は「共感覚的比喩」²の範囲に含まれる語であるが、(4)、(5)は対象の性質も異なり、「甘い」には互いに区別される複数の意味がある。「甘い」は明らかに多義語である。

「多義語」を国広(1982:97)は次のように定義する。

「多義語」(polysemic word)とは、同一の音形に、意味的に何らかの関連を持つふたつ以上の意味が結び付いている語を言う。

この定義によると「甘い」が多義語であるためには、以上の例と例に挙げなかった全ての意味³の間には何らかの関連性があるはずである。

形容詞の多義語について西尾(1972:7)は、次のように説明する。

形容詞のばあい、たとえば「あまい砂糖—あまい匂い」「きいろい花—きいろい声」のような一種の感覚的・印象的な類似にもとづく、意味の派生関係が多いようである。(中略)しかし、上の「あまい」「きいろい」の派生義は、感じが似ているという以上に具体的な説明は、(対象についての深い知識がないと、あるいはあっても)なかなかむずかしい。 (下線は引用者)

感覚形容詞の多義は、感覚的・印象的な類似にもとづいた関係であり説明は難しいと指摘しているが、(4)の「甘い考え」、(5)の「甘いマスク」は「甘い味」とは何らの関連性(感覚的・印象的)もなさそうに見える。感覚を表す形容詞の多義性は、感覚・印象である言語外的な

² 国広(1989:28)は「共感覚的比喩というのは、ある感覚分野のことを表現するのに別の感覚分野に属する語を比喩的に用いること」と述べている。

³ 2章3節を参考。

要素による説明に頼らず、言語内的な要素では説明が難しいだろうか。

本研究は、感覚を表す形容詞、その中でも特に味覚表現の形容詞(甘い、辛い、渋い、苦い、酸っぱい)を取り上げ、それぞれの形容詞が持つ複数の意味が互いに関連性がある多義語であるのか、それとも西尾の指摘通り「感じが似ているという以上に具体的な説明がなかなかむずかしい」語であるのかを考察する。

本研究では、味覚を表現する形容詞の「意味構造」を解明することでその多義の構造を明らかにすることを目的とする。また、その語彙体系のありようも明らかにする。味覚が人間の生理に即した一つのシステムであるから、その表現も体系的であると想定できるからである。味覚の語彙体系のありようを解明することで、味覚という感覚と言葉として運用される味覚表現の仕組みとの相関関係も明らかになるであろう。

そして、本論文は、多義語が形成する語彙体系の研究であり、日本語の語彙の仕組み、特に、意味の操作の方法を解明しようとするものである。

2. 先行研究

本研究で取り上げる味覚表現の形容詞は言語を問題にしてはいるが、味覚という生理感覚を出発点としているので2.1では「生理学における味覚」について簡単に触れ、2.2では味覚表現の形容詞を対象にした従来の研究、特にその体系化を試みた研究を中心に概要をまとめる。生理学の味覚と言語レベルの味覚を表す形容詞のズレを確認しておく。

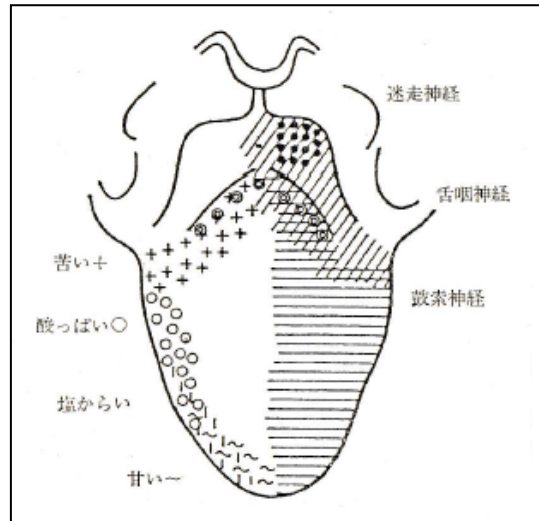
2.1 生理学における味覚の体系

佐藤(1999:1)によれば「味覚」を、

飲食物が舌、軟口蓋、咽喉頭の表面にある味覚器(taste organ)、すなわち味蕾(taste bud)に接触することによって起こる感覚である。味覚、嗅覚は化学物質が刺激となるので化学感覚とよばれるが、味覚は受容器が化学物質と接触することによって起こるので接触感覚であり、嗅覚は遠距離感覚であって、そのメカニズムには大きな差異がある。

としている。要するに、口に入ったある物質は、舌にある味蕾という感覚器官によって味が区別されるということである。なお、以下の<図1>のように、味は舌の領域別に感じられる味の種類が分かれている。

<図1> 味覚感受性の部分差(佐藤(1991:8)『味覚の生理学』)



佐藤(1991:8)は、「四基本味に対する味覚感受性は舌の表面で一様でなく、部位によって異なり、舌尖部は甘味、舌縁部は酸味、舌根部は苦味に対して感受性が高いが、塩味の感受性は舌の部位であまり差はない」と説明している。生理学では、甘、塩、酸、苦の4種の味を基本味と考え、「多くの複雑な味は四基本味の混合によって起こり、またその他の味、たとえば金属製の味、アルカリの味、渋味、辛味などは味覚器以外の感覚器も刺激された複合感覚である」⁴としている。

生理学における味覚は、舌という二次元の空間のどこで反応するかで区別され、互いの区別には影響を与えていない。そして、「塩味(塩からい)」⁵が一番広い範囲で感じられ、舌の味蕾から感じられる四基本味とそれ以外を区別しており、本研究の一つの対象である「渋味(渋い)」は基本味として扱っていない。

2.2 「味覚表現の形容詞」の体系

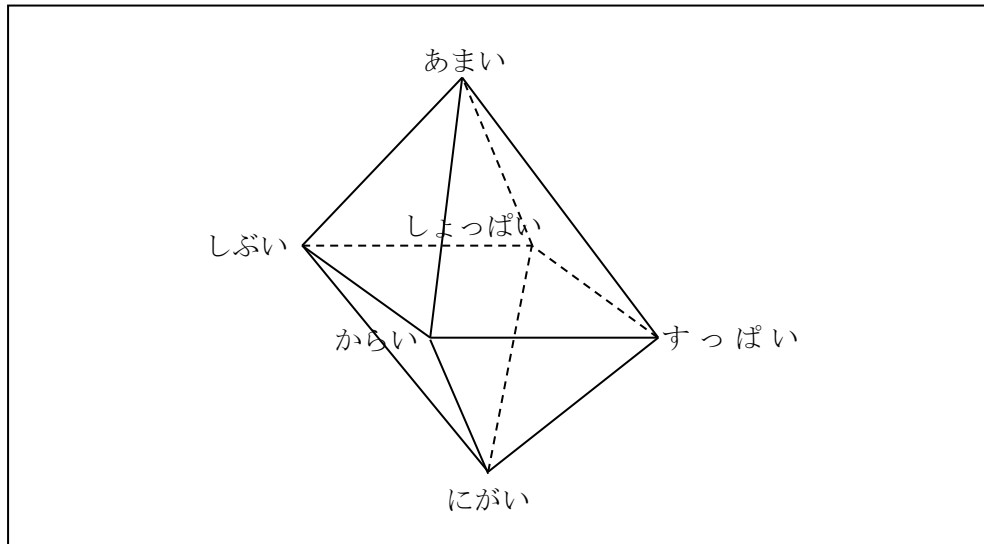
味覚表現の形容詞を対象にした従来の研究の中で、その体系について論じたものは、山田(1972)、国広(1982)、小出(2003)がある。山田と国広は東京方言と山口方言の味覚表現の形容詞の体系を図式化し、小出は他感覚との表現の可能性に注目して論ずる。

山田(1972)は「あまい、しぶい、しょっぱい、すっぱい、からい、にがい」という六つの味覚表現の形容詞が相互にどのように結びつくかについて<図2>のように示す。

⁴ 佐藤(1991:2)

⁵ 生理学における「塩味(塩からい)」と言語レベルの味覚を表現する形容詞「辛い」は同じ味を指しておらず、食違いがある。詳しいことは3章「辛い」の多義構造で述べる。

<図2> 山田(1972:35)東京方言の味覚表現の形容詞の体系図



山田(1972:35)は、最下段に位置する「にがい」について、次のように説明する。

「しぶい・しょっぱい・すっぱい・からい」が何れも「あまい」と対立をなしているのに、「にがい」一人が孤立していることを考えてみると、これは、おそらく「あまい」とは、コトバの上で最も遠い距離にあるからではないかと思われる。

また、「にがい薬、このビールはにがい」という例をあげ、「苦い」は不快であって「味覚名称」として認識されないと述べる。そのため「苦い」は独立し、「甘い」と味覚の上で対立していないとした。しかし、「甘い」と「苦い」の関係も(6)、(7)のように、意味的な関連性をもつことが明確である。

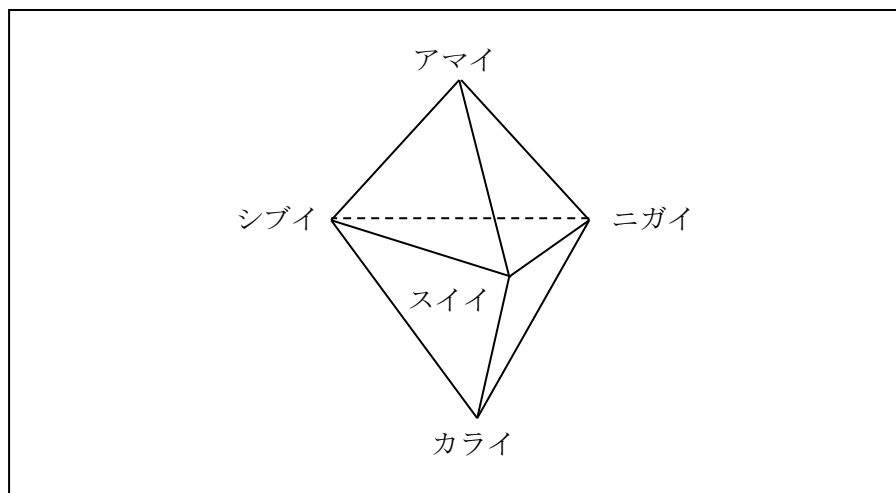
- (6) 現地では甘いチョコレート味が人気で、30～60円が売れ筋の価格帯。(2013. 6. 18. 朝日新聞記事)
- (7) 別の「機能性」を強調する動きもある。ポリフェノールがカカオに多く含まれていることに目をつけて、原料全体に占めるカカオの割合を高めた苦いチョコレートがそれだ。(2006. 4. 23. 朝日新聞記事)

そうすると「苦い」は<図2>の「しぶい、しょっぱい、からい、すっぱい」と弁別がなくな

り同じ平面上に位置付けられるであろう。そのように考えると、〈図2〉は「甘い」とそれ以外の形容詞との対立関係しか示さない図であり、八面体構造である根拠を失う。

国広(1982)は「山口方言」の味覚表現の形容詞の体系を〈図3〉のように図式化している。

〈図3〉 国広(1982:153)山口方言の味覚表現の形容詞の体系図



山口方言の基本味覚体系は、山田の「東京方言の味覚表現の形容詞の体系」から「ショッパイ」を除外した形⁶である。〈図3〉に対して山田は、

「アマイ」は場合によって「アマイーカライ」、「アマイーニガイ」、「アマイーシブイ」のように対をなして用いられるが、普通の食物の味としては「アマイーカライ」が基本的と考えられる(・・・中略・・・)「シブイ・ニガイ・スイイ」の三語は、共に好ましくない味として同一平面上に並ぶことになり、感覚的な印象にも合う

と説明する。しかし、普通の食物として「アマイ」と「カライ」が基本的な対立であるとする根拠、「カライ」も好ましくない味覚の一つであるのにもかかわらず違う平面上に位置するなどの問題点がある。

最後に、小出(2003)は、四つ(甘い、からい、苦い、酸っぱい)の味覚表現の形容詞が他感覚(嗅覚、聴覚、視覚、触覚)と共起する関係を Google で検索した結果について論ずる。味覚表現の形容詞で修飾する感覚は、「嗅覚→聴覚→視覚→触覚」の順であり、修飾する範

⁶ 国広(1982:152)は「ショッパイ」を除外した理由について「筆者の言語体系(山口県方言)では「ショッパイ」は「シオハイイ」〈わずかに塩味がある〉の形であり、基本味覚体系からはずれると考えられるので、これは除外される」と説明する。

囲の広い順は「甘い→苦い→酸っぱい→からい」であると結論付けている。小出は他感覚との共起関係に注目しており、味覚を表現する形容詞同士の意味的な関連性については論じていない。

以上で確認したように従来の研究における味覚表現の形容詞の体系は、概念図としての妥当性に問題がある。主たる理由は、一つには用例の裏づけに欠けることであり、また、六つ(あるいは五つ)の形容詞がすべて等価値であることが前提となっている。そして、使用頻度あるいは多義構造などの重要度は考慮しないことによると考えられる。本研究はこれに替わる味覚表現の形容詞(「味覚の形容」)の体系を提案する(第7章)。

3. 本研究の立場および研究方法

近年の日本語の味覚表現の形容詞全般を主たる対象とする研究領域は、大きく対照言語学、認知言語学に分けられる。両分野は共通的に味覚表現の形容詞の意味について論ずる。しかし、味覚を表現する形容詞の意味といっても、両分野は研究方法に違いがみられる。対照言語学は日本語の形容詞を他の言語と比較し、その意味の相違点、共通点に注目する研究である。一方、認知言語学は形容詞の多義性をメタファー、メトニミー、シネクドキーという比喩で説明しており、意味の転用に注目する研究である。形容詞の多義性、特に、その対象が味覚表現の形容詞の場合は、属性形容詞の代表と言われる次元形容詞に比べると遥かに研究史が浅く、乏しい。その中で認知言語学(認知意味論)は、「言語(特に人間の持つ言語に関する様々な知識)を、人間の行う認知、人間が有する認知能力との関係で考えていこうとする」⁷分野であるため、人間の感覚領域の語はその対象になりやすい。こういうわけで五感の一つである味覚(形容詞)が他の感覚器官(触覚、嗅覚、視覚、聴覚)への意味の転用(多義性)を、人間の認知能力で説明する。ここでいう認知能力とは、「比較する能力」、「同一の対象を異なるレベルで捉える能力」、「参照点に基づき対象を把握する認知能力」(靱山 2002)のことで、この能力がそれぞれメタファー、シネクドキー、メトニミーの認知的基盤になり意味の転用を説明する。味覚表現の形容詞の多義性に関する研究は、認知意味論の観点で記述した研究が主をなしており、本研究に関わる先行研究も多くが認知意味論の観点での研究である。しかし、本研究は従来の研究方法を受け継いだものではない。従来のように言語外的な要素(認知)に依存せず、「意味構造」という新たな観点で味覚を表現する形容詞の意味構造と、転義のメカニズムを明らかにする研究である。

認知意味論の観点での問題点は形容詞ごとに各章で論ずることにし、ここでは一番問題と考えられる「基本義の設定」について簡単に触れる。基本的に認知意味論の研究は共時的

⁷ 靱山(2002:2)『認知意味論のしくみ』

な観点で述べており、該当する形容詞の複数の意味(多義)のなかで「基本義(プロトタイプの意味)」を設定する。基本義の認定については、靱山(2002:101)は次のように説明する。

多義語の複数の意味全体を一つのカテゴリーと考えた場合、そのカテゴリーを構成する個々の要素、つまり個々の意味は、すべて同等の重要性を持つのではなく、何らかの意味で優劣があるということを前提とするものです。このような前提に基づき、複数の意味のなかで最も基本的であり、慣習化の程度が高く、想起しやすいといった特徴を備えたものをプロトタイプの意味と認定することになります(下線は引用者)

「最も基本的、慣習化の程度が高い、想起しやすいという基準からみると味覚表現の形容詞の場合は「味覚の形容」の意味が基本義になる。そういうわけで、従来の研究は「味覚の形容」が出发点になりそこから他の意味へ派生する形で多義を説明している。味覚を表現するカテゴリーにおけるプロトタイプの意味(基本義)が「味覚の形容」となる。

しかし、これには二つの問題が生じる。一つは、プロトタイプの妥当性である。2.2 で見た、東京方言と山口方言とでは味覚表現の形容詞の体系図が異なる。方言の違いによってその体系にバリエーションがあることは、東京方言(共通語)の体系が必ずしもプロトタイプと認められるほど、日本語として普遍的な体系ではないことを示唆する。ならば、「味覚表現の形容詞」というカテゴリーが形容詞の意味の派生によって二次的に構成された体系である可能性がある。

もう一つは、共時的な研究であるため通時的、つまり歴史を排除したことが挙げられる。例えば、「アマイという語の意味の重心が、淡い甘味から砂糖の甘味にうつりはじめた。果物やでんぶん質のものはともかくして、塩味のたりない汁などは、もはや積極的な味としては感じられなくなり、これをウスイとかアワイとかで表現するようになった」⁸という指摘もあり、「味覚の形容(砂糖の味)」が「甘い」の多義の出发点である、という歴史的な担保が欠けている。勿論、この問題は靱山のプロトタイプの意味(基本義)の認定を否定するわけではなく、プロトタイプの意味(基本義)と、多義を説明するための出发点の意味(従来の基本義)を分けて考える必要があるということを示唆する。言葉は時代の変化によって多義の一部の意味がなくなったり新しくできたりするため、語源、あるいは多義の出發になる意味を探ることは容易ではない。味覚表現の形容詞における多義の出發の意味を「味覚の形容」と定めるのは、それが共時的な研究であるとしても、妥当ではない。

本研究は、共時的な研究ではあるが、歴史的に担保されない「味覚の形容」をあえて基本

⁸ 加藤(1966:71)「『日本言語地図』からー<砂糖が>あまい・<汁の塩味が>うすいー」

義と設定する立場ではなく、多義の複数の意味に共通して観察される意味(本研究では意味項目という用語)を探ることで多義構造を明らかにする立場で論を進める。そして、味覚表現の形容詞の多義構造は池上の「意味項目」と「意味構造」という概念を用いて明らかにする。「意味項目」と「意味構造」の概念について触れておく。

池上(1975:32)は「意味構造」を語彙、語、文に分け規定しており、まとめると以下のようになる。

- ・語彙における意味構造・・・ある意味分野がどのような語によってどのように分割されているかを規定する。
- ・語における意味構造・・・ある語の意味を他の語の意味との類似性ならびに差異という観点から規定する。および、ある語と結び付いているいくつかの意味をその相互の類似性ならびに差異という観点から互いに関係づけて規定する。
- ・文における意味構造・・・語と語が結びついて文を構成する時、満たされているべき意味的な条件を規定する。

本研究での「意味構造」とは、池上の「語における意味構造」のことであり、特に「結び付いているいくつかの意味をその相互の類似性ならびに差異という観点から互いに関係づけているのを構造化することと定義する。つまり、個別形容詞(甘い、辛い、渋い、苦い、酸っぱい)を意味、機能によって用法別に分けてから、各用法をさらに「意味項目」という単位で構造化する。この構造化した各用法の意味構造を互いに比較し共通の意味項目(あるいは意味構造)を抽出することで、形容詞の多義構造を把握することができる。

さらに、池上(1975:33)は「語彙の意味構造の記述ができていれば、その構造を規定する各次元に属する意味単位を組み合わせることによって個々の語の意味構造が規定できるわけであり、また逆に、語の意味構造の記述ができていれば、いくつかの語に共通に見られる意味単位がそれぞれ一つの次元として立てることにより、語彙として意味構造を規定することができる」(下線は引用者)とも述べている。個別形容詞の意味構造を把握することで、2.2で取り上げた従来の「味覚形容詞」の体系を新たに構築することも可能である。

本研究は、言語外的な要素(認知)に依存せず、言語内的な要素(意味構造)で、味覚を表現する形容詞の多義構造の説明を完結させる試みである。

4. 研究対象の範囲と用例収集

本研究は、「甘い」、「辛い」⁹、「渋い」、「苦い」、「酸っぱい」五つの形容詞を対象とする。『日本言語地図』によると塩の味を表す語は「辛い」、「しょっぱい」、「塩辛い」などがあり、「しょっぱい」は東日本、「辛い」は西日本に分布している。そして、「塩辛い」で唐辛子の味と区別して使う地域もある。また、「酸っぱい」は南関東を中心に分布し、「すい」、「すいいい」などは中部地方より西に分布する。このように味覚は地域によって区別され、使い分けられる。本研究では、「塩辛い」、「しょっぱい」などの類は「辛い」の下位概念とし、「すい」、「すいいい」などの類は「酸っぱい」の下位概念と認め、「塩辛い」、「すい」などは五つの対象から除外した。「あくが強くてのどがいらいらと刺激するような味や感じ」の「えぐい」と、「渋柿をかじったような、舌をしびれさせるような味」の「渋い」は両方、基本味と言われる「甘、鹹、酸、苦」には含まれていない。が、Google で検索¹⁰した結果(渋い:11,400,000、えぐい:1,840,000)からも「えぐい」より「渋い」の使用頻度が遥かに多く一般的に使われていると認められ、「渋い」は研究対象に含めた。

用例収集には国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』¹¹、朝日新聞社データベース『聞蔵Ⅱ』¹²、毎日新聞社データベース『毎索』¹³、読売新聞社データベース『ヨミダス歴史館』¹⁴を利用した。

『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』からは書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、などのジャンルを問わず、多様な分野から用例を収集する。本研究は形容詞の意味、すなわち、味覚表現の形容詞が味覚以外のドメインで用いられる際の意味と、こうした多様な意味間の関係を構造化する研究であるため、限られた分野より幅広い分野である方が望ましいからである。ただし、資料のなかにはブログなどのインターネット上のものも多数含まれており、一般性が劣る用例もあったので、新聞社のデータベースからも用例を収集し、一般性を保つようにした。

⁹ 本稿では「カライ」の表記は「辛い」とし、「ツライ」の場合は平仮名表記「つらい」とする。

¹⁰ 検索日(2017年7月24日)基準、「渋い」、「えぐい」のように正規表現で検索を行った。

¹¹ <https://chunagon.ninjal.ac.jp/>

¹² <http://database.asahi.com/index.shtml>

¹³ <http://mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>

¹⁴ <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>

第2章 「甘い」の多義構造

1. 本章の目的

生理学では、甘味(甘い)、酸味(酸っぱい)、苦味(苦い)、鹹味(塩辛い)を基本味として認めているが、言語レベルにおいては渋味(渋い)まで入れて五つの形容詞が味覚を表現する。この味覚表現の形容詞の中で「甘い」は、人の好みは別として「うまい」というプラスの意味を持っており、なおかつ、他の味の足りなさを表す際にも使われる点で、他の形容詞と対等な関係ではない。特別な地位を持っている「甘い」の多義性に関しては対照言語学と認知言語学の分野で研究されてきた。しかしながら、対照言語学では他言語との意味の比較に止まっており、「甘い」の意味間関係については触れない研究が多い。一方、認知言語学の研究は、意味間関係を論じているものの、その関係を類似性(メタファー)、隣接性(メトニミー)などで説明しており、研究者の認識によって異なる知見が示されている。「甘い」という一つの語について学者によって異なる答えが主張されていることは、その意味構造がまだ明らかになっていないことを意味し、改めて研究の対象に取り上げる価値がある。

本章は収集した「甘い」の用例を意味、機能によって「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」という四つの用法に分類し、各々の用法の意味構造を解明する。そして、各用法の意味構造を比較することで意味間関係を把握し、「甘い」の多義構造を明らかにする。

2. 先行研究及び問題提起

「甘い」を対象とした研究は、対照言語学と認知言語学の分野で行われている。対照言語学の分野は、近(1997)、皆島(2005)、白(2005)、孫(2005)、崔(2010)、丸岡(2014)などがあり、認知言語学の分野は、Jantima(1999)、武藤(2001、2015)、小田(2003)などがある。この中で「甘い」の多義性に注目した近(1997)、Jantima(1999)、武藤(2001、2015)、小田(2003)を取り上げて確認する。

近(1997)は、味覚を表す基本義に「好ましい、快い味わいを人間に与える」、「本来求められる味わいに達していない、不足」という二つの意味特徴があるため、「好ましい」意味を伴う転用と、「不足」の意味を伴う転用が起こると記述する。すなわち、「考えが甘い」のような例の否定的な意味は味覚を表す基本義の「不足」から維持されていることになる。「好ましい」と「本来求められる味に達していない」という二つの意味特徴によって意味の転用が起こることは同意する。しかし、味覚の意味(基本義)から否定的な意味があることについては考える余地がある。次の(8)と(9)は近が味覚を表す基本義に「不足」という意味特徴が存

在する根拠として出された例である。

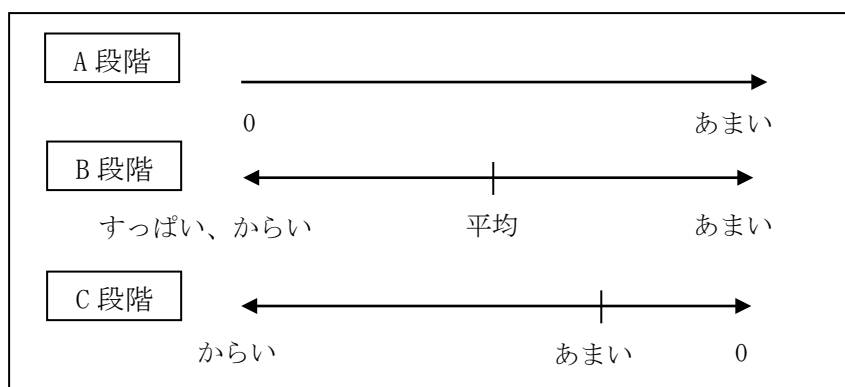
(8) 今日のみそ汁はちょっと甘い。(近 1997:54)

(9) この漬物は塩が甘い。(近 1997:54)

(8)、(9)について近は、「期待される味わいに対して味付けが「不足」しているという点が強調されている」(p. 55)と説明しているが、(8)、(9)から否定的な意味が受け取れるかは疑問である。さらに、この意味から派生した「甘口のカレー、甘口のワイン」の「甘口」は塩気や辛さの量が少ないことを意味してはいるが、否定的な意味は読み取れない。

次に、Jantima(1999)は、「甘い」の対義関係に注目して否定的な意味を説明する。「甘い-辛い」の対義語化の段階を A、B、C に分け、A は対義語化しない独立の段階、B は対等な対義関係を持つ段階、C は B から変化した段階として「辛さ」の軸上を移動する相対的な段階であると記述し、以下の<図 4>のように示す。

<図 4> Jantima(1999)「甘い」の段階



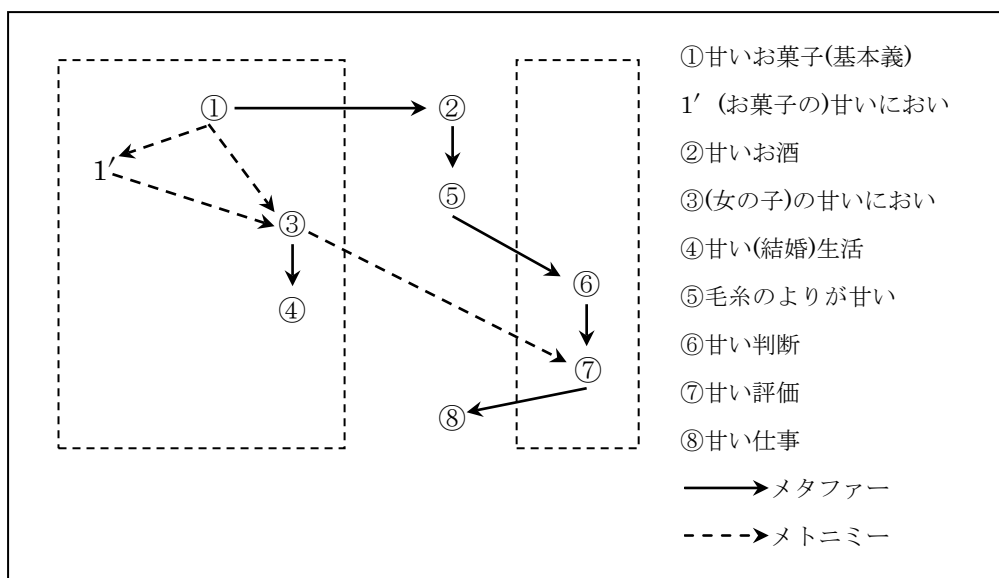
B 段階は、国広(2002:166)が言う連続的反義関係にあたり、例えば「長い-短い」のように反義間の程度差でつながっているものである。Jantima は B 段階に属する日本酒とミカンについて「“あまいもの”であるか、“からいもの”であるか一つに限定してしまうことができない。しかし、どちらの味が量的に多く表れているのかによって判断できる」としている。

しかし、森田(2007:175)が「甘さの度合いを減らしていっても、決して“からい”へ行き着くことはない」と述べたように、糖分の量を減らすことによって辛さ(酸っぱさ)が高くなるわけではないから「甘い」と「酸っぱい、辛い」がつながる関係にはなりえないという問題がある。

武藤(2001、2015)は、「甘い」の意味を以下のようにまとめて、〈図5〉のように意味間の拡張関係を示す。

- ①別義1(基本義)：〈糖分などが持つ〉〈刺激が少ない〉〈好ましく快い〉〈味〉
別義1'：〈①の主体が発する〉〈好ましく快い〉〈匂い〉
- ②別義2：〈(辛みや塩分などの)口中における刺激が〉〈基準に達しておらず〉〈相対的に〉
〈弱い〉〈さま〉
- ③別義3：〈恍惚感を喚起させ〉〈誘い込むような〉〈好ましく快い〉〈刺激・行為・感覚(あるいは状態)〉
- ④別義4：〈恋愛関係にある人間が〉〈醸し出す〉〈恍惚感を伴った〉〈親密な〉〈さま〉
- ⑤別義5：〈行為や状態が〉〈基準に達しておらず〉〈余裕が残り〉〈ゆるい〉〈さま〉
- ⑥別義6：〈物事に対する思考・態度などにおいて〉〈基準に達しておらず〉〈(完全に遂行する)慎重さ・厳密さが〉〈欠如した〉〈さま〉
- ⑦別義7：〈相手に対する扱いにおいて〉〈(本来求められる)厳しさが〉〈欠如した〉〈さま〉
- ⑧別義8：〈ある物事や状況において〉〈(本来予想されるよりも)厳しさやつらさが〉〈少ない〉〈さま〉

〈図5〉 武藤(2015:145)「甘い」の多義構造



基本義①の〈好ましく快い〉から別義①' →③→④という過程で派生が起こり、基本義の〈

刺激が少ない>から別義②→⑤→⑥→⑦→⑧と連鎖的に派生が生じると述べる。この派生の根拠としては「メタファー(あるいはメトニミー)」を挙げている。また、別義①、1'、③、④はプラス評価であり、別義②、⑤、⑧は中立、別義⑥、⑦はマイナス評価を表すとしている。

しかし、この説明には二つの疑問がある。一つ目は、意味の連鎖的な派生関係である。意味が連鎖的に派生する際に、その方向性と順序については十分な説明が行われていない。さらに、基本義の<好ましく快い>と<刺激が少ない>という意味特徴から互いに影響を与えずに別々の方向へ派生が起こると言えるのか。例えば、別義③の例である「母の甘い声」については、「甘いと形容されるある種の声の性質について好ましく感じている」と解釈している。が、他の声に比べて聴覚の刺激が弱いと解釈し、<刺激が少ない>という意味特徴と関係性がないとは言えない。

もう一つは、複数の別義の間には意味間の違いが見られない問題もある。例えば、別義③、④は「恍惚感」という共通点が、別義⑥、⑦、⑧は「厳しさの欠如」という共通点があって、対象の違いのみで別義として扱っている。

最後に、小田(2003)は、甘いものを食べると、「ふわっと幸せな快い感覚が生じ、体がリラックスする」と感覚・印象的に説明し、これを「甘い」の基本義とする。この基本義の「快い感覚」からは「甘い香り、甘い声」へ意味が派生し、「体の弛緩状態」からは「考えが甘い、ネジが甘い」へ意味が派生すると記述する。しかし、「体がリラックスして弛緩状態になる」ということが一般化できるのかについては十分に説明されていない。また、小田(2003)が英語と比較した研究であることを考えると、sweet も「体がリラックスして弛緩状態になる」のは同じである。しかし、「甘い」のみ「考えが甘い」のような否定的な意味が生じる理由についても十分な説明が与えられていない。

従来の研究は、「味覚の形容(糖分の味)」を基本義とし、そこから別義へ意味が派生することと、表現の違いはあるものの、<快い>、<不足(刺激の弱さ)>という意味特徴から別々に二方向で派生が起こるという主張は一致する。しかし、基本義を複数の意味に分け、その中で、ある特定の意味のみを切り取って別義へ派生し、他の意味特徴はその派生に全く影響を与えないと言えるのかは疑問である。例えば、「甘いピンク、甘いマスク」は「好ましく快い感覚を引き起こすマスク、ピンク(色)である」と従来の研究は解釈しているが、<不足>の意味からの派生は考えられないのか。

3. 「甘い」の意味構造

3.1 味覚の形容

甘味は、鹹味、苦味、酸味と共に基本味の一つであり、『日本国語大辞典』は「砂糖や蜜など糖分の味がある」、「塩気が薄い、辛い」と記述する。そして、武藤(2015:134)は、「糖分などが持つ<刺激が少なく><好ましく快い><味>」を基本義と設定し、この基本義から派生した「<(辛味や塩分などの)口中における刺激が><基準に達しておらず><相対的に><弱い><さま>」も味覚の形容であるとしている。また、小田(2003:188)は、「ふわっと幸せな快い感覚が生じ、体がリラックスする」とし、近(1997)はその対象によって「甘い」の意味を四つ¹⁵に分けている。

「甘い」の意味は人によって一つから多くて四つに分けられている。味覚を形容する「甘い」は、その対象によって使い分けるべきなのか。「甘い」は一体どういう意味であり、いかなる構造を持っているのか。まず、「甘い」は人間の生理感覚を基にするため生理学における「甘い」、つまり甘味はいかなる意味合いであるのかを先に探しておく。

生理学での味覚は、口腔内に入れた化学物質が唾液や水に溶解され、分子、イオンの形で口腔粘膜にある味蕾を刺激する感覚のことである。なお、この過程で、「甘味、うまみ及び苦味は G タンパク質共役受容体によって受容され、酸味及び塩味はイオンチャンネル型の受容体で受容され」¹⁶る。山野(1994:11)は甘味を呈す物質について、

蔗糖、果糖、ぶどう糖などの糖類、アラニン、グリシン、プロリンなどのアミノ酸、塩化ベリリウム、酢酸鉛などの金属イオン、サッカリン、ズルチンなどの人工甘味料、モネリン、タウマチン、ステビアといった天然甘味物質など多くの種類がある。これら甘味物質の受容部位は味細胞先端表面膜(アイクロビリ)に埋め込まれている蛋白質と考えられている。

と説明する。すなわち、以上の多様な化学物質が舌にある受容器官を刺激することを、我々

¹⁵ 近(1997:55)味覚レベルにおける「甘い」の意味

- ①<人間が食品を味わい、その味覚を示す><砂糖や蜜のような味わい><好ましい、快い味わいを人間に与える>
- ②<人間が食品を味わい、その味覚を表す><野菜、その他の食品に用いられ、素材が本来もつ味わいを表す>
- ③<酒の味わい><味噌、カレーなど塩分が強い食品に対して、塩分や辛みなどを判断して、基準を設ける>
- ④<人間が塩気の強い食品を味わい、その味わいに塩気や味付けが不足していることを示す><本来求められる味わいに達していない>

¹⁶ 前橋(2011:823)

は「甘味(甘い)」と表現する。では、生理学における「甘い(甘味)」と言語レベルにおける「甘い」とは同じ意味なのか。

次に、言語レベルにおける「甘い」の用例からその意味と意味構造について確認する。「味覚の形容」の「甘い」は多くが(10)のように糖分の味を表す。

(10) ホームランメロン(白緑)果皮にはネットがなく白色。果肉も白く、軟らかくて甘い。(平野泰三(1998)『フルーツカッティング』)

(11) 「今は粒の大きな品種が出ているけど、ここには一番合っている」と話す。高知に住む2歳の孫が「ばあちゃんのイチゴは甘い」と両手に持ってほおぼるそうだ。そんな笑顔も励みだった。(2015. 2. 8. 朝日新聞記事)

(10)、(11)は言語主体が果物を口に入れて、舌にある味蕾で感じる刺激であり、その刺激によって糖分の味と判断し、その果物を「甘い」と形容している。しかし、(12)、(13)の「甘い」も「味覚の形容」ではあるが、糖分の味を表した例ではない。

(12) 河川の水が海水と混ざり合う「甘い塩水」で、プランクトンをえさにして育ち、広島、伊勢、能登地方が有名です。(1995. 10. 15. 朝日新聞記事)

(13) 全長約70センチ、重さ約2.5キロで、値段は1本2500円。市販の2、3割安で、塩控えめの甘塩仕立て。(2013. 12. 6. 朝日新聞記事)

(12)、(13)を「糖分の味がする塩水、塩」とは言えないことから、(12)、(13)の「甘い」は糖分とは無関係である。(12)は、一般的な鹹水が与える刺激を基準にしてそれより刺激が弱いという一連の過程を経て、塩水を「甘い」としている。(13)も鮭について説明する場面で、言語主体が思っている塩度より低く、それは言語主体が想定する基準より弱い刺激を舌から感じ取った結果である。(12)、(13)の「甘い」は、一般的な塩味が与える刺激より弱く、塩度が低いことを意味する。さらに、次の(14)からもわかるように「甘い」が塩分の刺激以外の味覚も形容する場合がある。

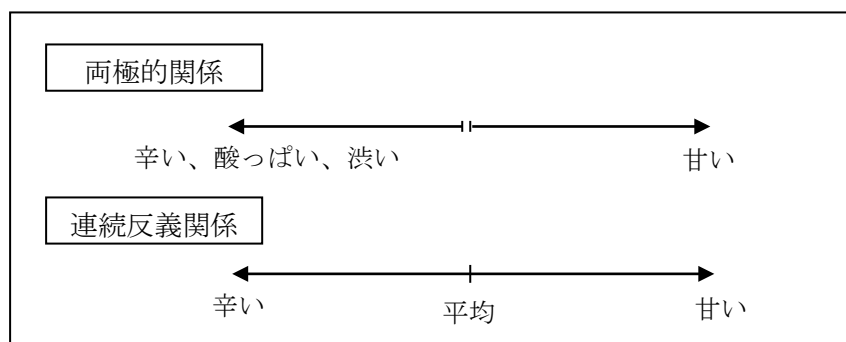
(14) 子どもはスリランカの辛いカレーより、日本の甘いカレーが好き。いずれ、国の味になじんでくれると思いますが……。 (1998. 3. 5. 朝日新聞記事)

(14)の「甘い」は、塩分の量を示すものではなく、辛いカレーと対比しており、舌から感じる刺激が辛いカレーを基準にしてそれより少ない、つまり辛味の度合いが低いカレーを「甘いカレー」と形容している。

以上のような多様な味覚の「甘い」を、Jantima(1999)は2節の<図4>のように3段階に分けるが、その問題点については既に確認した。本論文は「甘い」の意味を改めて<図6>のように提案する。<図6>を確認する前に「反義関係」について少し触れておく。

国広(2002:166)は、対義語を「反対関係」、「反義関係」、「逆義関係」、「対立関係」に分ける。ここで注目したいのは「反義関係」を、片方の否定が他方を指し、中間の段階が考えられない「両極的反義」¹⁷と、反義語の間に程度差をもってつながる「連続的反義」に分ける点である。この説明からみると Jantima の A、B、C 段階はどれも連続的反義関係にあたり、甘さの度合いでつながっていることになる。しかし、「甘い」は甘味という化学物質からなるものであって甘さの度合いを減らすことによって辛さ(酸っぱさ、渋さ、苦さ)になるものではない。

<図6> 「甘い」の反義関係



<図6>の「両極的關係」は、「甘い」と他の味覚の形容詞が両極に位置し、連続的な関係ではない。さらに、両極の形容詞は、必ずしも片方を想定する関係でもない。つまり、「甘いケーキ」のように反義関係の形容詞を持たない「甘い」もありうる。「甘いミカン、酸っぱいミカン」の場合は、「甘い」とそれ以外(酸っぱい)の味覚が両極に位置し、両形容詞がつながってはいないが反義関係は想定できる。

<図6>の「連続反義關係」は「甘い」と「辛い」が両極に位置しており、塩味、辛味、刺激などの度合いでつながっている。両極的關係の「甘い」からは糖分の意味があるのに反して連続

¹⁷ 両極的反義は「ある・いる」、「出席する・欠席する」などがあり、連続的反義は「長い・短い」、「遠い・近い」、「強い・弱い」などがある。

的反義関係の「甘い」からは糖分の意味が消えている。例(12)、(13)、(14)がこの関係に当たる。

「甘い」には「糖分の味」と「糖分以外の味覚に対して濃度が低い、刺激が弱い」以外にもう一つの意味がある。その意味を確認する前に「甘い」の史的変遷について少し触れていく。

長尾(1982:39)は「甘い」の語源について次のように説明する。

「あまし」と「うまし」との別は定かでない。古くは『名義抄』や『字鏡抄』でみる如く「アマシ」と「ウマン」の訓が、同じ感じに施されていることが比較的多かった。甘味料の乏しかった古代においては「甘い」ことが、そのまま「旨い」ことであっただろう。

古くは「甘」に二つの意味が共存したのが、「あまし」と「うまし」の同義語的性格は、次代に薄れていった」と説明している。

(15) 「ほんとですね…。すごくおいしい」塩と柚子の味がほんのりとして、鶏肉の味を引き立たせていた。鶏肉でも魚でも新鮮なものはほんのり甘い。(瀬尾まいこ(2004)『天国はまだ遠く』)

(16) 土地の人はこの水を「ご神水」と言う。その水は夏でも冷たく甘い。口にふくむと木の香りがする。(高山文彦(2004)『鬼降る森』)

「鶏肉、魚」、「水」は糖分を含むものではないため、糖分の味ではなく、飲食物が持つ新鮮な味わいを「甘い」と評価している。長尾の指摘のように「甘い」に美味である意味が薄くなってはいるものの(15)、(16)のようにまだ残っている。

「味覚の形容」における「甘い」は、「ある飲食物を口に入れた際、その飲食物に含まれる化学物質(糖分など)が舌を刺激し、その刺激は他の味(鹹味、辛味等)が与える刺激より相対的に弱い」とまとめられる。また、この「相対的に弱い刺激」は他の形容詞(苦い、辛い、酸っぱい)より快の反応¹⁸と連動しやすい理由でもある。味覚は個人の好みが強くと反映されるものであるの考えると不快の反応と連動する可能性も十分ある。甘い、辛い、酸っぱい、苦いという基本味を同じ線上から考えると「甘い」のみが他とは違って快であると判断しても間違いはない。さらにいえば、西尾(1972:99)でも「あまい」は語史的には、美味を意味

¹⁸ 反応とは『日本国語大辞典』オンライン版では「ある刺激に応じてある現象が生じること」と定義しており、本研究では「ある刺激に対する快か不快かの評価である」の意味とし使うことにする。なお、「反応」の代わりに「評価」を使ってもいいが「様態に対する評価」の「評価」と重複を避けるため「反応」という言葉を使うことにする。

する「うまい」と関係が深いといわれる。現在でも使われる慣用句「あまい汁を吸う」(「うまい汁を吸う」もあるが、)においては、「あまい」は美味な味の代表的なものとして扱われているといえよう」と指摘されたとおり、「うまい」の意味として「旨い」と共に「甘い」も使われていることから快である。

味覚の形容 { (前提) 他の味覚
(形容内容) 糖分の味、美味、相対的に味覚の刺激が弱い
(反応) 快い

生理学における「甘い(甘味)」は舌の刺激による化学物質(糖分)の味に限った意味合いである。それに反して言語レベルでの「甘い」は、糖分の味の意味に止まっておらず美味、味覚の刺激の弱さなどの意味も含めており、生理学での「甘い(甘味)」とは区別すべきである。

3.2 態度の形容

「態度の形容」は、ある事態の真偽は別として、言語主体が感じたり、考えたりする事態に対する捉え方、態度を形容する用法である。「態度の形容」は、「顔(表情)」との組み合わせ、人に対する態度、物事に対する態度に分けられる。

3.2.1 「顔(表情)」との組み合わせ

「顔(表情)」との組み合わせは、言語主体がある特定の場面で相手の表情を「甘い」と形容する用法である。

(17) 新鮮さにこだわり、少々値段が高くてもせっせと買いに出かけていた。春になると待ってましたとばかりにイカナゴを炊く。普段は娘に甘い顔をしないのに、何度も炊いては遠方の私にも送ってくれた。(2015. 3. 13. 朝日新聞記事)

(18) あくまで放課後の指導員なので学校の教員とは立場が違う。甘い顔をすると自習の態度がすぐ緩んで注意散漫になるが、一律に厳しくすることも避けたい。さじ加減が悩みどころだ。(2015. 2. 17. 朝日新聞記事)

(17)は魚を送ってくれる顔と普段の顔を比較して前者の穏やかな表情を「甘い顔」と形容している。(18)も(17)のように穏やかな、優しい表情を「甘い顔」としているが、(18)の場

合は、放課後の指導員という厳しさが求められる場面でそうでない表情を「甘い」と形容する。(17)の普通の表情と、(18)の厳しさが求められる場面での表情を基準にしてその基準に達していない穏やかな表情を「甘い顔」と形容する。

3.2.2 人に対する態度

人に対する態度は、形容される人物の言動をみて言語主体がその人物を「甘い」と形容する用法である。

(19) また、親の気分で怒ったり、怒らなかつたりしては、子供が、迷ってしまうし、父親は甘く、母親が叱ってばかりいれば、父親の方にばかりいくようになる。(中田カヨ子(1993)『新保育原理』)

(20) その逆に他人に甘く、自分にきびしくというのは、普通に人間関係ではいいかもしれないが、真剣勝負の場合はそうもいかない。自分にきびしくすると同時に、相手にもきびしい目をそそいで、相手の動きを事前に察知するくらいでなければ、勝つことはむずかしいからだ。(中江克己(2002)『宮本武蔵「五輪書」勝機はこうつかめ!』)

(21) この種の自由人は元来が自分に甘く、まして約束を守るなどと、自分に負荷を課すことができない。常識人には信じがたい無責任さで、まあ、いいや、と良心の呵責もなく、簡単に放念することができるのだ。(佐藤賢一(2001)『二人のガスコン』)

(19)は父親の子供に対する具体的な振る舞いは示していないが、社会的に親として求められる「厳しさ」を基準にして、その基準に至っていないことを「甘い」としている。(20)も言語主体である「自分」が他人に対する行動に「厳しさ」が欠けていることを「甘い」としている。次の文脈で「自分にきびしく」としており、他人に対する行動と自分自身に対することを対比していることから読み取れる。また、(19)、(20)における「甘い」は社会一般的に求められる「厳しさ、厳格さ」を基準にし、「厳しさ、厳格さ」が欠けている、基準に至っていないことを不快としている。この不快(マイナス評価)は(21)で明らかに確認できる。「自分に甘く」の具体的な行動を「まあ、いいや、と良心の呵責もなく、簡単に放念することができる」と表しており、「常識人には信じがたい無責任さ」と不快感を表している。

3.2.3 物事に対する態度

物事に対する態度は、3.2.2人に対する態度と形容される対象の違いがあるだけで、意味の仕組みは同一である。この用法は、全般的な人間活動の領域を対象とする。

- (22) もう一つ付け加えますと、日本は欧米に比べて全般に入れ歯の素材に対して規制が甘い、金属の質が悪いだけでなくからだに有害な物質も平気で使われています。(宮野たかよし(2002)『歯科技工士が書いた入れ歯至急相談室』)
- (23) 最後の『笑いの混沌』ぐらゐは論理的な解説をと、文庫の担当者は私に依頼したのだろうが、その考えは甘い。私が論理的で親切丁寧な解説をしていたのは演芸評論家時代で、今では作風が変わり、角川春樹から大川隆法まで、相手構わずからむヤクザ論法で売っているのだ。(井上ひさし(1991)『「笑い」の混沌』)
- (24) わたしの不思議でならないのは、日本の映画界一般に弥漫する「演劇的なもの」にたいする抜きがたい不信の念である。演劇的な雰囲気をもつ作品はすべて演劇への逆行として非難される。そのくせ、シェークスピアの『ハムレット』とか『オセロ』とか、古典劇を映画化した作品には非常に甘い点をつけるのである。(佐々木基一(1993)『映像の芸術』)

(22)は言語主体が欧米の入れ歯の素材に対する規制を基準にし、日本は厳しき、厳格さが欠けていることを「規制が甘い」としている。また、厳格さが欠けている、厳格さの基準に達していないことは金属の質が悪いものを使ったり人体に有害なものを使ったりする原因にもなり、不快なものとしている。(23)は言語主体である「私」が「文庫の担当者の考え」に対して「厳格さが欠けている」ことを「甘い」と形容している。担当者が「私」に論理的な解説を求めて本を依頼したその考えが安逸であるということである。それは演芸評論家としての作風のみを顧慮した依頼である。今はそれとは反対の「からむヤクザ論法」をしており、言語主体からみると、「私」の今の作風を顧慮しない担当者の考えは物足りない。(24)も言語主体である「わたし」が映画界の『ハムレット』などの作品に対する評価について「甘い」としている。「演劇的な雰囲気をもつ作品はすべて演劇への逆行として非難」することを基準にすると『ハムレット』などの作品もきびしい点をつけられるのが予想される。しかし、映画界の『ハムレット』につけた点は言語主体が考えている他の作品の評価基準より「厳しき、厳格さ」が欠けている。

3.2.1と3.2.2の例をまとめると、「態度の形容」における「甘い」は、言語主体が想定する

社会一般的な「厳しさ、厳格さ」を基準に、ある人や物事がその基準に至っていない、「厳しさ、厳格さ」が欠けていることを形容するということになる。そして、その事態に対する不快の反応を内包する。

態度の形容 { (前提) 社会一般的な「厳しさ」/「厳しさ」が求められる場面
(形容内容) 言語主体の基準に達していない
(反応) 不快

「態度の形容」の「甘い」は「脇が甘い」という慣用句からも観察される。「脇が甘い」は『日本国語大辞典』¹⁹には「相撲で、四つ身に組む際にひじを体に強くつけることをしないで、相手に有利な組み手や、はず押しを許してしまう体勢をいう」と説明する。「脇が甘い」の「甘い」は「他の力に比べて腕の力が相対的に足りない、弱い」ことである。その結果、守備が弱く、相手に有利な姿勢になる。次の(25)は相撲の場面の例である。

(25) 力士は四つの左右に立ち合いの第一歩を支配される。右四つの力士は左足、左四つだと右足で踏み出す。これが定石だ。琴奨菊の星が、上がらない。特に過去2場所は勝ち越しがやっとなのは、弱点を突かれているからだ。琴奨菊の弱点。それは左四つなのに左から踏み込んで右脇が甘くなる「逆足」だ。子供の頃からの癖で、直せないという。(2013. 3. 16. 朝日新聞記事)

(25)の「脇が甘い」は、力士が左四つであるから右足で踏み出すのが定石であるが、左足を踏み出すことで相対的に右の力が弱くなることを言語主体が「右脇が甘い」としている。この「甘い」は「相対的に力が弱い、足りない」ことを意味し、「態度の形容」における「厳しさが相対的に弱い、足りない」と同じ意味構造を持っている。さらに、「脇が甘い」は相撲の場面から、使われる領域が拡張され、社会的な意味を持つようになった。

(26) 福島市の小林香市長の後援会が開いた政治資金パーティーに10人がその場で会費を払わずに参加していた問題で、福島商工会議所の渡辺博美会頭は26日、「運営の脇が甘く、ちょっと残念だ。きちんとしてもらいたい」と述べた。(2016. 4.

¹⁹ 「相撲で、四つ身に組む際にひじを体に強くつけることをしないで、相手に有利な組み手や、はず押しを許してしまう体勢をいう。転じて、守備態勢の整っていないさまをいう。」日本国語大辞典, JapanKnowledge, <http://japanknowledge.com>, (検索日付 2016-04-5)

27. 読売新聞記事)

(26)の「脇が甘い」というのは、運営陣としてやるべきことをしないゆるい態度のことを意味する。相撲の用語としての「脇が甘い」は、「腕を締め付ける力が相対的に弱い、足りないことが相手に有利な姿勢になり、結果的に守備が弱い、言い換えれば慎重さが足りない」ことを意味したものの、日常生活への領域の拡張によって、その一連の過程が欠落され、「慎重さが足りない、ゆるい」という結果のみが残り、転義した。

3.3 モノの動き・ありよう

「モノの動き・ありよう」はある具体的なモノの状態を「甘い」と形容する用法である。

(27) 「あった…」貨物船にばかり気を取られていたが、画面の片隅に、トラックの荷台の後部だけが写っているのを見つけた。ピントが甘いうえに角度も悪いので、ほとんど見えないが、マークや社名の文字がかすかに読める。(内田康夫(2005)『沃野の伝説』)

(28) 既に耳も立ち、大きな軀をしているが、尾の巻き方がゆるい点だけが気になった。「尻尾の巻き方が甘いけど、大丈夫かね?」「旦那は何言ってるんですか、仔犬の頃はみんな甘いですよ。紀州犬なんか仔犬の頃は差尾だと思ってた奴が、みんな巻尾になっちゃうもの。」(近藤啓太郎(1988)『犬バカものがたり』)

(29) 小豆がパサッとするまでよくしぼり、生あんを作ります。この時、しぼりがあまいと、砂糖の量が多くなってしまいます。(斉藤容子(2001)『ごちそうの手帖』)

(30) ポリ袋の口が縛られておらず、中身の飛び出しているものが目につく。こぼれ出た野菜くずや魚の切り身を手ですくい入れた後、収集車の後部に結んであるぞうきんで手をふく。新品の軍手はすぐに真っ黒になった。水切りが甘く重い袋は、においもきつい。(2001. 5. 20. 朝日新聞記事)

(27)は写真を見ながら説明する場面で、一般的にカメラのレンズの焦点が調度合う範囲があり、その範囲からずれてきれいに写っていない写真の状態を言語主体が「(写真の)ピントが甘い」と形容した。(28)は、犬の尻尾を説明する場面で、言語主体が思っている巻き方の基準があるのに、その基準をずれている。そして、基準の範囲を超えてずれているのではなく「ゆるい」と前の文脈にもあるように基準に達していない巻き方でずれていることを

「甘い」と形容している。言語主体の基準に至っていない巻き方をしていることに対する心配、懸念、不快の感情は「大丈夫かね?」という部分から読み取れる。(29)は小豆汁をあけて水分を搾る場面で、小豆がパサッとするまで搾るのを基準にした時、その基準に至ってではなく、水が残っている搾り方を「甘い」としている。(29)も基準に至っていない搾り方をすると言語主体が望んでない状態になってしまい、「しぼりが甘い」は言語主体にとって不快である。(30)も、生ごみなどが入っている袋を説明する場面で、水切りがよくできることを基準にした際に、まだ水が残っていることを「(袋の)水きりが甘い」と形容している。

例(27)から(30)までをまとめると、「モノの動き・ありよう」における「甘い」は、あるモノの状態を説明する際に、言語主体が想定する状態を基準にし、その基準に至っていない、ずれていることを表す。また、言語主体が想定した基準に至っていないことは不快でもある。

モノの・動き・ありよう	{	(前提) 言語主体が想定する状態
		(形容内容) 基準に至っていない/不十分(余裕があるさま)
		(反応) 不快

3.4 様態に対する評価

「様態に対する評価」における「甘い」は言語主体が物事の様態に対する真善美という価値付けのことである。その対象としては、味覚以外の感覚領域に加え、「雰囲気、時間」などの事柄も含まれる。従来の研究では、この用法の多くの対象が感覚領域(視覚、嗅覚、聴覚、触覚領域)に属するものであるがゆえに、味覚の「甘い」が持つ「好ましい、快い」という感情と結び付けて、その意味を「好ましく快い」と説明した。なお、西尾(1972:7)もこの用法について「「あまい」「きいろい」の派生義は、感じが似ているという以上具体的な説明は、(対象についての深い知識がないと、あるいはあっても)なかなかむずかしい」と指摘する。では、従来のように「感覚的・印象的な類似にもとづく」という言語外的な要素によってしか説明ができないのか。

まず、感覚領域は、従来の研究で「共感覚的比喩」と分類され、研究が進んできた。国広(1989:28)は「共感覚比喩というのは、ある感覚分野のことを表現するのに別の感覚分野に属する語を比喩的に用いること」と説明する。すなわち、「甘いメロディー」のように修飾語(味覚)と被修飾語(視覚、嗅覚、聴覚、触覚)が異なる感覚領域に属することを言う。共感覚については「一方向性仮説」とその理解可能性を中心に研究(安井(1978)、山梨(1988))、

国広(1989)、楠見(1995)など)されてきた。一方向性仮説とは、共感覚と元感覚の修飾が触覚から味覚、嗅覚、聴覚、視覚へと一方向性を持ち、この方向性と五感の発達過程に相関関係があることを主張する説である。しかし、「甘噛み」のような味覚から触覚へとという一方向性に反する事例が多数見つかることを挙げ、この説に反する研究もある。本研究は共感覚表現の一方向性については触れず、共感覚領域とそうでない領域の区別があまり有意味ではないので分けずに考察する。例えば、「甘噛み」の場合は触覚(噛む)を味覚(甘い)が修飾している共感覚的表現ではあるが、「甘いメロディー」のようにメロディーに対する快い評価ではなく、軽く噛む動作を「甘い」と形容しており、「モノの動き・ありよう」の用法に分類することも可能である。逆に、「甘い思い出」は共感覚表現ではないが思い出を「甘い」と評価し「様態に対する評価」に属する。共感覚領域と非共感覚領域の区別による意味の違いとは関係がないから敢えて区分する必要はない。(31)、(32)は視覚(共感覚領域)、(33)は非共感覚領域を形容し、意味内容には領域別の違いはない。

- (31) 進次郎が農林部会長に就いたのは昨年10月。12カ国が参加する環太平洋経済連携協定(TTP)が大筋合意に達した直後。父親譲りの歯切れ良い発言と甘いマスクで人気があり、任命した首相官邸サイドは、TPP合意に反発する農家の説得役を期待した。(2016.6.9.朝日新聞記事)
- (32) 媚びず、臆せず、素直に楽しむふわりと広がるガーリッシュなスカートやほんのり甘いピンクのアイテムなど、フェミニンなものを、持ち前の優しい雰囲気を生かしてさらりと着こなす亜矢子さん。(福田葉子(2004)『Domani』)
- (33) 辛いことは忘れ、甘かった思い出だけを持ち続けたからこそ長命を保つことができたのであろう。(鍋島高明(2005)『賭けた儲けた生きた』)

(31)の「甘いマスク」は心が惹かれる魅力がある男の顔立ちではあるものの、従来の「恍惚感を喚起させる好ましく快い」だけでは説明が不十分である。例えば男らしい顔立ちの人にいくら心が惹かれる魅力があるからと言ってその人に対して「甘いマスク」とは言わない。「甘いマスク」には心が惹かれる魅力以外に特定の意味合いがある。「甘いマスク」は男のみを対象にする前提があり、そこから「男らしい」という基準が考えられる。そして、その基準からみて男らしさが乏しい顔立ちであり、さらに魅力的であるという特徴を満たした際に「甘いマスク」と評価する。(32)の「甘いピンク」の場合も魅力的なピンク色とは違ってどぎついピンクを前提にしてそれより濃度が薄い魅力的な色を「甘いピンク」としている。と

はいえ、「様態に対する評価」用法の全てが(32)のように快い意味以外に、ある基準に達していないという意味を持つのではない。(33)の「甘かった思い出」は「心が惹かれる、快い」の意味であり、「甘い思い出」が「つらい思い出」を前提にしているとは言えない。すなわち、「様態に対する評価」には、「心が惹かれる、快い」という意味に、「前提に達していない」という付随的な意味が加わっている。

様態に対する評価	{	(前提) (一般的・強い刺激)
		(評価内容) 快い・基準に達していない
		(反応) 快

4. 「甘い」の多義構造

本章は「甘い」を「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」という四つの用法に分けてその意味と構造について考察した。それぞれの用法は互いに異なる意味を持っているものの、前提になる基準、事態内容、反応という要素に分けられる共通のしくみをなしていた。

「味覚の形容」の「甘い」は、主に飲食物を対象にしてその味覚を「甘い」と形容する用法ではあるものの、生理学における「味覚(甘味)」とは区別される多様な味覚の形容が複合的に存在していた。食べ物の対象によって、糖分の味のみならず、美味という評価の意味、他の味覚を基準にして相対的に刺激(濃度)が弱い意味もある。そして、このような味覚は言語主体にとって快の反応を導く。

「態度の形容」の「甘い」は、「顔(表情)」、人、物事を対象にし、その対象に対する言語主体の捉え方、態度を形容する。厳しさを基準にしてその基準に達していないことを「甘い」とする。厳しさが求められる場面を基準にしているためその基準に至っていない事柄は言語主体にとって不快の反応を導き出しやすい。

「モノの動き・ありよう」は、具体的な物の動きやありようを対象にする。物の動きやありようの一般的な状態、あるいは言語主体が想定する状態を基準にして、その基準に達していない余裕があるさま、不十分さを「甘い」とする。

「様態に対する評価」は、ある様態に対する言語主体の「快い」評価である。対象になるのは従来の研究で共感覚領域と言われるものに加え、「思い出」など五感以外の領域のものも含まれる。この用法の「甘い」は、言語主体の心が惹かれるような「快い」の意味に付随的にある基準に達していない程度という意味合いもある。

以上の「甘い」の用法を整理すると表<1>のようになる。

<表 1> 「甘い」の意味構造

用 法	前提になる基準	意味内容	反応
味覚の形容	他の味覚	糖分の味、美味、 相対的に味覚の刺激が弱い	快
態度の形容	厳しさ	基準に達していない	不快
モノの動き・ありよう	一般的なありよう	基準に達しておらず、 不十分(余裕があるさま)	不快
様態に対する評価	(度を越える同類の物)	快い(前提に達してない)	快

「甘い」は、「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」の用法に分かれ、それぞれ異なる意味内容を持っている。では、「甘い」という一つの語の中に「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」という四つの用法があるから多義語と言えるのか。まず、国広(2006:5)は「同一の現象素に基づいているか、同一の抽象概念に基づいている場合に多義を構成する」としている。この説明によると、該当の単語が内容語であれ機能語であれ、多義語になるためにはその語を構成する意義素が同一の何か、つまり、「同一の意味項目」で結び付いていなければならないということになる。各用法でのみ見られる意味項目を落とし残りの意味項目が四つの用法で共通的に観察されるとそれが国広の言う「同一の何か」であり、「甘い」が多義語として認められる。

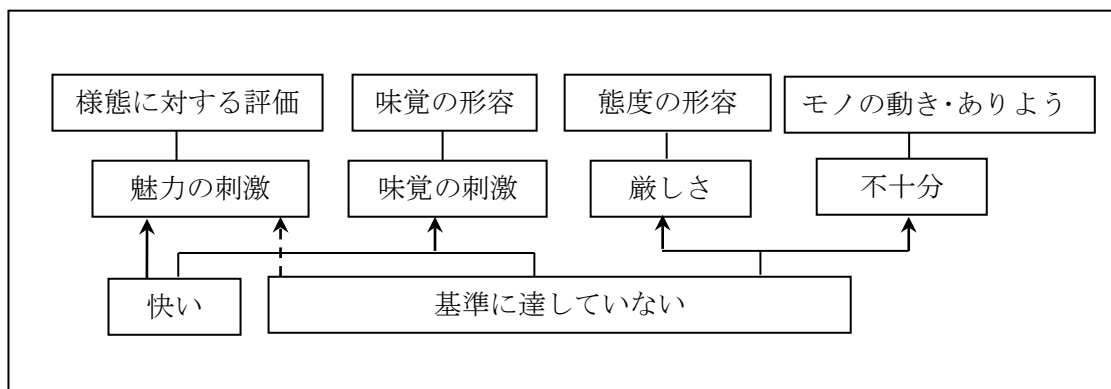
「味覚の形容」が表す意味内容は「糖分の味、美味、相対的に味覚の刺激が弱い」であり、「態度の形容」は「厳しさが求められる場面あるいは、厳しさを基準にしてその基準に達していない」である。両用法の固有の意味特徴(味覚、厳しさ)を除外した共通性は、ある前提になる基準があることと、その基準に達していないことである。例えば、(12)の「甘い塩水」の「甘い」は塩水の濃度を基準にしてその基準に達してない、濃度の程度が薄いことを意味し、(22)の「規制が甘い」の「甘い」は社会一般、あるいは言語主体が想定する規制の厳格さを基準にしてその基準に達していないことを意味する。つまり、「基準に達していない」という意味が、物事一般という対象を形容する場合、「厳しさ」という新たな基準を設けることによって、「甘い」は「厳格でない、厳しくない」という意味を獲得することになる。

次に、「モノの動き・ありよう」の「甘い」は言語主体が想定する物の状態に達していない、「緩み、余裕がある(不十分)」ことを意味する。例えば、(28)の「巻き方が甘い」の「甘い」は、社会一般、あるいは言語主体が想定する犬の尻尾の巻き方の基準に達していない緩い状態を形容する。「基準に達していない」は、モノを対象に形容することによって、その物の動きや状態が言語主体の想定する段階に達していないことを表す。

最後に「様態に対する評価」は、「ある物が、言語主体の心が惹かれるような快い」という意味内容を持ち、場合によっては「強い刺激の物を基準にして、その基準には達していない」意味も含む。例えば、(33)の「甘い思い出」は言語主体の心が惹かれるような思い出であり、(31)の「甘いマスク」は男らしいマスクを基準にしてその基準には達していないが、言語主体の心が惹かれるような魅力があるマスクである。この意味内容は、「味覚の形容」の「美味である」から「味覚」の意味が落ちた「快い」という評価と、付随的に「基準に達していない」の意味が共通の意味項目になる。

以上の「甘い」の「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」用法の関係性を図式化すると<図7>のようになる。

<図7> 「甘い」の多義構造



「甘い」は「基準に達していない」という意味項目からできており、形容(評価)する対象の性質によって意味が変わる多義語である。四つの用法はこの意味項目を基にしているため、場合によっては用法間の区別が曖昧になる可能性もある。例えば、「態度の形容」は厳しさが足りないことを形容し、「考えが甘い」がその代表例として考えられる。そして、「様態に対する評価」は心をうっとりさせる意味で「甘いメロディー」が例にあげられる。では次の(34)の「甘い」はどうだろう。

(34) 出店の基準は厳しい。朝夕の 5 分間に 100 人以上が通るところ。しかも黒っぽい服を着ている人(スーツを着たサラリーマン)が大切という。不動産業者から「成長が見込まれる」と薦められた場所には手をつけない。「甘い言葉にはだまされません」。宣伝・広告費はゼロ。ほとんどの店が人目につきやすい場所であり、店自体を宣伝媒体としてとらえている。(2016. 3. 19. 朝日新聞記事)

「甘い言葉」は不動産業者の「成長が見込まれる」という話が言語主体にとって心が惹かれる魅力的な内容であることを意味する。一方、文脈から「朝夕の 5 分間 100 人以上のサラリーマンが通る」という厳しい基準に不動産業者の言葉だけの「成長が見込まれる」という話は基準に達していないことであって「甘い」は厳しさが足りないとも解釈できる。つまり、(34)の「甘い」は解釈の仕方によって「様態に対する評価」でも「態度の形容」でも分類できる例である。こういう現象は四つの用法が「基準に達していない」という共通の意味項目を基にしているからである。

5. 本章のまとめ

「甘い」は「基準に達していない」、「快い」という二つの意味項目を基に、形容する対象の性質によって「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」へと意味が変わる仕組みを持つ多義語である。

第3章 「辛い」の多義構造

1. 本章の目的

本章で取り上げる「辛い」は『万葉集』に「昔より言ひける言の韓国の可良久も此処に別れするかも」²⁰という例があり、歴史的に見て味覚以外の意味の用例が先立つ。歴史的にみると味覚の意味が「基本義」であるとは言えない。しかし、従来の研究は味覚の意味を「基本義」と設定し意味の派生関係を説明している。

本章は、「辛い」の意味構造を解明することで、多義の構造を明らかにする。なお、2章で取り上げた「甘い」と「辛い」とを比較し、両者の対義関係についても考察する。

2. 先行研究及び問題提起

「辛い」に関する言語研究としては武藤(2001、2015)、小出(2003)がある。また、対照言語学の観点で意味を記述する研究²¹と辞書の記述もあるがこれらの研究は意味の羅列に止まっており、「辛い」の多義構造を把握するには無理がある。『日本国語大辞典』は、「辛い」を唐辛子などをなめるときの味、塩の味、酸味の強いさまなど、舌をさすような感じのあるさまと、「苦痛を感じて、身や心が堪えがたい感じのするさま」に分けている。

小出(2003)は4つの形容詞(甘い、辛い、苦い、酸っぱい)の体系全体を意味拡張の観点から記述し、その中の「辛い」の用法を人の内部と外部に分ける。人の内部の事象には味覚の表現が属し、人の外部の事象は他者に対する姿勢であり、味覚から「刺激の強度を述べるものへ意味をずらした」用法であると説明する。なお、意味拡張の方向の違い(人の内部の事象か、外部の事象か)によって「味覚形容詞は、「甘い・辛い」グループと「甘い・苦い・酸っぱい」グループに分かれ」(p. 132)と結論付けている。しかし、同じグループ内の「甘い」と「辛い」の関係については味覚の意味で対立するという指摘に止まっており味覚以外の意味の比較は行われていない。

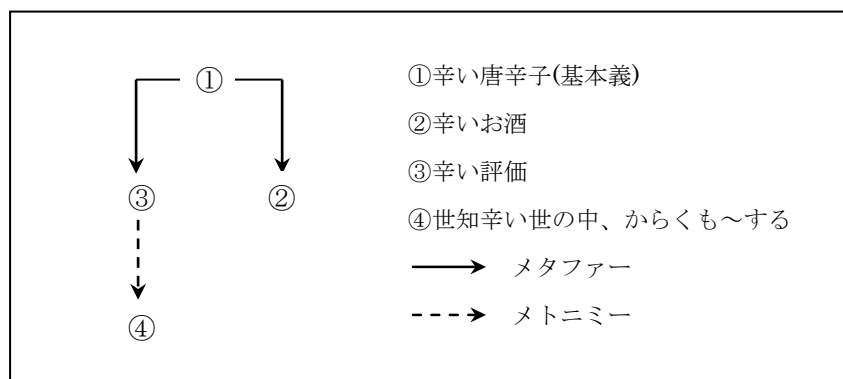
武藤(2001、2015)は、「辛い」を比喩による意味の拡張という観点から記述し、以下のよう
に意味を分け、〈図8〉のように多義構造を示す。

- ①別義1(基本義)：〈唐辛子やワサビなどが持つ〉〈激しく強い〉〈味覚的刺激〉
- ②別義2：〈(辛みや塩分などの)口中における刺激が〉〈相対的に〉〈強い〉〈さま〉
- ③別義3：〈相手に対する扱いにおいて〉〈(本来求められるよりも)厳しさが〉〈強い〉〈さま〉
- ④別義4：〈ある物事や状況において〉〈(本来予定されるよりも)厳しさやつらさが〉〈強

²⁰ 『日本語国語大辞典』オンライン版「辛い」から引用(『万葉集』一五・三六九五)

²¹ 白(2005)、孫(2005)、崔(2010)

<図 8> 武藤(2015:148)「辛い」の多義構造



基本義(別義1)から強い刺激との類似性に基づいて別義②と別義③へ意味が転用し、別義4は別義3との類似性が認められるから意味が転用するとする。意味の拡張は比喩に起因し、その基本は味覚であると説明する。しかし、木原(2010:60)が「味覚「辛し」も、厳しさを表す「辛し」も同様に古い語であり、清水の『日本語語源辞典』(1984)などは、むしろ厳しさを表す「辛し」の語源には諸説あり、いずれかに断定することは困難である」と指摘したように「辛い」の基本義が味覚である根拠は明らかでない。さらに言えば、1916年にドイツのヘニングが生理学で「味の四面体」と呼ばれるものを唱えて以来、甘味、鹹味、酸味、苦味は「基本味」として世界的なコンセンサスを獲得しており、「辛い」の基本義(別義1)は基本味に属さない、厳密に言えば純粋な意味での味覚ではない。また、別義③と別義④は「相手に対する扱い」か「物事や状況」かによって別義として分けてはいるものの、意味的にも構文的にも違いは見られず別義③と別義④の境界が曖昧である問題もある。

以下では「辛い」を「味覚の形容」と「態度の形容」に分け、両者の構文による文法的な側面と意味構造の側面について考察する。

3. 「辛い」の二つの構文

「辛い」の「味覚の形容」と「態度の形容」を意味構造の側面で考察する前に、両者は構文的にいかなる相違点、あるいは共通点があるのかを探る。

日本語の形容詞は通常、語彙的な意味を基にして客観的な性質・状態を表す<属性形容詞>

と、主観的な感覚・感情を表す〈感情形容詞〉に二分類する²²。そしてこの語彙的な意味の分類に照応して文の中で果たす機能も異なる。属性形容詞は人や物に恒常的に備わっている属性を表現するものであり、感情形容詞は一定の時間帯に生じる現象で具体的な時間に縛られ、人間に生じる感情・感覚を表現する。この分類の中で「辛い」は、〈属性形容詞〉として位置づけられ、語彙的な意味のみならず、文中での機能も〈属性形容詞〉に従う。この分類は「辛い」の意味が「味覚の形容」であることを前提にしている。「辛い」が味覚以外の意味を形容する際にも〈属性形容詞〉としての機能が維持されるか、「味覚の形容」と「態度の形容」の構文上の特徴を比較する。

(35) 田中悠古ちゃん(六つ)は「家で食べるカレーのほうが辛い。明日も楽しみ」と話していた。(1999. 4. 13. 朝日新聞記事)

(36) 「彼のベートーベンには、例えば、フルトベングラーと比べて、男性的でゴツゴツした精神の苦渋が感じられず、うわべだけきれいな音楽だった」と、音楽評論家の宇野功芳氏は点が辛い。(1989. 8. 1. 朝日新聞記事)

(35)は味覚の形容の「(私ハ)～ガカライ」構文であり、(36)は態度の形容の「～ハ～ガ辛い」構文である。一見「～ハ～ガ辛い」という同じ構造のように考えられるが各要素が文の中で果たす役割とその性質には大きな違いがある。

味覚を表す(35)の主語は人であり話し手自身であるから省略された形が一般的である。しかし、(36)の場合の主語(宇野功芳氏)は人ではあるものの「辛い」と感じる感覚主体ではなく「辛い」と形容される主体であるため省略不可能である。また、(35)の「辛い」と形容される対象は具体的なモノ(カレー)であるのに対して、(36)の場合は抽象的なコト(点)が対象になる。

次に、「味覚の形容」の「辛い」と「態度の形容」の「辛い」が連用修飾形(辛く)として動詞を修飾する場合の役割について確認する。

(37) 骨付きの羊肉を、トーバンジャンなどで辛く煮込んだ鍋料理。(2007. 6. 19. 朝日新聞記事)

(38) 必ず、録音を聴きます。でないと、どこがよくて悪かったのか、自分で判断できないですから。でも、演奏を終わったばかりのときに辛くつけた点数のほう

²² 国立国語研究所(1972:21)

が、本当は正しいのでしょうか。(1997. 3. 8. 朝日新聞記事)

(37)と(38)の「辛い」は同じく文の中で動詞「煮込む」と「つける」を修飾する機能を果たしているものの、その意味役割は「味覚の形容」の(37)と「態度の形容」の(38)で違いが見られる。ものの属性を表す形容詞が連用修飾形の場合は「動作の結果の状態」を表すことが多い²³のと同じく、(37)も、羊肉を「煮込んだ」結果が「辛い」であり、「羊肉を煮込んで辛くする」の意である。しかし、(38)は「*点数をつけて辛くする」のように点数を「つけた」結果が「辛い」のではなく点数を「つける」様子、つまり動作そのものの様子が「辛い」であることを意味する。「辛い」の連用修飾形が「味覚の形容」なのか「態度の形容」なのかによって動作(動詞)の結果であるか、動作(動詞)のそのものの様子であるかで違いが見られる。

「辛い」が「味覚」を表すか「態度」を表すかは単純にその意味の違いだけの問題ではなく以上で確認したように主語と対象語の選択、文の中での働きなどの構文的な要素が絡んでいる。

4. 「辛い」の意味構造

3 節では構文的な要素を選択する段階から「辛い」の意味の違いが出てくることを確認した。4 節では「辛い」を「味覚の形容」と「態度の形容」に分け、いかなる意味構造をなしているのかを考察する。

4.1 味覚の形容

「味覚の形容」に入る前に「辛い」という形容詞が表す味覚に関して生理学での研究に少し触れておく。

生理学では「辛い」と「塩辛い」を分けて考えている。近江(2008)では、「塩味」と「辛味」について以下のように述べている。

食塩はミネラルの代表であり、塩辛い味を有する。食塩のような塩辛い味を有するものは無機物、有機物を含めて食塩のみである。(中略)甘味、うま味、塩味は、いずれも栄養物のシグナルの役目を果たしている。これらの味は、いわば好ましい味である。このため、動物も人間も好んで栄養物を摂取する。(近江(2008:3))

「辛味」は、純粋な意味では味ではない。トウガラシの辛味成分であるカプサイシンを皮膚につけると、飛び上がるほど痛くなるが、これはカプサイシンが皮膚の痛覚を

²³ 国立国語研究所(1972:68)

刺激するからである。辛味は、舌の上の痛覚が刺激されて生じる“味”である。

(近江(2008:5))

厳密に言えば「辛い」の辛味は狭義の味覚ではない。しかし、「辛味や渋味の情報が脳に伝えられると、他の味の情報と統合されるので、基本味と区別がつかなくなる。したがって、辛味も渋味も広い意味での味の仲間に入れる。(近江(2008:5))」とも言い、広義の味覚としては認めている。

一方、言語レベルにおける「辛い」は「塩辛い(塩味)」と「辛い(辛味)」の上位概念である。『日本言語地図解説-各図の説明 1-』の塩の味(「塩辛い」)項目には地域によってシヨッパイ類、カライ類、シオカライ類、クドイ類に使い分けており、カライ類は「シヨッパイ類に對立して、西日本に分布しているが、東日本の関東南部などにも分布していて、注目される。関東南部などで、シヨッパイ類よりカライ類を上品なことばとして使うとの注記が多く見られ、これは、上方からカライ類が、ある時代に、新しい勢力として侵入したことを示すものであろう」²⁴としている。また、「カライ(辛い)」の項目では「全国一様にカライ類(九州の KARUI、KARUKA、KAIKA などを含む)が分布しており…(中略)…西日本では、塩味と唐辛子の味とを区別しないで表現することがわかる」とし、「辛い」は時代と地域によって構成要素(辛味、塩味)が違っていることを確認した。

以下では「辛い」の「味覚の形容」の例からその意味を考察する。「辛い」は塩の味と唐辛子の味を表す。

(39) しおの場合、デジタル軽量計に井を載せ、スープの元のダシ、岩塩などをブレンドした塩の重さを正確に量る。「塩は 4.5 グラム。スープ 300 グラムで塩が 5 グラムだと、多くの人が辛^いって感じちゃう」(2016. 4. 25. 朝日新聞記事)

(40) 人気はトムヤムクン。味を決めるのは唐辛子やレモングラスなどの香味野菜とナンプラー、ナムブリックパオ(濃い赤色のみそ調味料)。…(中略)…スープを飲むと酸っぱくて辛^いだけでなく、まろやか。(2016. 6. 14. 朝日新聞記事)

(41) 「きみそんなにわさびをいれると辛^いぜ。」と、主人は心配そうに注意した。(夏目漱石(2005)『吾輩は猫である』)

(39)は塩を 4.5 グラムから 5 グラムに増やすとスープの味を「辛い」と感じており、塩の

²⁴ 国立国語研究所(1966:24) 『日本言語地図解説—各図の説明 1—』

味を形容し、(40)は唐辛子を入れたスープの味を「辛い」といい、唐辛子の味を形容している。また、(41)のように「辛い」は塩の味、唐辛子の味の他にわさびの味も形容する。しかし、実際『現代日本語書き言葉均衡コーパス』で「辛い」を検索してみた結果、全用例 245 の中 3 例しか「塩の味」を表していなかった。この結果は『日本言語地図解説—各図の説明 1—』で確認したように「塩の味」は「辛い」の他にも「塩辛い、しょっぱい」などが存在し、「辛い」より幅広く使われているからであろう。なお、唐辛子、わさび以外の味に対しても「辛い」と形容される例があり、このような例の存在は生理学レベルの辛味と言語レベルの「辛い」を区別して考えるべき理由でもある。

(42) 無色透明で、コーリャンや小麦などが原料の蒸留酒。日本の焼酎と似ているが、こちらはアルコール度数 52 度が標準。辛い酒である。小さなグラスでストレートで飲む。(2005. 11. 20. 朝日新聞記事)

(43) 厳しい暑さが続いて、食欲不振の人も多いのでは？こういうときは、刺激のある食べ物で食を進めたい。カレーなんかぴったり。汗をだらだら流しながら辛いカレーを食べると、暑さも気にならなくなってくる。(1999. 8. 23. 朝日新聞記事)

(42)、(43)の「辛い」は塩の味でも唐辛子の味でもない。(42)はアルコール度数 52 度の中国の白酒について説明する文であり、(43)は刺激のある食べ物の一つとして「辛い」カレーを挙げている。(42)、(43)は(39)、(40)、(41)のように塩、唐辛子、わさびなどの特定の食材料が持つ味ではなく刺激が強い食べ物を「辛い」と形容する。このように食べ物に対して「刺激が強い」ことを「辛い」と表現するのは、「辛い」には舌を刺すような痛覚を伴われるからである。また、このような刺激は(44)、(45)のようにオノマトペを利用して形容する場合もある。

(44) タイの家庭料理は世界一辛いという評判通り、どれも香辛料がしたたかに利いて、料理の通過する器官は口であろうと喉であろうとピリピリと辛く、とてもたくさんは食べることができない。(熊澤文夫(2003)『メーサイ夜話』)

(45) 出てきた麻婆豆腐を口に入れると、香辛料の辛さが舌にピリッとくる。なぜかその刺激が心地よく、次々と口に運んでいってしまう。(2010. 10. 6. 朝日新聞記事)

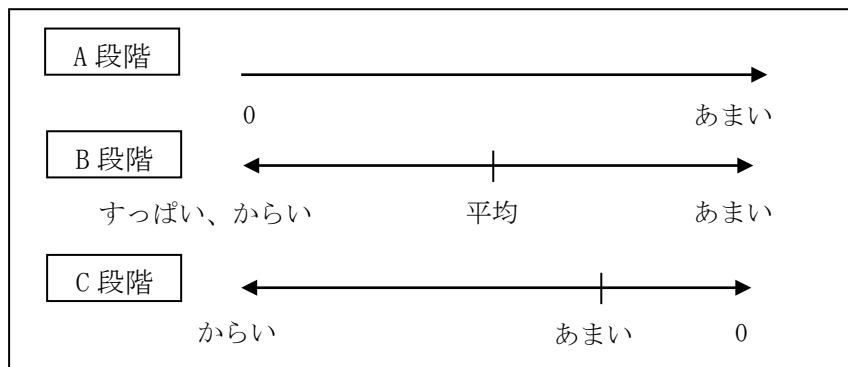
(44)、(45)は、香辛料の辛さが口や喉、舌を刺激することを「ピリピリ、ピリッと」とい

うオノマトペで表現している。「辛い」の全ての用例がこのようなオノマトペと共起するわけではないが、他の味覚に比べると「辛い」は皮膚や粘膜を刺激するオノマトペと共起しやすいのは確かである。

以上の論考から塩、唐辛子、わさびなどが持つ、特定の味と、特定の味がなくても刺激が強い味覚に対しても「辛い」と形容することを確認した。以下では「辛い」の対義語「甘い」との関係性を把握することで前者の「辛い」と後者の「辛い」の相違点を確認する。まず、「甘い」を取り上げた研究としては2章にも紹介した Jantima(1999)がある。

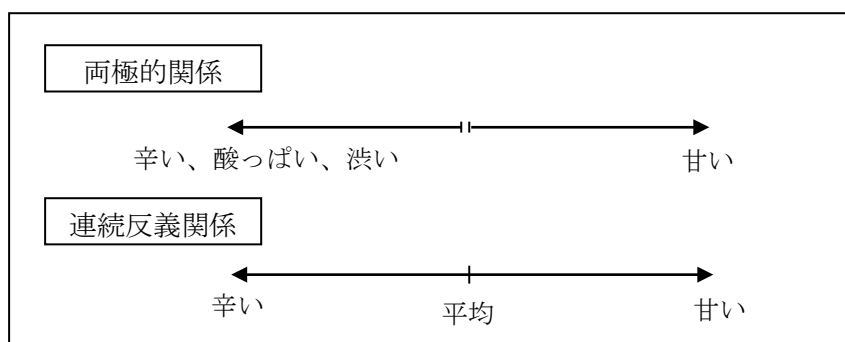
Jantima(1999)は「甘い」をA、B、Cという3段階に分けており、この中でB、C段階が「辛い」と対義語の関係にあるとする。

〈図8〉 Jantima(1999)の「甘い」の段階



2章でも指摘したようにB段階において「甘い」と「酸っぱい、辛い」がつながっているという問題点があり、本論文は「甘いー辛い」の対義関係を新たに〈図9〉のように提案した。

〈図9〉 「甘いー辛い」の対義関係



両極的關係は、塩、唐辛子などのある特定の味を表し、「甘い」と「辛い」が両極に位置してはいるものの連続的につながってはいない関係である。飲食物の種類や味覚によっては「甘い」と「辛い」が対義関係をなす場合とそうでない場合がある。例えば、「辛いキムチ」の場合は「辛いー甘い」の対義関係が認められず「辛い」独立の軸上で働く味であって並列な関係である。並列な関係は「甘い」と「辛い」が共存する「甘辛」という言葉の存在で裏付けられる。一方、「酸っぱいみかん」と「甘いみかん」の場合は、「甘いー酸っぱい」が両極に位置し対義関係をなし、両者がつながっている関係ではないため軸上が途切れている形(両極的關係)である。

「連続反義関係」は「甘い」と「辛い」が両極に位置し、塩味、辛味、刺激などの度合いによって連続的につながっている段階であり、「両極的關係」の「甘い」が糖分を意味するのに対して、「連続反義関係」の「甘い」は糖分の意味がないのが大きな違いである。例えば(46)の「辛い」と「甘い」がこの関係に該当する。

- (46) 辛いカレーを食べなくてはいけない。そうなったらあなたは、まず甘いの中からトライして、中辛、大辛といきますか？それともその全く逆からチャレンジしますか？(加藤紀子(2003)『私にも出来たいくつかの事』)

(46)はカレーの味を辛さによって甘い、中辛、大辛に段階を分けており、「甘い」は糖分の味を表さず辛さが薄いことを意味している。このような「甘いー辛い」の対義関係はそのまま「甘口ー辛口」にも維持される。

- (47) 環の父は辛口好み。母は別に甘口の味噌汁を作っていた。ある日、辛口の味噌が少し足りなくなった。仕方なく母は甘口の味噌を混ぜて作ることにする。(高橋巖夫(1995)『永遠の蝶々夫人三浦環』)

- (48) たばこの害とわが禁煙の日々を思うといまさら吸う気はないものの、吸う人に聞くとピリッとした辛口が際立つ。(2016. 6. 28. 朝日新聞記事)

(47)は味噌を塩の量によって甘口と辛口に分けている。味噌以外にもカレー、酒などの様々な食べ物を辛さ(酸っぱさ)加減によって甘口と辛口で区分して使い分けている。さらに、(48)のようにタバコも刺激の強さによって辛口と甘口に分けており、「甘い」と「辛い」が対義関係になっている。(46)から(48)までのように、「味覚の刺激が強い」の「辛い」は単

独で存在せず「刺激が弱い」の「甘い」が前提にあってからこそその存在が認められる。

「辛い」の「舌を刺すような刺激」は、近江(2008:3)が述べているように塩味は「好ましい味」であるにも拘わらず不快の(マイナス)反応を導き出す要因にもなる。味覚というのは個人の好みが強くと反映されるものではあるが、一般的に味覚(甘い、辛い、苦い、酸っぱい、渋い)を快(プラス)なのか不快(マイナス)なのかの反応に分けるとしたら相対的に刺激が弱い「甘い」のみが快に分類され、「甘い」以外は不快に分類される。

「辛い」における「味覚の形容」の用例からその意味を確認した。「辛い」は塩味、辛味など具体的な味以外に強い刺激の味覚も形容しており、「味覚の形容」の中でも色々なバリエーションがある。「辛い」の多様な味は、「言語主体の許容範囲があり、その範囲を超える刺激の味覚である」という共通の意味項目を持っている。

味覚の形容 { (前提) 言語主体の許容範囲の味覚の刺激
(形容内容) 塩味、辛味、味覚の刺激が強い
(反応) 不快

4.2 態度の形容

4.1では食べ物を対象にしてその味覚を形容する「辛い」について考察した。4.2「態度の形容」は、言語主体が人間活動の外部事態、特に評価類語を対象にし、その対象に対して感じたり、考えたりする捉え方を「辛い」と形容する用法である。(49)は人に対する態度を「辛い」と形容した例である。

- (49) あなたの上司は、自分の身にも覚えがあるくせに、自分のやっていることは棚に上げて、他人の批判には熱心だ。「あり得ないよね」と言った舌の根も乾かないうちに、自分でも同じようなことをする。他人に辛く、自分に甘い。その不愉快で身勝手な行動に、「あり得ないのはあんたの方だ!」と言ってやりたくもなる。
(2011. 6. 11. 朝日新聞記事)

上司と他人が同じ過ちをした場面で、その過ちに対する上司の態度も同じであろうと言語主体は思った。しかし、実際は他人を熱心に批判する上司の様子をみて、「他人に辛く、自分に甘い」とその態度を形容した。この「甘い」と「辛い」は、言語主体が想定する一定の厳しさの基準からその基準を超えると「辛い」、その基準を超えないと「甘い」としている。こ

の「甘い」と「辛い」の関係は、4.1 の<図 9>で示した連続反義関係と同じ仕組みであって、<図 9>は「辛さ(刺激)」の度合いによってつながっていたものが(49)では「厳しさ」の度合いでつながる。

- (50) 親の気分で怒ったり、怒らなかつたりしては、子どもが、迷ってしまうし、父親は甘く、母親が叱ってばかりいれば、父親の方にばかりいくようになる。(中田カヨ子(2003)『新保育原理』)

(50)は親の養育態度について語る文で、言語主体の基準、あるいは社会一般的に親として求められる「厳しさ」の基準から、その基準に至っていない父親の態度を「甘い」と形容している。(49)の「辛い」のように(50)の母親の態度を「辛い」と表現しうる文ではあるが、実際『現代日本語書き言葉均衡コーパス』、『聞蔵Ⅱ』、『毎索』を検索してみた結果、人を対象にする「辛い」はなかなか見当たらなかった。人に対する「厳しい」態度を「辛い」と表現しないのは「辛い」以外に「厳しい」、「つらい」などの別の言い方があるからである。

- (51) 東京都の舛添要一知事が、政治資金を使って家族とホテルに泊まったり、ミステリー本を買ったりして「不適切」と判断された。原資の大半は政党交付金。オレノカナダの発想そのものだが、それにしてもせこい。「他人に厳しく自分に甘いという厳しい批判を受けています」。(2016. 6. 8. 朝日新聞記事)

人を直接対象にして、(51)は「甘い」と「厳しい」で表現している。(49)と(51)は「辛い」と「厳しい」で違う表現であるものの厳格な態度であることは類似であり、両方置き換えてもその意味は無理なく通じる。ちなみに、人に対して厳格でない態度を表す表現は「甘い」と「寛大だ」という表現があるものの、「甘い」は厳しさが求められる事態に対してその基準に至っていないというマイナス(不快)の評価が加わるため「寛大だ」と置き換えが不可能である。

次に、人あるいはそれに準じる団体が物事に対する態度を「辛い」と形容する例である。

- (52) 試験官はニナナからきたお巡りさん。車内の低いわたしの車に乗り込むと、大柄なお巡りさんの禿頭は、天井にくつつかんばかりだった。それがわたしの採点をより辛くさせた。(すずきひさこ(2002)『ママは陽気なアラスカン!』)

(53) 一方、意外に辛い評価だったのがサッカー女子「なでしこジャパン」。昨年のワールドカップを制した実績から当然、1番人気かと思いきや、オッズは2.75倍の米、3.5倍のブラジルに続く6.5倍で3番人気だった。(2012.8.10.朝日新聞記事)

(52)は、車内が低いせいで試験官の機嫌が悪くなり言語主体である「わたし」が思った基準よりもっと厳しく採点されたことを「辛い」と形容している。(53)も、記事の筆者は昨年のワールドカップを制した実績からみれば、「なでしこジャパン」が一番人気あると思ったのに、実際は3番目であった。この結果は筆者が思った評価基準を上回る厳しさによることであって、この評価を「辛い」としている。以上の例からも分かるように「態度の形容」は、点、評価、採点、評論、などの評価類語、あるいは評価の対象になりえる限られた語を対象にする。「味覚の形容」の「辛い」が「甘い」と対義関係にあるのと同じく、「態度の形容」の「辛い」も「甘い」と対義関係をなしている。とはいうものの、「甘い」の「態度の形容」は評価類語以外にも対象になりえる語の範囲が「辛い」より広く、「甘い考え」のように「甘い」で表現できても「辛い」ではできない場合がある。

「辛い」の「態度の形容」は、生じた事態に対して言語主体が想定する一定の厳しさの基準を超えると判断する捉え方である。

態度の形容 { (前提) 言語主体が想定する(社会一般的)厳しさ
(形容内容) 基準を超える厳しさ
(反応) 不快

5. 「辛い」の多義構造

「辛い」は「味覚の形容」と「態度の形容」という二つの用法で用いられることを確認した。さらに、この用法は、「前提になる基準」、「形容内容」、「反応」という三つの意味項目に分けられるしくみである。

「味覚の形容」は、飲食物を対象にし、その対象が持つ塩の味、唐辛子の味などの具体的な味覚の形容と、言語主体の許容範囲の味覚の刺激を超える強い刺激を形容する意味に分かれる。

「態度の形容」は、言語主体がある事態をどう捉えるかという態度を表す用法で、人間活動の領域、特に評価類語を対象とする。この用法の「辛い」は言語主体が想定する一定の厳

しさ(あるいは社会一般的な厳しさ)の基準があり、生じた事態はその基準を超える厳しさを形容する。以上の用法をまとめたのが<表 2>である。

<表 2> 「辛い」の意味構造

	前提になる基準	形容内容	反応
味覚の形容	言語主体の許容範囲の 味覚の刺激	塩味、辛味、 相対的に味覚の刺激が強い	不快
態度の形容	言語主体が想定する (社会一般的な)厳しさ	基準を超える	不快

<表 2>で、「辛い」の用法と、その用法を構成する意味項目を解明した。これにしたがって、二つの用法の関係、つまり、「辛い」の多義構造を確認してみる。

「辛い」の「味覚の形容」と「態度の形容」とはどのように関係付けられるのか。2 節でも指摘したが、もう一度繰り返してみると、小出(2003)は味覚の「刺激の強度を述べるものへと意味をずらした」結果とし、武藤(2001)も、味覚の「強い刺激」から転義が生じたと記述する。両者に表現の違いはあるものの、味覚の「強い刺激」から転義が起こるという結論は一致している。確かに、味覚の「強い刺激」が転義する際に大きな役割をしているのは間違いない。

しかし、武藤の言う別義③、④の<本来求められる(予想される)よりも>という意味あい
は味覚の形容には存在せず転義して初めて現れた意味なのか。「味覚の形容」の「辛い」は<表 2>でみられるように、塩味、辛味、相対的に味覚の刺激が強いことを形容する。そして、この形容内容と共に、前提になる基準と反応という仕組みを持つ。この仕組みは「相対的に味覚の刺激が強い」の意味のみならず、塩味、辛味の場合にも当てはまる。

(54) 客は二つの味から選べるが、韓国人の 8 割が辛い方を注文する。「韓国ではチャンポンは辛いものと思われている」。(2009. 1. 7. 朝日新聞記事)

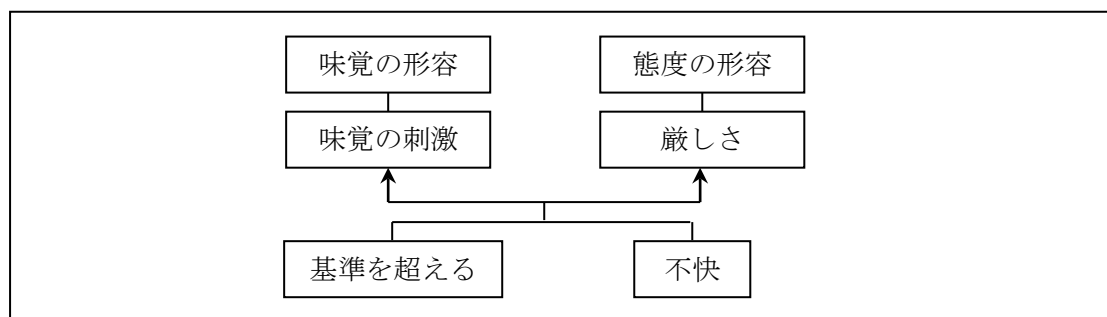
(55) 今朝の大根おろしは特別に辛い。気持ちによって辛くなると妻と言いつつ、
ことをふと思い出したのだ。懐かしい妻の顔。(2011. 11. 11. 朝日新聞記事)

(54)と(55)の「辛い」は一見同じことを形容するようにみえるが、その意味には微妙な違いがある。(54)の場合は、「チャンポン」が持っている客観的な属性としての辛さであり、(55)の「辛い(下線の辛い)」は「大根おろし」の客観的な属性に加えて、言語主体の主観的な

感覚としての辛さも表す。つまり、言語主体の個人の辛さの基準(許容範囲)を前提にしてその基準を超える辛さを意味する。ちなみに、『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL』(1994:400、402)は、両者(属性と、個人の主観的な評価)の「辛い」を分類し別の項目に立てている。ここまでで「相対的に味覚の刺激が強い」のみならず、塩味、辛味にも「基準」という項目が存在することを確認した。

「味覚の形容」用法からは味覚の意味が、「態度の形容」用法からは「厳しさ」という意味が落ちると「基準を超える」という概念のみが残ることになる。言い換えれば、「辛い」は「基準を超える」という概念を基に、形容する対象の性質によって意味が変わる多義語であり、これを図式化したのが<図 10>である。

<図 10> 「辛い」の多義構造



「辛い」は言語主体が持つ前提になる基準があり、生じた事態がその基準を超えることを「辛い」と形容する仕組みを持つ。形容する対象の広がりによって意味内容が変わる多義現象が生じる。例えば、「辛い酒」の場合は、一般的な同類の酒に比べアルコール度数が高かったり、甘味が弱かったりして刺激が強い酒を形容する意味になる。「辛い点」の場合は実際の点数が低いか高いかの物理的な評価の問題ではなく、言語主体が思った点より良くない点であり、それは思った評価基準より厳しいことを意味する。では、従来の研究では説明できなかった次の(56)について意味構造から「辛い」の意味を確認する。

- (56) 大きなリボンにどぎつい原色の衣装。甘いような辛いような。バランスいいような悪いような。(2016. 5. 1. 朝日新聞記事)

「甘い」と「辛い」はファッション業界でもよく使われる表現であり、服を「甘い」、「辛い」と表現する複数の要素がある。「甘い」の場合は、リボンやレースで代表される女性的な雰

困気を感じさせる要素であり、「辛い」はその逆の要素を表現する。また、色の場合も「甘い」は、暖色、あるいは、パステルカラー、「辛い」は寒色、あるいは原色を表現する。(56)の場合は、「リボン」を「甘い」と形容し、「原色の衣装」を「辛い」と形容した。では、なぜこのような表現が可能なのか。「辛い」の意味構造は「言語主体が想定する一定の基準があり、生じた事態がその基準を超える」ことであり、「甘い」は「言語主体が想定する一定の基準より、生じた事態がその基準に達していない」ことである。「甘いピンク」という表現はどぎついピンクを基準にそれより濃度が薄いパステルカラーのピンクを表す。こう考えると(56)の原色はその逆の表現になり「辛い」と表現できる(「甘い」は上述したように女性的なアイテムとして「リボン」を指している)。なお、このような表現は「甘い」と「辛い」が対義関係を満たす条件の下でしか表現できない。

6. 「甘い」と「辛い」の対義関係

5 節では「辛い」の「味覚の形容」と「態度の形容」にまたがる共通の意味項目を確認した。6 節では 4 節で確認したように「辛い」と対義関係にある「甘い」との関係を具体的に確認し、「甘い」と「辛い」の位置づけについて考える。

6.1 「甘い」の意味構造

2 章に述べた「甘い」の四つの用法を再び簡単にまとめると以下のようになる。

「味覚の形容」は、飲食物を対象にしてその味覚を「甘い」と形容する用法である。「甘い」の意味内容は対象によって糖分の味、他の味覚を基準にして相対的な刺激が弱い、美味であるに分かれ、言語主体にとって快の反応が導き出しやすい。

「態度の形容」は、「顔(表情)」、人、物事を対象にし、厳しさを基準にしてその基準に達していないことを「甘い」と形容する。厳しさが求められる場面を基準にしているためその基準に至っていない事柄は言語主体にとって不快の反応を導き出しやすい。例えば、「考えが甘い」などの例がある。

「モノの動き・ありよう」は、具体的な物を対象にし、物や動きの一般的な状態、あるいは言語主体が許容する範囲の状態を基準に、その基準に達していない不十分さを「甘い」と形容する。例えば、「ネジが甘い」などがある。

「様態に対する評価」は、ある様態に対する「美」という価値付けである。同類のものに比べると非刺激的な特徴が魅力になり、言語主体にとって快の反応をもたらす意味で、例としては「甘いマスク、甘い思い出」などがある。

以上の「甘い」の用法と「辛い」の用法の広がりと比較すると<表 3>のような対応関係にある。

<表 3> 「甘い」と「辛い」の用法

	味覚の形容	態度の形容	モノの動き・ありよう	様態に対する評価
甘い	○	○	○	○
辛い	○	○	×	×

「味覚の形容」と「態度の形容」の用法は「甘い」、「辛い」両方共通的に観察されるのに反して、「モノの動き・ありよう(ピントが甘い)」と「様態に対する評価(甘いマスク)」の場合は「甘い」にのみ存在する用法である。このことから「甘い」の方が「辛い」より多様な意味を持つ形容詞であることがわかった。

以下の節では四つの用法の中、「味覚の形容」と「態度の形容」を取り上げて「甘い」と「辛い」がいかなる側面において対義関係があるのかについて記述する。

6.2 「味覚の形容」における「甘い」と「辛い」

「甘い」も「辛い」も「味覚の形容」用法があり、両者別々の異なる味(砂糖の味と塩味、辛味)を形容する。味覚というのは食べ物に含まれる化学物質による刺激であるから程度の違いによってつながっていることは考えにくい。しかし、4.1の<図9>で確認したように「甘い」と「辛い」は対義関係の下で、「連続反義関係」の場合は刺激の強度で両者がつながっている。「辛い」は辛味の舌を刺すような刺激から他の味覚に比べ強い刺激に分類され、「甘い」は他味覚に比べ口腔粘膜や舌に与える刺激が弱いものと分類される。このように刺激の強弱の極で「甘い」と「辛い」は対立する。さらに言えば、この刺激の強弱によって不快と快の異なる反応を導くことになる。

<表 4> 「味覚の形容」における「甘い」と「辛い」

	甘い	辛い
形容内容	糖分の味 相対的に味覚の刺激が弱い	塩味、辛味 相対的に味覚の刺激が強い
対義関係	辛い、酸っぱい、渋い	甘い
共起刺激	—	舌を刺す感覚
反応	快	不快

6.3 「態度の形容」における「甘い」と「辛い」

「態度の形容」は「味覚の形容」以外にも「甘い、辛い、苦い、渋い」に共通的にみられる用法である。その中で「甘い」と「辛い」は一般的に求める厳しさの基準に「達していない」と「超える」とで対立しており、他の形容詞より強く結び付いている。〈表 5〉で示したように両者は意味的に対義関係にあるものの、形容される全ての対象において対応するものではない。

〈表 5〉 「態度の形容」の対象における「甘い」と「辛い」

形容対象	顔	人	物事	
			評価類語	一般
甘い	○	○	○	○
辛い	×	×	○	×

例えば(57)、(58)のような文では「甘い」と「辛い」が対立していない。

(57) あくまで放課後の指導員なので学校の教員とは立場が違う。甘い顔をすると自習の態度がすぐ緩んで注意散漫になるが、一律に厳しくすることも避けたい。さじ加減が悩みどころだ。(2015. 2. 17. 朝日新聞記事)

(58) また、親の気分で怒ったり、怒らなかつたりしては、子供が、迷ってしまうし、父親は甘く、母親が叱ってばかりいれば、父親の方にばかりいくようになる。(中田カヨ子(2003)『新保育原理』)

(57)は放課後の指導員という厳しさが求められる場面でそうでない表情を「甘い」と形容する例である。(58)は父親が子供を全然叱らないことは、社会一般的に親として求められる厳しさの基準からみると、厳しさが欠けていることであり、それを「甘い」と形容する例である。「甘い」が「態度の形容」においても「辛い」と対義関係にあることを考えると、(57)、(58)と逆の事態に対して「辛い顔」、「父親は辛い」と表現できそうだが、実際は「辛い」ではなく「厳しい」で表現する。また、物事を対象にする「甘い」と「辛い」も対立関係が一致しない場合がある。

(59) 審査委員が医師会等の会員であっても、ほとんどの審査委員は自らの信念に基

づいて職務を履行していると信じたい。審査が甘いか辛いかの評価は、立場によって異なる。(橋本巖(2004)『医療費の審査』)

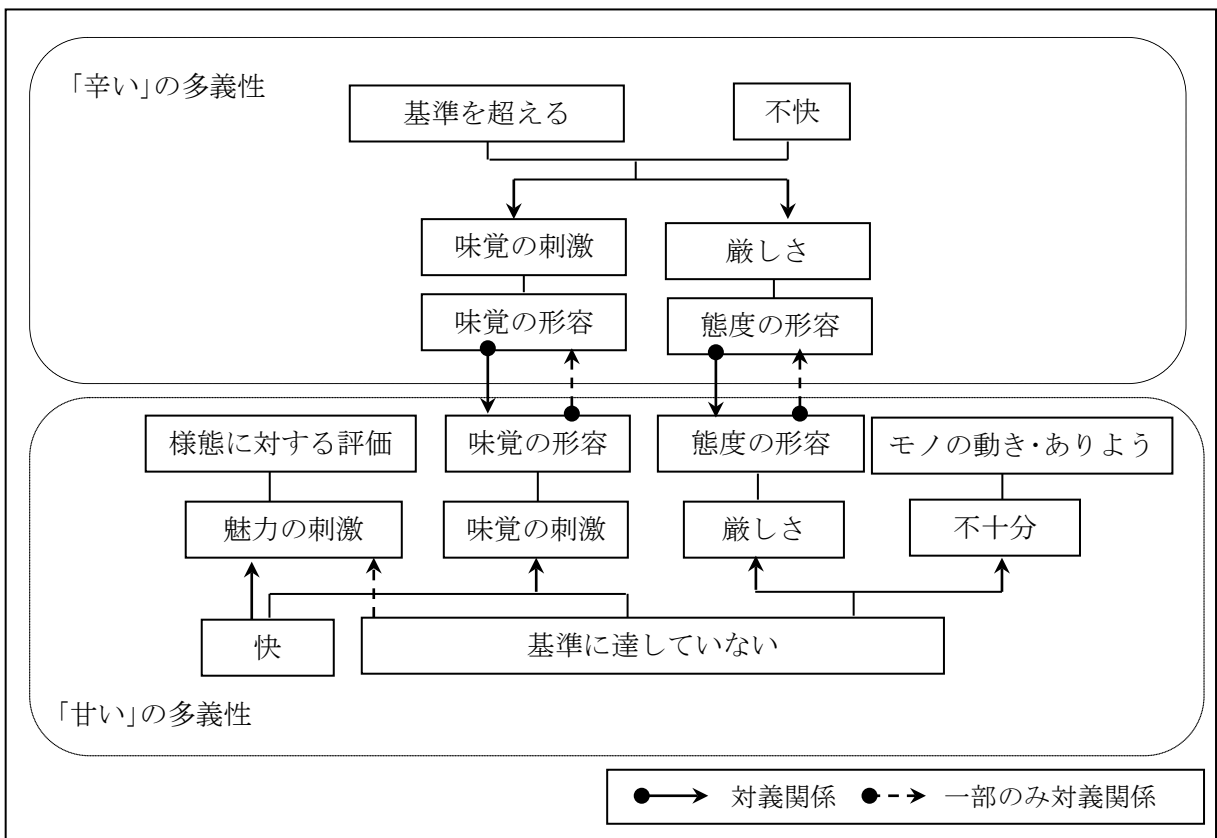
(60) 1階トイレの照明。ちょっとアタマが混乱していて考えが甘かった。空間に対して照明のサイズが大きいのです。カタログで選んだ商品なので、ちゃんとサイズを確認してなかったのです。(川上夏子(2005)『ぼくらのいえができるまで』)

(59)は文脈の中に「甘い」と「辛い」が出ており、審査が厳しいか厳しくないかで対立している。しかし、(60)の場合は考えが安逸であることを「甘い」と表現しても、その逆の事態は「辛い」と表現しない。このように物事を対象にしても(58)のような評価類語、あるいは評価の対象になりえる限られた語類では「甘い」と「辛い」が対立して、それ以外の語類では対立していない。

6.4 「甘い」と「辛い」の多義構造

以上の「甘い」と「辛い」の多義構造の対義関係を図式化したのが<図 11>である。

<図 11> 「甘い」と「辛い」の対義関係



「辛い」には「基準を超える」という意味項目があり、この概念を基に形容する対象によって「味覚の刺激」と「厳しさ」という意味が生じる。それぞれの意味は「味覚の形容」と「態度の形容」で別の用法として働く。これに対して「甘い」の場合は「基準に達していない」という意味項目を持ち、「辛い」より広い範囲の対象を取り、「味の刺激」、「厳しさ」、「不十分」、「魅力の刺激」の意味でそれぞれの用法として働く。「味覚の形容」と「態度の形容」は「甘い」と「辛い」で共通に見られる用法であり、なおかつ、対義関係にある。例えば、「評価が辛い(甘い)」は、実際評価する人の評価が厳しいか厳しくないかではなく、言語主体が想定する厳しさの基準を超えるか、超えないかによって「辛い」、「甘い」と形容することである。このように、「辛い」は「甘い」に対して対義関係(実線の矢印)であるものの、「甘い」の場合は「甘い考え」のような例では「辛い」と対義関係をなしていないため一部のみの対義関係(点線の矢印)である。

7. 本章のまとめ

「辛い」を「意味構造」という観点で考察した。「辛い」は「味覚の形容」と「態度の形容」という二つの用法がある多義語であり、この多義語は単純に意味が違うことを表すわけではない。意味の違い(多義性)は構文的な要素を選択する段階から影響を与え、二つの異なるタイプの構文的な条件を生み出している。そして、この二つの用法は言語主体が想定する一定の「基準を超える」という共通の意味項目でまとめられる。「基準を超える」で代表される意味構造は「辛い」と形容する対象の性質と呼応することによって多義現象が生まれる。言い換えれば、構文的な要素が意味構造に組み込まれることで多様な用法が生じると言える。そして、「辛い」は「甘い」と「基準を超えるか超えないか」という点で対義関係をなし、使い分けられている。

第4章 「渋い」の多義構造

1. 本章の目的

日本語形容詞「渋い」には「食いが渋い」という表現がある。これは魚釣りをしているときに、「なかなか魚が釣り餌に食いつかない」ことを表し、日本語ネイティブでも釣りをしない人にはその意味が分からない。なぜ味覚を表す形容詞にこういう表現が可能であるのか。そもそも「渋い」は「味覚を表現する形容詞」と言えるのだろうか。「渋い」が多義性をもつことは明らかであり、その意味の構造について論考する必要があるため、本章では「渋い」を「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」という四つの用法に分け、その意味構造を明らかにする。

2. 先行研究及び問題提起

味覚表現の形容詞の全体を対象にした言語研究は、管見の限り、小出(2003)、武藤(2015)のほかに辞書類の記述がある。しかし、本章で取り上げる「渋い」は、基本味でないため、小出(2003)の研究対象から外されており、重要な感覚形容詞であるにも関わらず、研究史は浅い。

まず、辞書における「渋い」は、〈表6〉のように整理できる。表現の違いはあるが、Ⅰ渋柿の味、Ⅱ不機嫌である、Ⅲ地味で落ち着いた趣がある、Ⅳけちである、にまとめられる。かつ、『日本国語大辞典』においては、Ⅴ滑らかでない、も加わっている。しかし、このような意味の羅列では、意味間の関係と、意味の仕組みは把握しにくい。

〈表6〉 辞書における「渋い」の意味分け

	『日本国語大辞典』	『学研国語大辞典』	『新潮現代国語辞典』
I	①渋柿を感じたような、舌をしびれさせるような味。	①(十分に熟さない柿を食べたときのように)舌をしびれさせるようないやな味がする。	①渋柿のような、舌をしびれさせる味がする。
II	⑤不平そうである。苦りきった表情である。不機嫌そうである。	②(渋みのあるものを食べたときのような)不愉快そうなようすである。	②事態が思わしくないなどで、不快である。気むずかしい。
III	④華美ではなく、地味で落ち着いた趣がある。落ち着いた深い味わいがある。	③目立たぬ中に落ち着いた深い美しさがある。地味な中に粋な(老巧な)ところ	③色や模様、又は演技などが、落ち着いた感じで好ましい。地味で趣がある。

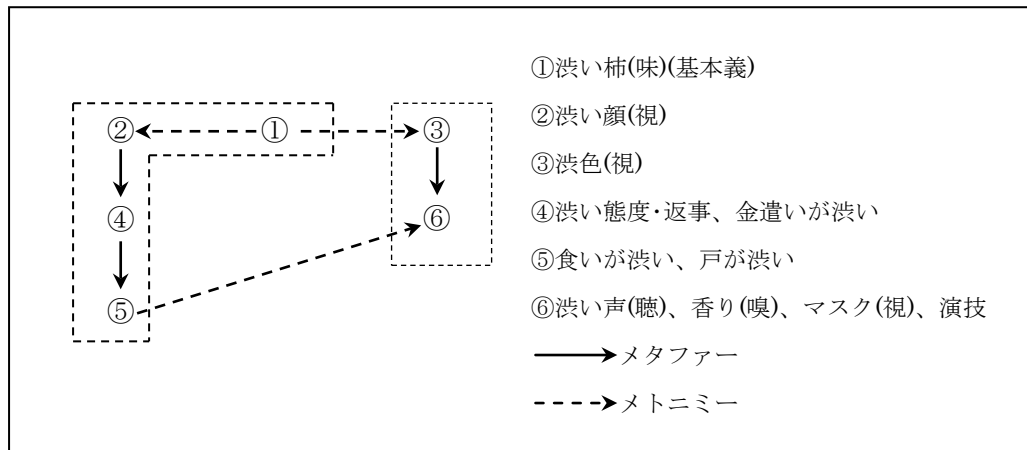
		ろがある。	
IV	③金を出すのをいやがるさまである。	④金品を出し惜しみするようすである。けちである。	④ものを出し惜しみするさま。けちである。
V	②声などが滑らかでない、ぎこちない。⑥物が滑らかに動かない。		
	『計算機用日本語 基本形容詞辞書IPAL』	『類語国語辞典』	『広辞苑』
I	①舌がしびれるような苦味を感じる。②飲食物などに舌がしびれるような味がある。	①渋柿のような味だ。	①渋柿を食べた時のような舌を刺激する味がある。
II	⑥不満・不快・不賛成を示すような。	③不快で不機嫌なさま。	④不平そうである。にがりきっている。
III	③趣味や芸などに落ち着いたさりげない良さがある。④色やデザインなどが落ち着いた上品な感じを与える。	②はでさがなく落ち着いた深い趣。	③はでやかでなく、おちついた深い味がある。
IV	⑤人が金の支払いをしたがらない。	④金の出し方がいつも少ない。けちである。	⑤金品を出し惜しむ。けちである。
V			②声などが、滑らかでない。

武藤(2015)は「渋い」の基本義を次の①とし、別義②～⑥を以下のようにまとめ、意味間の関係を<図12>のように示す。

- ①別義1(基本義) : <熟さない柿などが持つ渋みに対する><不快な><味覚的刺激>
- ②別義2 : <不快感あるいは不満足感が><表情に表れているさま>
- ③別義3 : <(渋柿のような)赤茶色>

- ④別義4：〈相手に対する対応などにおいて〉〈進んで好意的でないさま〉
- ⑤別義5：〈動きや機能が〉〈滞って円滑でないさま〉
- ⑥別義6：〈地味で落ち着いた〉〈深い魅力や趣があるさま〉

<図12> 武藤(2015:156)「渋い」の多義構造



意味②は渋いものを食べた後の顔という、時間的隣接に基づいて意味が①から転用したものであり、④の〈進んで好意的でないさま〉は②の「不快な様子との類似性に基づくメタファーによる」と説明する。また、⑤の〈滞って円滑でないさま〉は④の「〈進んで好意的でない〉という意義特徴と類似性が感じられることから、メタファーによる」意味の転用と説明する。⑥は③の「渋色」が有するプラス評価の意味と類似性が感じられるから、メタファーによる意味の転用である」としている。

しかし、②から④へ、④から⑤への派生の根拠になる「類似性」についての説明が欠けているせいで、どういう点で類似と判断するのか、という疑問がある。⑥の場合も、「渋色」が持つプラス評価の意味というのはどこから出て、どういう意味なのかの説明も欠けており、派生のメカニズムが明確ではない。

3. 「渋い」の意味構造

3.1 味覚の形容

味覚としての渋味は、1916年にドイツのヘニングが四面体説を唱えて以来、甘味、鹹味、酸味、苦味の四つの基本味から除外されている。その理由として山本(1996:22)は、渋味は純粋な味というより、口腔粘膜の収斂感が主な感覚で、味覚と粘膜収斂感の複合感覚であ

ることを挙げている。味覚というのは、口腔内に取り入れられた化学物質を唾液や水に溶解させ、分子、イオンの形で舌にある味蕾を刺激し感じられるものである。この定義からみると渋味は、主に渋柿、茶などの食べ物に含まれ、タンニン酸、没食子酸、カテキン類などの化学物質のことを意味する。そして、山本の指摘にもあるように「収斂感」という独特な感覚が伴い、生理学では基本味から除外され、複合感覚として分類する。では、言語レベルでの「渋い」はいかなる意味なのか。「渋い」の味覚特徴が端的に表れるのが(61)である。

- (61) トチ餅は栃木の特産品です。原料のトチの実は、クリの実のようでおいしそうに見えるのですが、かじってみようものならとんでもない!かなり渋いです。それはトチの実に含まれるタンニン(渋味と同じ成分)の他、サポニンという厄介な渋味成分が含まれているからです。(2015. 5. 28. 毎日新聞記事)

トチの実の味に含まれるタンニン、サポニン、などの化学物質に対する味を表す。「渋い」は<表6>の辞書からもわかるように「舌をしびれさせる刺激」も伴っており、食品に対しては口中の違和感や嚥下の抵抗感を感じさせる。

- (62) 高級ワインの味わいについて、西欧で「ピロードのズボンをはいた紳士がのどを滑り降りる」ような感覚である、などと、しばしば表現されるのも、これは非常によく似ている。味わいとは、口の中に入れたときの接触感覚がきめ細やかで滑らか、柔らかであるということ。ざらざらと粘膜を刺激するような渋みや苦味に満ちた攻撃的な味わいではとても高級なワインとは言えない。(2000. 1. 4. 朝日新聞記事)

(62)は高級でないワインの説明で、口の中を刺激し、滑らかに飲みこまれるのを阻害するのを「ざらざら」とオノマトペで表現している。円滑でないさまを表すオノマトペと共起しやすいということは、渋味のなかに、違和感、抵抗感があることを裏付ける証拠でもあり、この抵抗感と違和感是不快の反応とつながる。一方、不快の反応は(63)のように違和感をオノマトペとして表に出さなくても「苦味と渋みをどう抑えるか」という文脈からも読み取れる。

- (63) 矢内は、その後を追いかけながら学んだ「技」を、新銘柄「一步己」につぎ込んだ。だが、できた酒は苦くて渋く、香りもいま一つ。思い描いたものとは違っていた。《小手先だけの酒でした。なにも学べていなかった。次の年は、どう香りを出すか。その次の年は苦みと渋みを、どう抑えるか。さらにその次の年は、どうキレ味を出すか。毎年、一つひとつ課題を設けて、クリアしてきました。》(2015. 5. 1. 朝日新聞記事)

しかし、「渋い」に快の反応がないとは限らない。(64)は快の反応になる場合である。

- (64) 「渋い味が好きだとわかったことが大事なんです。本当においしいと思える好みの味を自分で探してほしい」(2011. 5. 8. 朝日新聞記事)

このように味覚は個人の好みが強ク反映されており、快の反応も不快の反応も連動するものの、国広(1982:152)が「シブイ・ニガイ・スイイ」の三語は、共に好ましくない味として同一平面上に並ぶことになり、感覚的な印象にもよく合う」と指摘したように、「渋い」は好ましくない味覚であり、さらに、滑らかに飲み込めない要素による違和感、抵抗感から不快の反応と連動するのが一般的である。

「味覚の形容」における「渋い」は、渋味と共に、飲み込むのを阻害する感覚を伴う不快の反応(経験によっては(64)のようにその意味が薄れる場合もある)という仕組みからできている。

味覚の形容	{	(期待される事柄) 食品が円滑に飲み込まれる
		(形容内容) 渋味、嚥下を突っ返す感覚でうまく飲み込めない
		(反応) 一般的に不快(経験によって薄れる)

3.2 態度の形容

「態度の形容」は、ある事態の真偽はともかく、事態に対して感じたり考えたりする捉え方、つまり姿勢、態度のことである。形容する対象は、「顔(表情)」、物事、「食い」に分けられる。

3.2.1 「顔(表情)」との組み合わせ

「態度の形容」用法のうち、「顔(表情)」との組み合わせの場合である。(65)は「渋い顔」の原因が相手にある場合であり、(66)は置かれた状況にその原因がある場合である。

- (65) ネクタイのおじさんは黒い箱から顔を出していった。「撮りますよ」……(中略)……「一、二、三……」みえない鳥がまた飛んだ。おじさんが渋い顔をしながら、パパに向かっていった。「三で目を閉じないで」パパが顔を赤くして、うなずいた。(林巧(2004)『TRHEE/臨死』)
- (66) ホテルへ着いたら連絡するということになっているからだ。いままでのホテルのように、つないでくれるのかと思いきや、木で鼻をくくったような対応で、目の前の電話で勝手に掛けろということだった。自分で掛けるのはいいが、その態度が、突き放すような冷ややかな感じがした。かけ方がわからないので教えてもらおうと思ったが、それも面倒なのか、明らかに渋い表情をする。困ったな、外でかけた方がよさそうだなと、思案していると、従業員の女性が「どうしたの」ときいてくれた。(山崎久代(2001)『シュクラン!』)
- (67) 1泊の料金が1万円未満のビジネスホテルでは、空室もある。ミナミのビジネスホテルでは、「稼働率は例年並み。世界陸上関連のツアーを組んだ旅行会社からのキャンセルも発生した」と打ち明ける。別のビジネスホテルでも「開幕日でも、まだ空きがある。期待外れだ」と渋い顔だ。(2007.8.20.毎日新聞記事)

(65)は、おじさんの写真をうまく撮りたいという期待が、パパが目を閉じたことで期待外れの事態が生じ、その時のおじさんの顔を「渋い」と形容している。(66)はホテルの従業員の表情を言語主体が「渋い」と形容している。従業員は言語主体である客に目の前の電話を使うようにした、それで終わると思ったが、従業員の思う通りにならず、客は掛け方を分からないという「面倒な」事態が生じている。(67)も同様に期待外れの事態について語る際の表情を「渋い」としている。

「顔(表情)」と組み合わせられる「渋い」は、思い込みと外部状況が合致しない事態という構造の下で、その事態に対する感情が顔(表情)に出ることを表す。

3.2.2 物事との組み合わせ

3.2.1顔との組み合わせの「渋い」は、思い込みと合致しない状況に対する態度が顔(表情)に出ることを意味した。一方、3.2.2物事との組み合わせの「渋い」は、返事、内容、払い、見通し、態度などの全般的な人間活動の領域を主体にし、要求・願望が、生じた事態と合致しないことに対する態度である。3.2.1と3.2.2は形容される主体の違いはあるものの、事態に対する反応(不快)は同じである。

(68) 大西さんの「ぜひ夢をかなえてください」との申し入れに、球場側は「一塁側は三塁側に比べファウルボールが飛び込みやすい。設置するならネットそばのブルーペン横だが、熱狂的なファンが押し寄せることもあるのでここも危ない」と渋い返事。(1996.6.21.朝日新聞記事)

(69) 中国から永住帰国した残留孤児の子弟が高校や専修学校に進学しやすよう、就学資金を貸し付ける制度が四月から発足することになり、中国残留孤児援護基金と厚生省が一日、貸し付け規定を決めた。金額は月一万円で、経済的に苦しい帰国残留孤児家庭にはきわめて渋い内容。(1985.3.2.朝日新聞記事)

(70) それは実力によるものではなく、顧客のほうに「外資系損保は事故がおきた時の保険金払いが渋い」という誤った先入観があり、外資との契約に二の足を踏むからだ。(1999.8.24.毎日新聞記事)

(68)は「大西さん」の一塁側にも車椅子席を作ってくださいという要求を前提にして、球場側では危険性を理由に「大西さん」の要求を拒絶する。その拒絶の返事は大西さんの要求に反する事態であり、それを「渋い」と形容している。(69)は、残留孤児家庭は、貸付制度ができたことは厳しい家計が助けられるという期待がある。しかし、その内容が月1万で期待通りに家計を助けるほどの金額ではないという事態が生じ、この内容を「渋い」としている。(70)は、保険料を支払う人が保険金を円滑にもらうことを望むのを前提としている。しかし、保険会社は保険金を支払うことを躊躇うという先入観が存在し、その保険金を支払いたがらない会社の態度を「渋い」としている。

3.2.3 「食い」との組み合わせ

「食い」との組み合わせは3.2.1「顔(表情)」との組合せのように限定された対象との組み合わせであり、特に釣りに対する事前情報を共有していない人の間ではその意味が分かり

にくい例でもある。

(71) 高級魚のサヨリを食べたくなり、8月3日、妻のタイ子を連れて周防大島に出かけた。だが、台風10号の影響でしけたため食いが渋い。土居と実績のあるポイントを回ったが全く釣れず、最後に向かったのが棕野漁港だ。(2012. 8. 23. 朝日新聞記事)

(72) 全体に食いが渋い。佐田岬半島一帯で10～15センチのゼンゴが釣れるが、保内町から伊方町にかけての宇和海側で20センチ前後の小サバと15～20センチのキスがぼつぼつ。コウイカは20センチ前後がたまにあがる程度。(2012. 6. 15. 朝日新聞記事)

(71)はサヨリがたくさんかかることを期待するが、台風の影響で海がしけたためサヨリが食いついてこないという状況で、「食いが渋い」は「不漁である」ことを意味する。この用法も他の態度の形容の用法と同じく、期待する事柄がある。しかし、何らかの理由で事態がうまく進まない、それで不快であるという構造をなしている。この構造を知っているとはいえ、釣りをする人の中で通用される言葉という社会的な文脈、つまり共有する情報を理解しないとその意味が分かりにくい表現でもある。(72)は、「宇和海側で20センチ前後の小サバ、15～20センチのキスがぼつぼつ、コウイカは20センチ前後がたまにあがる」ことをみて言語主体が「食いが渋い」と表現した例である。この表現は、その地域の通常の漁獲量を事前に知り、それを基準に不漁であることを意味しており、単純に言語主体の期待より不漁であることを意味するのではない。「顔(表情)」、物事との組み合わせの場合が言語主体の期待・願望を基準にしてそのズレを形容するとしたら、「食い」との組み合わせの場合は言語主体の期待・願望というより「共有する情報」が基準になりそのズレを形容する。

3. 2態度の形容における「渋い」は、言語主体の要求・願望があるものの、相手、あるいは状況などの妨げになる要因で期待外れの事態が生じたことに対する捉え方、態度とまとめられる。

態度の形容 { (期待される事柄) 要求・願望の円滑な展開
(生じた事態) 妨げによる期待外れ
(反応) 不快

3.3 モノの動き・ありよう

「モノの動き・ありよう」は、具体的なモノの動きや状態が円滑さを基準にそうでないさまを表す。

- (73) ネジが渋くなっているとトルクレンチも意味がない。クランプのボルトは規定トルコで締め付けるのが基本だが、ネジ自体がサビていたり、カラカラで動きが渋くなっていると、トルクレンチも適正に数値を計測できない。(菅野真司(2005)『GARRRR』)
- (74) 一部の外車などは、アクセルケーブルの取り回しが複雑となり、古くなると動きが渋くなったり、アクセルペダルそのものの位置が悪く(ブレーキとアクセルが同時に踏めるほどペダルの間隔が狭い)、AT車などは暴走の原因になったりしている。(国沢光宏(1990)『愛車学』)

(73)は、ネジが滑らかに回ることを前提にした場合サビなどの理由で円滑に動かないことを、(74)もアクセルケーブルの動きが滑らかに動かないことを意味する。「モノの動き・ありよう」における「渋い」は二つ以上の組み合わせになっている物の動きが円滑でないさまを形容する。

モノの動き・ありよう { (期待される事柄) 物の動きが円滑なさま
(生じた事態) 物の動きが円滑でない
(反応) 不快

「渋い」における「モノの動き・ありよう」は、「甘い」の「モノの動き・ありよう」と対立関係にある場合がある。「渋い」が物の動きに余裕がなく円滑に動かないことを形容し、「甘い」は物の動き(状態)に余裕があって望んだ動き(状態)には至っていない不十分なことを形容する。

- (75) 岩谷産業によると、今年10月以降、わずかに漏れたガスに火が付く事故が東京都で2件、愛知、三重両県でそれぞれ1件発生、けが人はなかった。ボンベと接続する部品を固定するねじの締め付けが甘いことが原因。(2014. 12. 10. 毎日新聞記事)

(75)はガス漏れの事故の原因を「ねじの締め付けが甘い」とし、言語主体が望んだ状態(締め付けの状態)に至っていない余裕があるさまを形容する。余裕があるといっても締め付けが不十分であって決して快ではない。この「甘い」は(73)「ネジが渋い」と逆の事態を形容している。「甘い」は動きや状態が言語主体の望んだ基準に至っていないことを、「渋い」は動きが滑らかでないことを形容する。二つの語の関連性はなさそうに見えるが、(73)と(75)のようにある側面では逆のことを形容する場合が出てくる。「甘い」と「渋い」は、意味的な「対義関係」ではなく、一部の側面でのみ対立関係をなす。

3.4 様態に対する評価

ここまでは、ある前提・基準と生じた事態が合致しない状況に対する不快の反応であった。しかし、「様態に対する評価」の場合は基準と合致しないことが快であり、その対象を高く評価する意味を表す。かつ、評価を下すときには、一般の美意識と合致しない美意識が基準になっており、味覚を表現する形容詞「渋い」が他の言語では見られない意味を獲得するのもこの美意識が基準になるから可能であると考えられる。美意識というのは、美を感じ理解する心の働きであり、特に「渋い」の場合は「寂び・侘び」²⁵という美意識、つまり、「閑寂ななかに、奥深いものや豊かなものがおのずと感じられる美しさ」と「貧相・不足のなかに心の充足をみいだそうとする意識」という文化や経験によって美と感じられることを言う。この用法の対象としては色彩、音、人物、モノ、人の行動などがある。

(76) 草木染めの色は一様ではない。あの場合、こころを落ち着かせる深緋の色もあれば、柑子色もある。弁柄といってもいい、渋い色もある。(辰濃和男(2003)『「私流」を創る』)

(77) 金をかけて目立たぬように渋く見せかけているが、誇り高い職人の手によって、こつこつとつくり上げた手作りの裏である。(森村誠一(2004)『野生時代』)

(76)の渋い色は弁柄色で暗い赤みを帯びた茶色を表し、この色を「渋い」と評価した。色彩を評価する際に華やかで鮮やかな色がいいものと評価するのが一般的な美意識としたら、「渋い色」は鮮明でない、濁った色、目立たない色という特性を持つ色である。一般的な基準から外されている色を文化や経験に基づいていいものとして評価する。ここでいう評価

²⁵ 「わび」と「さび(寂)」は『日本大百科全書』から引用。

の意味は、言語主体の物事の価値付け要素に対する主観的な判断であり、物事が持つ真善美の価値に対する快の感情である。(77)は車に対する評価である。普段は金をかけた分、目立つのがいいものであるが、目立たないように作ったにも関わらず、誇り高い職人が作っただけの趣があると評価している。

さらに、こういう評価は具体的な色、モノのみならず(78)のように目に見えない具体化できないものにも使われる。

(78) あの年、実は他の球団から来た2人の選手が、決して派手でない渋い活躍をした。ショートで2番を打った鈴木武さん、センターに入った渡辺清さんだ。鈴木さんは近鉄から、渡辺さんは阪急から来た選手だったが、見事にチームのウイークポイントのポジションを埋めて、センターラインが強化できた。(近藤昭仁(2004. 9. 5. 号)『Yomiuri Weekly』)

(79) 端正な顔立ちの二枚目俳優だ。大ヒットドラマ「DOCTOR」では医者役、間もなく放送の「切り裂きジャックの告白～刑事犬養隼人～」では刑事役で渋い演技をみせるが、実際の沢村は、「どんなに真面目な会話をしていても着地点は必ず”下ネタ”になっちゃう」と周囲の笑いを誘う三枚目キャラだ。(2015. 4. 13. 朝日新聞記事)

(78)は、派手さが欠けているプレースタイルではあるがチームの弱点を埋めた立派なプレーを「渋い活躍」と評価している。(79)も沢村という俳優の演技を実際のキャラクターと対比しながら「渋い」と評価している。ドラマでの演技は実際とは反対で寡黙で重く、枯れた演技、言い換えれば明るさ、派手さなどは消えているが、かえって深い味わいがある演技のことを言う。

様態に対する評価の「渋い」の意味特徴は、派手さ、新しさ、明るさなど一般的にいいものと呼ばれる要素は欠けているが、かえって地味、目立たなさ、落ち着き、円熟さ、などの要素が滲み出て立派という、快の反応であるとまとめられる。

様態に対する評価 { (期待される事柄) 一般的な美意識
(生じた事態) 一般的な美意識とは合致しない
(反応) 文化・経験によって美であり快となる

「渋い」には一般的な美意識と認められる明るさ、鮮やかさ、派手さなどの要素は欠けているが、地味、暗さ、鈍さ、円熟さなどの要素によって美であり快と評価したものである。しかし、このような地味、暗さ、鈍さなどの要素が欠落して、評価のみが転義する(80)のような例が出てくる。

(80) スライド式指紋センサーを搭載し、セキュリティ機能もバッチリだ。ツートーンカラーのデザインも渋いぜ!(モリタタダシ(2004)『週刊プレイボーイ』)

(81) でも、実際に昭和歌謡を聴いて育ってきたわけではない。「周りに『それっばい』って言われてから初めて聴いたら、むっちゃええし、演奏もかっこええし、ムーディーな感じがめっちゃ好き。渋いなーって思いますね」と森雅樹。(2001. 12. 13. 朝日新聞記事)

(80)の「渋い」は、携帯電話は一般的に単色であるという社会的な前提がある。(80)の携帯電話は前提とは違ってツートンカラーをしているところが「格好いい」という意味を「渋い」が形容する。(80)のような文が成立するのは、「渋い」が美として評価する「地味、暗さ、鈍さ、など」の要素は欠けているが、「前提(基準)になる事態と違う価値がある」という評価のみが残り、「格好いい」という意味に転義が生じる。(81)の「昭和歌謡」も、「今の時代に流行っている歌謡と違った雰囲気がいい」と評価のみの転義である。

さらに、「様態に対する評価」は味覚表現の形容詞において「甘い」と「渋い」でのみ観察される用法でもある。「甘い」も「渋い」も両方形容される対象を快と評価する点では類似しているが、その転義の仕方は異にしている。2章の「快い」という評価は「様態に対する評価」と「味覚の形容」において共通的に見られる意味項目である。しかし、「渋い」の場合、「期待(基準)外れ」という意味項目から「一般的な美意識とは合致しない(外れる)が快である」と転義された結果である。

(82) 今夏に放映された電動工具メーカーのこのCMが「斬新な内容で一度見たら忘れられない」と評判になった。あまりにベタなコピーだが、どう受け止めていますか。「子どものころにからかわれて嫌だった名字に感謝することができました」且元のしわも渋い還暦を迎えた「いい男」は続けて言った。(2013. 9. 20. 毎日新聞記事)

(83) 「甘い笑顔に癒やされるけど、綺麗なシックスパックの腹筋とキレのあるダンス。

頭脳明晰で大手企業の内定をもらっていたけど、辞退してまで夢を追いかける勇気ある決断。安定志向が強い同世代のなかで、努力で夢を掴みとった男気など、“ギャップ萌え”がたまらないんです」(沖さん)ギャップといえば、小犬のような甘いマスクでいながら、大のお酒好きで知られる。(2016.6.3.朝日新聞記事)

(82)は草刈正雄について語る文で「目元のしわ」を「渋い」と形容し、「いい男」と快の評価をしている。「目元のしわ」は一般的な美意識の基準とは合致しないがかえって円熟味などを感じさせプラス評価になる。(83)の「甘い」は「笑顔、小犬のような」という文脈から柔らかい印象を形容しており、一般的な美意識の基準から見ると(82)よりは合致している。

「渋い」と「甘い」は美意識の基準はズレてはいるものの、両方「快(プラス)」と評価している。

4. 「渋い」の多義構造

「渋い」のいずれの用法にも期待される事柄、生じた事態、反応という三つの項目が構造化されている。

「味覚の形容」には、「期待される事柄」が存在し、何かを食べるという動作が持つ「食品を口に入れて飲み込む」という一連の過程が前提になる。この一連の過程を前提にした際に「渋い」は、この動きを阻害する要素(渋味)があり、嚥下を突っ返す口中感覚である。この感覚で食品に対して不快と感じたり、経験の場合によっては不快感が薄くなったりする。

「態度の形容」は、「顔(表情)」、「食い」、全般的な人間活動を対象にし、期待される要求・願望が円滑に展開するのを望むものの、相手、あるいは状況などの妨げ要素により期待外れの事態が生じる。その事態に対する不快の評価という構造をなしている。

「モノの動き・ありよう」は、二つ以上の組み合わせになっている具体的な物が円滑に動くのを期待しているものの、何らかの理由で円滑に動かないさまを表し、その事態に対する不快の評価を伴う。

「様態に対する評価」は、色彩、音、物、人などを主体にし、その対象に対する言語主体の価値付けである。一般的な美意識を判断基準にした場合「渋い」は目立ち、派手さ、輝きなどの要素が欠けており、美という快ではない。しかし、こういう一般的な美意識とは合致しないが、かえって地味、円熟さ、奥深さなどの要素が滲み出て、言語主体の文化や経験が基準になり快と評価する。

以上の四つの用法には、「期待される事柄」、「生じた事態」、「反応」という構造が保たれ

ており、それをまとめたのが<表7>である。

<表7> 「渋い」の意味構造

用 法	期待される事柄	生じた事態	反応
味覚の形容	食品が円滑に 飲み込まれる	渋味、嚥下を突っ返す感覚で うまく飲み込めない	不快
態度の形容	要求・願望の円滑な展開	妨げによる期待外れ	不快
モノの動き・ありよう	動きが円滑なさま	物の動きが円滑でない	不快
様態に対する評価	一般的な美意識	一般的な美意識からの外れ	快

「渋い」は「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」という四つの用法があり、各用法はそれぞれ異なる意味内容を持っていることを確認した。では、四つの用法は互いに関係があるのか、また、「渋い」はいかなる多義構造をしているのか。

「渋い」の「味覚の形容」には、渋味、嚥下を妨げる感覚、不快という仕組みからなっており、この意味項目から味覚の意味を消去すると、「展開が円滑でない」と「不快」という意味項目しか残らない。

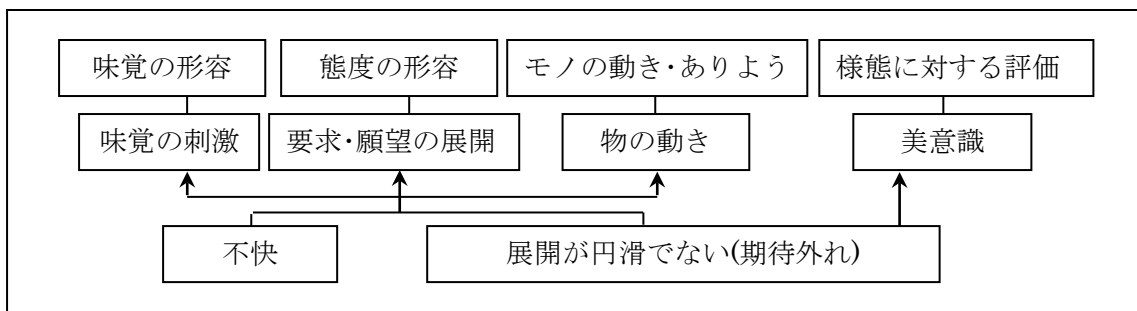
「態度の形容」は、言語主体の要求が望んだとおり展開しない事態と、その事態に対する不満の気持を表す。「展開が円滑でない」、「不快」という意味項目が転義され、物事一般を対象として形容することで、「要求・願望が円滑でなくて不満である」という新たな意味が生まれ出される。

「モノの動き・ありよう」の「ネジが渋い」は、ネジが滑らかに回らないことを意味する。「展開が円滑でない」と「不快」は、物の動きを形容する際には「滑らかでない」という意味へ転義される。

「様態に対する評価」、例えば(78)「渋い活躍」は、野球選手の派手なプレーではないがチームの弱点を埋めた立派なプレーを表す。「態度の形容」と「モノの動き・ありよう」では、「展開が円滑でない」という意味項目が言語主体の期待外れであったため「不快」の意味項目につながった。しかし、「様態に対する評価」の場合は、「目立つ、派手、新しさ、明るさ」などと言われる一般的な美意識とはズレているものの、あえて「地味、目立たない、落ち着いた、円熟」などの要素が言語主体にとって高評価をもたらす。すなわち、「様態に対する評価」の場合は、「展開が円滑でない」は転義されても、「不快」は転義されない形になる。

以上のことをまとめると、「渋い」は「展開が円滑でない」、「不快」という共通の意味項目を基にして、形容する対象の性質によってその意味が変わる、〈図12〉のような構造である。

〈図12〉 「渋い」の多義構造



5. 「渋い」と「甘い」の関係

本節では「渋い」の「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」という四つの用法が「甘い」のそれと関係していることを簡単に触れ、味覚表現の形容詞としての「渋い」の位置づけを確認する。

「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」という四つの用法が観察されるのは、五つの味覚表現の形容詞のうち「甘い」と「渋い」のみである。「甘い」と「渋い」の関係について、「味覚の形容」と「態度の形容」は章を変えて7章で詳しく述べることにする。「甘い」と「渋い」は、3章で取り上げた「甘い」と「辛い」のように意味的な関連性を持つ関係ではないため、本章の3.3モノの動き・ありようと3.4様態に対する評価で、一部の対象が対立と類似の関係にあることを少し触れた。それを簡単にまとめると、

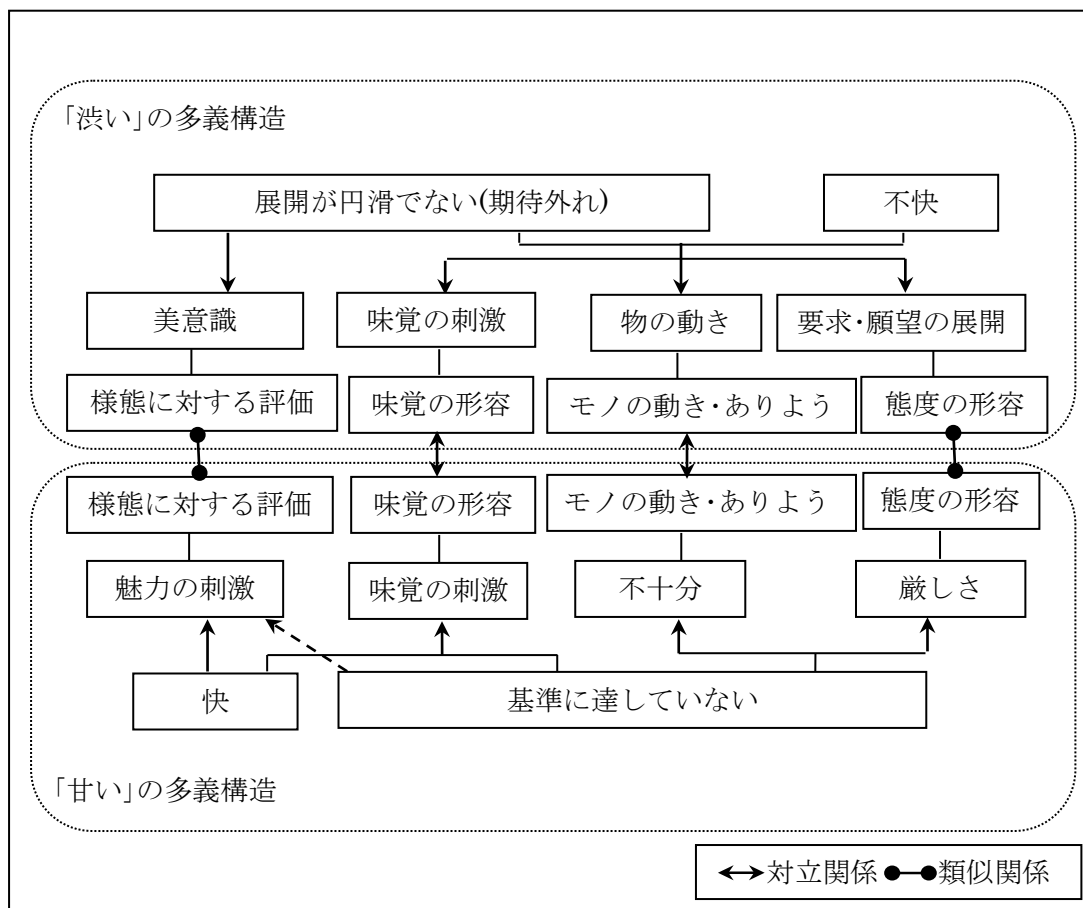
「甘い」の「モノの動き・ありよう」用法は、物の動き(状態)に余裕があって望んだ動き(状態)には至ってない不十分なさまを形容する。

とあり、物が滑らかに動かないさまを形容する「渋い」とは逆の事柄を形容し「渋い」と「甘い」が対立関係にある。また、

「甘い」の「様態に対する評価」は味(甘味)が持つ快の評価が共通し、ある物(あるいは事柄)の様態を快と評価する。場合によってはその様態が一定の基準に至ってないことも意味するが快という評価は変わらない。

とあり、「渋い」は、一般的な美意識とは合致しないが、その点がかえって評価されて快となる。「渋い」と「甘い」が転義の性質は多少異なっても「快」という評価の面では類似している。このような「渋い」と「甘い」の関係は<図13>のようである。

<図13> 「甘い」と「渋い」の関係図



「渋い」と「甘い」は四つの用法において対立あるいは類似の関係にあり、五つの味覚表現の形容詞²⁶のうち「甘い」とともに幅広い範囲の対象を形容した。2章で「甘い」は味覚レベル(味覚の形容)で他の形容詞とは区別される特別な立場にあることを指摘した。そして3章で

²⁶ 五つの形容詞の用法別の表れ方は以下のようなものである。

	味覚の形容	態度の形容	モノの動き・ありよう	様態に対する評価
甘い	○	○	○	○
辛い	○	○	×	×
渋い	○	○	○	○
苦い	○	○	×	×
酸っぱい	○	×	×	×

はその「甘い」と「辛い」が味覚レベルで対義関係にあることも明らかにした。ところで、味覚レベルを離れた多義語として五つの形容詞は注25の表と〈図13〉で示したように「甘い」と「渋い」のみ四つの用法がありつつ、互いに対立あるいは類似の関係をなしていた。味覚レベルでは対義になっていない「渋い」が転義した際には「甘い」と対立(類似)の関係になっている。

1章の生理学における味覚の体系でも述べたが、生理学は舌にある味蕾という感覚器官で味を感じ、舌のどの部分で感じるかによって味覚を区別する。こういう基準から渋味は収斂感という独特な感覚が伴っており基本味からは除外されている。しかし、「渋い」は言語レベルでは味覚に準じて味覚表現の形容詞としてされており、なおかつ、多義語化される際には「甘い」と対立(類似)関係に残るのは「渋い」のみである。

6. 本章のまとめ

本章は「渋い」を「味覚の形容」、「態度の形容」、「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」という四つの用法に分けそれぞれ用法の意味構造を明らかにした。なお、四つの用法は「展開が円滑でない」、「不快」という意味項目を基にし、形容する対象の性質によって意味が変わることで、「渋い」を多義化した。さらに、味覚レベルで「甘い」と対義関係ではなかった「渋い」が転義し多義化した際には対立(類似)関係にあることも解明した。

第5章 「苦い」の多義構造

1. 本章の目的

本章の目的は「苦い」を「味覚の形容」、「態度の形容」という二つの用法に分け、その意味構造を解明することで多義構造を明らかにすることにある。

2. 先行研究および問題提起

「苦い」の多義を対象にした言語研究は管見の限り、辞書レベルの記述と、小出(2003)、山添(2003)、武藤(2015)がある。

まず、辞書における「苦い」の記述は、以下のようとなり、その意味は「不快な味覚」、「不快」、「つらい」とまとめられる。

〈表 8〉 「苦い」の辞書記述

『日本国語大辞典』	『広辞苑』	『学研国語大辞典』	『現代形容詞用法辞典』
①味覚について、舌を刺激し、不快な感じのあるさま。	①舌に快くない味を感じる。	①(食物などを口にいったとき)顔をしかめたくくなるような味を舌に感じる。	①飲食物の味が苦い様子を表す。「苦い」味を不快な味と受け取ることが多いので、「まずい」という意味でマイナスイメージをもちやすい。
②不快である。面白くない。不機嫌である。	②面白くない。不愉快である。	②不快である。不機嫌である。	②つらく不快である様子を表す。
③つらい。くるしい。また、痛み、悔いなどを伴った気持であるさま。	③つらい。くるしい。	③(あとで思い出すのもいやなくらいに)つらい。くるしい。	

辞書の記述は大きく二つの問題点がある。一つ目は、味覚としての「苦い」の記述が挙げられる。四つの辞書は苦味について「不快な感じの味」と記述する。味覚を表す形容詞「甘い、辛い、渋い、苦い、酸っぱい」の中で、味覚が人の好みを強く反映するものであるとしても、言語レベルで「甘い」以外の味覚は不快と分類される。そうなると、①の意味は「辛い、渋い、酸っぱい」にも当てはまる記述になり、三つの形容詞と「苦い」の弁別性がなくなる。

二つ目は、①、②、③の意味間の関係が把握しにくいことである。①は「不快な味覚」であり、②は「不快」である。①と②は「不快」という共通の意味でつながっているとしても、③の「つらい」は①、②の「不快」といかなる関係にあるのか以上の記述だけでは十分な説明が行われていない。

次に、「苦い」の意味間の関係まで記述する研究について確認する。

小出(2003:7)は、「苦い」の意味を「味覚」、「記憶、経験類に対する表現」、「他者の表情に対する表現」と分類する。この三つの意味間の関係については、「苦いものを味わったときの感覚と類似しているというメタファー的な捉え方も可能であるが、内的事象の把握に際しての感覚の横すべり(共感覚)のあることも否定できない」と記述する。

山添(2003:226)は、

「苦い」は、味覚の要素のみが色濃く関係する。それ以外の要素は、比喩的な展開でも関わらないようである。「苦い思いを飲み込み」「苦い教訓をはんすうする」などという。「苦い」は、明らかに味覚のメタファーに支配されている。すなわち、一般的に言えば、「経験は食べ物である」という認識が、日本語の「苦い」の比喩展開を規定する。

(下線は引用者)

と説明する。ここで確認しておきたいのは「味覚の要素のみが色濃く関係する」という部分である。「苦い」を bitter と比べ、bitter の語源 bit(噛む、刺す)から、「なにかに噛まれ、刺され、肌を切られるという攻撃的で不快な刺激のイメージが bitter にはあるようだ。このイメージが、bitter の「怒り、憎悪」「程度の強調」「気候の激しさ」の意味ネットワークを統率する」とし、それに反して「苦い」は「味覚の要素のみが色濃く関係する」と指摘した。味覚以外の抽象的な領域で、例えば、ある経験主体が苦さを感じる時が「苦い経験」と説明する。しかし、ここでいう「苦さ」というのは具体的にいかなる意味をもつのか、「味覚の要素」を「苦い物を口にすれば、誰もが不快なところもちになる」(p. 219)と説明することで、抽象的な領域での「つらい、不愉快な」意味が生み出されると言えるのか、という疑問が残る。要するに、「苦い」の味覚での意味と、抽象的な意味とのつながりに関する説明が不十分である。

次に、武藤(2015)は、「苦い」の意味を以下のように四分類する。

①別義1(基本義): <熊の胆、魚の腸などが持つ苦みに対する><不快な><味>

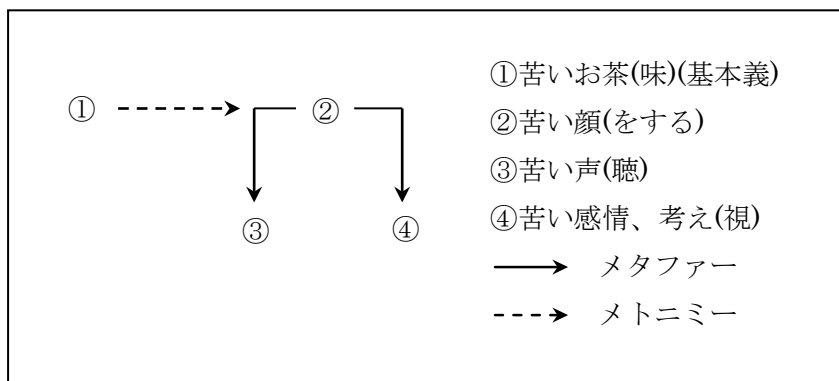
②別義 2 : <つらさや苦悩感が><表情に表れているさま>

③別義 3 : <つらさや苦悩感が><声に表れているさま>

④別義 4 : <人の行為やある状況によって引き起こされる><つらさや苦悩感>

別義 2 は「苦いものを食べた後、不快な顔になるという経験に基づくメトニミーに基づくものである」(p. 157)と説明し、別義 3 は不快感が聴覚的意味へと転用するとする。また、別義 4 は、「別義 2 と別義 3 から進んでさらに、つらさや苦悩感そのものを表すようになる」(p. 159)と記述し、<図 14>のように多義構造を説明する。

<図 14> 武藤(2015:161)「苦い」の多義構造



ここで注目したいのは、味覚(①)から抽象的な意味(④)への転義のありようである。武藤も山添(2003)も味覚から抽象的へ転義するという主張は一致しているものの、そのありようには随分違いが見られる。山添(2003:223)は、「「苦笑い」や「苦々しい表情」は、「苦い経験」というプロセスを経た結果である。苦い経験が苦い表情を生む、という関係である。ここでは、「苦い」の修飾関係がプロセスから結果の方に移っている。これは、ずらして意味を伝えるというメトニミー(換喩)の ^(ママ)パタン のひとつである。」とし、味覚から抽象的な意味へ、またそれから「苦い表情」へと意味が変わっていくと述べる。これは武藤と逆の方向で転義を説明することになり、メタファーとメトニミーで多義を説明することは、研究者の見解によって様々なパターンが在り得ることを示唆する。また、別義①から別義②への説明を「基本義における不快感がさらに、<内心のつらさや苦悩が表情に表れているさま>を表すようになる」(p. 157)としているものの、山添のところでも指摘したように、味覚の<不快な>が<つらさや苦悩>といかなる関係でつながっているかの説明が不十分である。味覚で<不快>の意味特徴を持つ「辛い、渋い、苦い、酸っぱい」のなかでなぜ「苦い」のみが「つら

さ、苦悩」へ意味の転用が生じるのか、という疑問は未だに解決していない。

次節からは、「苦い」を「味覚の形容」と「態度の形容」という二つの用法に分け、それぞれの用法が構文と意味構造でいかなる相違点と共通点を有しているかを考察する。

3. 「苦い」の二つの構文

「苦い」が持つ意味(構造)については節を改めて記述することにし、3 節は「味覚の形容」と「態度の形容」における「苦い」の文中での構文的機能を比較する。

「苦い」の「味覚の形容」には、連体用法(「苦い菓」)、連用用法(「苦く思う」)、述語用法(「菓が苦い」)が一貫して観察される。一方、『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL(basic adjectives)』も指摘したように、「態度の形容」の場合は連用用法、終止用法は観察されず、連体用法(「苦い記憶」)のみが観察される。

- (84) 近くの喫茶店に入って、苦いコーヒーを一口だけ飲んでわきへ押しやってから、真弓は訊いた。(赤川次郎(1987)『盗みに追いつく泥棒なし』)
- (85) 本当に私はいろいろな人からいろいろなことを教えてもらった。レタス栽培で化学肥料を使いすぎると、軸の部分が苦くなるというのもその一つだ。(横森正樹(2002)「夢の百姓」)
- (86) 園児たちは声を合わせて「七草ばやし」を歌った後、両手を合わせた。撫養大輔ちゃん(6)は「ちょっと苦いけど昆布を入れたらおいしい」と言って、元気良く七草がゆを平らげていた。(2017. 1. 7. 毎日新聞記事)

(84)から(86)まで、それぞれ「苦い」が連体用法、連用用法、終止用法として用いられる例である。修飾する対象、あるいは形容する対象の語はいうまでもなく飲食物になる。「コーヒー」、「レタスの軸」、「七草がゆ」の味をそれぞれの用法を用いて形容している。(84)の「苦い」は「コーヒー」の属性を表す限定(非限定)用法としても、あるいは「コーヒー」に対する言語主体の評価としても解釈できる。(85)の連用用法は、「結果の副詞」として、つまり、「レタスに化学肥料を使いすぎる」という事態の結果「苦くなる」ことを意味する。終止用法は連体用法のように対象の属性を表す意味としても、言語主体の評価としても解釈できる。前者は「一ガ苦い」、後者は「私ハ一ガ苦い」と区別されようではあるものの、(86)のように感覚(評価)の持ち主である「私ハ」は省略されるのが一般的であり、両者の構文上の違いはない。

一方、「味覚の形容」の場合は形容する対象が飲食物という具体的なモノであるのに対して、「態度の形容」の場合は、顔(表情)と記憶、体験、思いなどの抽象的なコトが対象になる。そして、「態度の形容」は以下の例のように主に連体用法において観察される。

- (87) 明治七年に琉球島民殺害事件をきっかけに台湾に出兵した西郷従道の三千六百名の将兵のうち六百名近くがマラリアで病死したという苦い経験があったためである。(鹿島茂(2003)『関係者以』)
- (88) JAいわて中央によると、コメの生産量は、「あきたこまち」が例年の約半分、「ひとめぼれ」も7割に達すればよい方だという。冷夏の影響などで稲の成長が遅れたため、収穫も例年より1カ月ほど遅い。矢巾町広宮沢の村松富雄さん(68)は「農家にとっては、収穫が1年で一番の楽しみなのに、おもしろくないな」と苦い表情だった。(2003.10.1.朝日新聞記事)

(87)、(88)の「苦い」は「経験」、「表情」という名詞を修飾する機能である連体用法として使われている。「六百名近くがマラリアで病死した」事態と、「冷夏の影響などで収穫量が減る」事態に対する言語主体の捉え方が、それぞれ「苦い経験」、「苦い表情」で表現されている。つまり、「苦い」は、文中でそれぞれの事態に対する「経験」と「表情」を限定する機能であると言える。「味覚の形容」における連体用法が場合によっては限定用法でも非限定用法でも機能するのは対照的である。

「態度の形容」は主に(87)、(88)のような連体用法で表れる。とはいうものの、連用用法がないわけではない。国立国語研究所のオンライン検索システム『NINJAL-LWP for BCCWJ』²⁷で「苦い」を検索してみると、「苦く+動詞」が全50例で、その中で「苦く笑う」が10例である。「苦く+動詞」の50例が「味覚の形容」と「態度の形容」の合計であることを考えると「苦く笑う」の10例は少なくない割合である。

- (89) 「日本で歯科医師をしている、村瀬一明です」一明は英語でそう自己紹介し、挨拶に握手を求めて手を差し出す。しかし、「タロー、今夜はいっぱい楽しんでくだサイ」握手を求めた一明を、ウイルは完全に無視したのだ。まるで視界に入らないかのように。一明は肩を竦め、苦く笑った。(六堂葉月(2002)『ケダモノは二度笑う』)

²⁷ <http://nlb.ninjal.ac.jp/>(『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のオンライン検索システム)

(89)は、握手を求める一明を無視するウイルに対する一明の態度を「苦く笑った」と形容する。「態度の形容」における「苦い」の連用用法は、動きを特徴づける「様態の副詞」である。つまり、「笑う」という動き(動作)の展開過程の諸特徴の中で「苦く」と限定、あるいは特徴づけている。「味覚の形容」の連用用法が結果の副詞として機能するのに反して、「態度の形容」は「様態の副詞」として機能する。一方、「味覚の形容」の連用用法は多様な動詞(する、なる、感じる、炒める、など)を修飾するのに比べて、「態度の形容」の場合は「苦く笑う」という極限られた動詞としか共起しないことを観察した。

以上で、「味覚の形容」と「態度の形容」の構文的な機能について確認した。4節からは「苦い」の意味構造について「味覚の形容」と「態度の形容」に分け、分析する。

4. 「苦い」の意味構造

4.1 味覚の形容

「味覚の形容」は食べ物を対象にし、その対象を「苦い」と形容する用法である。「苦い」は飲食物の属性を語ることも、飲食物に対する言語主体の評価を語ることも可能である。両者を構文上で区別することは容易ではない。本研究は属性としての「苦い」も、評価語としての「苦い」も含めて「味覚の形容」という用法にまとめてその意味構造について考察する。

「苦い」というのはある飲食物の属性(あるいは飲食物に対する評価)である以前に、味覚というのは、人の舌から感じられる感覚である。というわけで、生理学とは離れられない分野であるため、「味覚の形容」の意味構造を探る前に、「苦味」について生理学の観点で少し触れておく。

山本(1996:61)は、「苦味」について次のように説明する。

アルカロイド、アミノ酸など多種類の疎水性物質によって生じる非常にいやな味であり、ヒトに限らずすべての動物が忌避する味である。疎水性は、多くの毒物がもつ共通の性質であるため、苦味は生体に有害な物質を感知し、その摂取を防止するための信号である。

一言で、「有害な物質があるため忌避する味である」と押さえられる。

次に、言語レベルにおける「苦い」が使われる例を挙げ、それぞれの意味を分析する。そして、分析した意味から「味覚の形容」の意味構造を組み立てる。

(90) グジとは甘鯛のことで、身が柔らかくて崩れやすいから、皮を取らずに塩をして焼くのが、ならではの調理法。食膳にも皮付きのまま、ただし頭は除いて出すので、それが私の口に福をもたらした。グジの頬肉の甘みが苦い緑茶に溶けると、どんなスープにも勝る絶妙の味わいだったのを思い出す。(2017. 3. 4. 朝日新聞記事)

(91) 「この塊一つに八十万円の値が付いたんだ」と阿仁町打当のマタギ、鈴木米孝さん(45)が金庫から熊の胆を大事そうに取り出した。石のように硬く、無臭。つぶしたきん着のような形で長さ十七センチ、幅十センチ、厚さは一センチほど。黒焦げのステーキのように見える。砕いた内側にはツヤがあり、勧められるまま口にしたら苦い、苦い。「良薬、口に苦し、だべしや」と仕留めた熊の敷物の上で米孝さんと松治さん(75)が豪快に笑った。(1996. 1. 29. 毎日新聞記事)

(90)は、「緑茶」に含まれているカテキン、テオフィリンなどの成分の味を「苦い」と形容している。(91)も、「熊の胆」の外形を説明したあと、主成分である胆汁酸代謝物のタウロウルソデオキシコール酸という化学物質を「苦い」と形容している。このように、カフェイン、ニコチン、カテキンなどの苦味成分が含まれる飲食物の味(属性)として「苦い」が用いられる。なお、(91)の「苦い、苦い」は熊の胆の属性(味)のみならず、言語主体が不快の評価としての意味も文脈から読み取れる。次の(92)では「苦い」における不快の意味合いが「飲めない…ぶつぶついいながら」から読み取れる。

(92) そんな民子と笠木と中杉を巡るやり取りに気づいていたのかどうか、志島はひとり窓辺の椅子で珈琲をすすりながら、「これはなかなか苦みの利いた味ですね」と呟いておった。彼は砂糖もミルクも入れなかったから、余計にそう感じたんじゃないかな。一方、入口の側のソファに座っていた矢尾は、「これじゃ苦くて飲めない」とかぶつぶつ云いながら、更に角砂糖をひとつ追加で入れていた。(三津田信三(2002)『作者不詳』)

「苦い」に伴う不快の評価は3章と4章で確認したように「辛い」と「渋い」にもある。だとすると、「辛い」、「渋い」、「苦い」の不快の評価には弁別性がないのであろうか。まず、「辛い」と「渋い」の不快は、舌の感覚であった。「辛い」は「舌を刺すような刺激」、「渋い」は「嚙

下を阻害する感覚」による拒否反応として不快になっており、すなわち、純粹な味覚というより舌や口腔内の感覚(触覚)に起因する反応である。一方、「苦い」の場合は、「辛い」と「渋い」のような舌触りの感覚は伴わないが、「つらさ」という肉体的な苦痛を伴うことが(93)から確認できる。

- (93) 臥薪嘗胆-固い薪の上に寝たり、苦い胆を嘗めたりして、辛い立場に身を置いて仇を討つこと。(村松暎(1996)『「四字熟語」読む辞典』)

「臥薪嘗胆」という四字熟語の説明で、「固い薪」の上にいるのと、「苦い胆」を食べるのは両方「つらい立場」である。「苦い胆」を食べるとつらくなるという意味で、「苦い」の不快は、「つらさ」に起因すると言える。とはいえ、全ての「苦い」に「つらさ」があることは意味しない。

- (94) ああ、気持ちよかった、ああ、極楽だ、たまんないねえ、そう言いながら、茹で蛸みたいに赤くなっておとうさんは戻ってきて、ビールを飲みはじめた。ハルも飲むか、上機嫌でおとうさんが言い、私はうなずいてコップに半分そそがれた液体は、電球にかざすときらきらしあわせそうに光り、小さな泡が誘うようにはじけているので、夢みたいな味なのだろうと思ったが、冗談じゃないくらい苦くてくさい液体だった。思わず吐きだす私を見ておとうさんが笑った。(角田光代(2003)『キッドナップ・ツアー』)

(94)は同じ対象「ビール」に対して言語主体の「私」と「おとうさん」とが互いに違う評価をしている。ビールを飲んだ「おとうさん」を「上機嫌」で形容し、「私」はビールを「苦くてくさい」と形容している。このように、同じ属性の「ビール」でも人によって快としても不快としても評価されるのは、味覚というのが人の好みが強く反映される分野からである。人の好みは別として五つの形容詞の中で「辛い、渋い、酸っぱい」と共に「苦い」は不快の味覚として分類するのに問題はない。

「苦い」の「味覚の形容」用法は、「苦味成分が誘発する肉体的な「つらさ」と、それに起因する不快という評価」であるとまとめられる。

味覚の形容 { (前提) 味覚の刺激
 (形容内容) 苦味、肉体的なつらさを伴う
 (評価) 不快

4.2 態度の形容

「態度の形容」は事態の真偽は別として、言語主体が事態に対する捉え方、態度である。「苦い」の態度の形容は、対象によって「顔(表情)」との組み合わせと、物事に対する態度に二分類する。

4.2.1 「顔(表情)」との組合せ

「態度の形容」における「顔(表情)」との組み合わせは「甘い、渋い」と共に「苦い」にも観察される。言語主体がある事態をどう捉えているか、その事態に対する態度を第三者がみて「苦い顔(表情)」と形容する文である。「物事に対する態度」の場合が、例えば「苦い記憶」のように「苦い」の被修飾語に対する言語主体の態度であるのに比べて、「顔との組合せ」の場合はある事態に対する言語主体の捉え方(態度)が顔(表情)に表出される。

(95) このスーパーの青果担当者(40)は「これからが売りどきの鍋の材料の値段が上がっているのが痛い」。価格を抑えるため、カット売りやバラ売りを増やすなど対策はしているが、「時には赤字で売ることもある」と苦い表情だ。(2016. 11. 3. 朝日新聞記事)

(96) 満さんはがんに3度見舞われたが、闘病生活を俱子さんに支えられながらスポーツを続けてきた。30日は、2人とも砲丸投げに出場した。満さんは19人中15位、俱子さんは6人中1位だった。満さんは「今の調子だとこんなもの。でもくやしい」と苦い顔。(2015. 10. 31. 朝日新聞記事)

この用法の「苦い」は(95)、(96)のように「苦い顔(表情)」の前後に言語主体のセリフがあり、第三者がその時の言語主体の表情を述べる形をしている。(95)は台風や日照不足の影響で野菜の価格が高くなった事態について語る際の表情と、(96)は闘病生活の中で出場した競技で15位になった事態を語る際の表情をそれぞれ「苦い表情、顔」と形容している。両事態は言語主体(青果担当者、満さん)にとって、能力や努力を超えるなどのどうしようも出来ない不愉快な事態であり、言い換えれば、言語主体の能力や努力と事態とのズレから

感じる心理的な「つらさ」である。ちなみに、「苦い」と似た意味の「つらい」と「顔、表情」との共起関係を新聞データベースで検索²⁸した結果、「つらい顔(表情)」より「苦い顔(表情)」の方が圧倒的な用例数²⁹をみせた。

(97) もともと感情を表に出すタイプではない。ピンチで打ち取ってもほえたり、大げさなガッツポーズをしたりしない。打たれてもつらい表情や無理な笑顔はしない。淡々と次の投球に移る。この時も同じだった。(2012. 8. 19. 朝日新聞記事)

(98) 「情けない。良かったと思う球が1球もなかった」。打たれては苦い表情を見せてしまうほど余裕はなかった。広島戦の初黒星は自己最多の8失点というおまけもついた。(2009. 9. 4. 朝日新聞記事)

(97)、(98)はバッターにボールを打たれたピッチャーの表情を形容する、同じ状況で「つらい表情」と「苦い表情」とで表現している。従来の研究は「苦い顔(表情)」を味覚からメタファーによる意味の転用であるとしている。メタファー、つまり比喩(隠喩)によって表現する理由が複数³⁰あるなかで「苦い表情」の場合は「抽象の具象化」にあたると思う。中村(1971:56)は「抽象の具象化」について、

五感でとらえられる実体なら、感覚に個人差があるとしても、ある一定の広がりの中にそのイメージが収斂しやすいが、抽象的な存在の場合は、感覚に拠点をもたないため、伝達のプロセスでさらに大幅の変形・剥離が起こりかねない。具体的な語に託して伝えられる。(下線は引用者)

と説明する。(ある事態に対する)表情という抽象的なイメージを味覚という具体的な語(苦い)で表現するということになる。「苦い表情」の意味が「つらい、不快」だとすると、味覚を表す形容詞「苦い」より、もっと具体的であり直接的な「つらい」の方が適切な表現になる。

²⁸ 検索日(2017年5月2日)基準、「辛い顔」のように正規表現で検索を行った。

²⁹ 「苦い顔(表情)」と「つらい顔(表情)」の検索結果

形容語	苦い顔		苦い表情		つらい顔		つらい表情	
	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日	朝日	毎日
新聞社別用例	279	240	247	255	55	43	15	3
合計	519		502		98		18	

³⁰ 中村(1971:56)は「比喩とはなにか」でその理由を、「抽象の具象化」、「想像力の刺激」、「間接性を加える」としている。

しかし、以上で確認したように「つらい表情」より「苦い表情」がはるかに上回る用例数で使われており、これは比喩の使用理由とは矛盾する結果である。すなわち、「苦い表情」を味覚の意味からメタファーによる転用であると説明するのは適切ではない。

4.2.2 物事に対する態度

物事に対する態度は、「苦い」が修飾する被修飾語に対する言語主体の捉え方(態度)である。記憶、思い出、経験など主に人の内部事態を被修飾語として取っている。

(99) 2000年、獣医師から園長まで務めた北九州市の民間の^{いとらづ}到津遊園が来園者減少で閉園した。珍しい動物を展示するだけでは生き残れないと痛感した。その後、人工保育したチンパンジーが高さ15メートルの塔から落下死した時もショックを受けた。「野生ではありえない。違う動物に育ててしまったようなものです」市が買い取って02年に再出発した到津の森公園で再び園長に就任。苦い反省を生かし、動物の自然の姿を損なわないように心がけた。(2010.1.9.朝日新聞記事)

(100) 庶民的な魅力に満ち溢れた食べ物は、他に類例をみないであろう。庶民にとってのラーメンの魅力とは、一体どのようなことなのか、少しばかり考察してみたい。例えば、美味しくないラーメンを食べた後で、「しまったな」という苦い思いいを、たびたび経験された方もあるに違いない。(岡田哲(2002)『ラーメンの誕生』)

(101) 「船隊の諸君、…(中略)…すなわち、船隊のすべての砲と銃、そして剣を、ただちに海中へ投棄すべし。応じねば、諸君の背後の筏にも火をつけ、前後より挟んで諸君の船を焼き尽くす。猶予は鐘八つの間。一以上である」…(中略)…ついに船隊長は、苦い決断をくださった。「降伏だ」「何もせずに降伏してしまうんですか？」納得しかねている様子の軍曹に、傍らの航海士が虚ろな声で言った。「ほかにどうすることもできんじゃないか。火攻めに遭った船の地獄図を、きみは知らんのだろう。弾薬庫に詰め込んである火薬の量を考えてもみろ」(多島斗志之(2005)『海賊モア船長の憂鬱』)

(99)は動物園が廃園になった経験で「珍しい動物を展示するだけで生き残れない、違う動物を育ててしまった」という言語主体の反省を「苦い」と形容している。(100)は「美味しくないラーメンを食べた」経験を「苦い」としている。(101)も「降伏」を「苦い決断」としている。

(99)から(101)までの事態は、共通的に言語主体の経験である。その経験は、失敗したり、後悔したり、あるいはどうしようもできないなどの心理的つらさを伴う不愉快な経験である。そして、このような事態を形容する「苦い」は、「甘い」と対立関係にある場合もある。

(102) 部員7人の弱小チームだったが、19年間で県上位のチームに育て上げた。しかし準優勝21回と苦杯をなめた。この苦い経験から「昭和のスポ根ドラマのようだった練習を見直した」という。(2015.8.7.毎日新聞記事)

(103) 本当に日本の経済は悪いのか。ここで問題になるのが、良い、悪いの判断基準である。日本の企業は相変わらず、バブル期の甘い経験にとらわれているのではないか。日本のバブルの後には、約10年続いた米国のIT（情報技術）バブル好況があった。(2002.10.3.毎日新聞記事)

(102)は「準優勝21回」という経験を「苦い」とし、長年優勝できなかったことの悔しさ、つらさを「苦い」と形容している。(100)はバブル期、つまり厳しさやつらさなどがいい好況好況期の経験を「甘い」としている。このように(102)、(103)の「苦い経験」、「甘い経験」は厳しさ、つらさの有無で対立している。

「顔(表情)」との組み合わせと、物事に対する態度をまとめると、「苦い」は、主に言語主体の経験であり、過去のことや能力・努力の範囲を超える事態が生じ、言語主体の心理的な悔しさ、後悔、つらさを形容する。

態度の形容 { (前提) 言語主体の経験
(形容内容) 過去の事態や能力・努力を超える事態による心理的つらさ
(評価) 不快

5. 「苦い」の多義構造

「苦い」を「味覚の形容」、「態度の形容」という二つの用法に分けて意味構造について考察した。それぞれの用法は、前提、形容内容、評価という意味項目に分けられる仕組みである。

「味覚の形容」は、主に飲食物を対象に、飲食物に含まれる苦味成分と、その成分が誘発する肉体的な「つらさ」を形容する。そして、肉体的な「つらさ」に起因する不愉快という評価である。

「態度の形容」は、「苦い」が形容する対象によって顔(表情)との組合せと、物事に対する態度とに分けられるが、両方とも、ある事態に対する言語主体の態度を形容する点が一致する。態度の形容用法は、言語主体の経験が前提になり、過去の事態や能力・努力を超える事態が引き起こす心理的な「つらさ」を「苦い」と形容する。

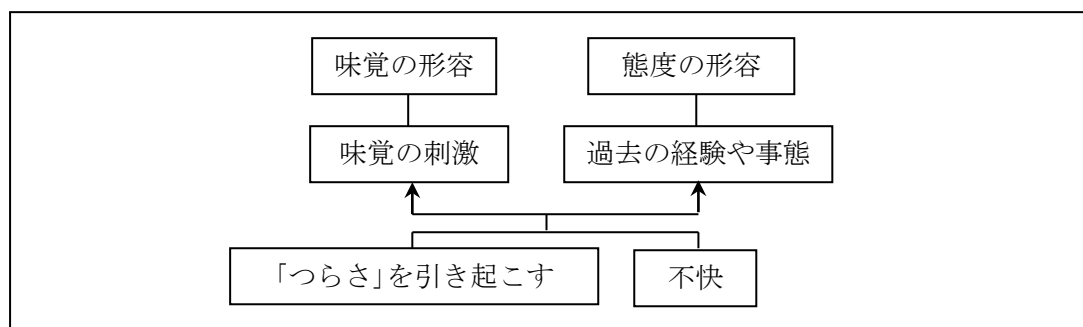
以上の内容をまとめたのが<表 9>である。

<表 9> 「苦い」の意味構造

	前提になる基準	意 味 内 容	反応
味覚の形容	味覚の刺激	苦味、肉体的な「つらさ」	不快
態度の形容	言語主体の経験	過去、能力・努力を超える事態が 引き起こす心理的な「つらさ」	不快

<表 9>は「苦い」における「味覚の形容」と「態度の形容」という二つの用法のそれぞれの意味構造である。「苦い」が多義語になるためには 1 章でも述べたように「共通の意味項目」が前提になるべきである。共通の意味項目はそれぞれの用法が持つ個別的な意味を除去して残る部分で確認できる。味覚の形容の場合は「味」の意味を落とすと「肉体的なつらさ」が残り、態度の形容の場合は「過去の経験や事態」の項目を除去すると「心理的なつらさ」が残る。味覚の形容と態度の形容は、肉体的と心理的という違いはあるものの「つらさを引き起こす何か」という項目は一致している。「苦い」は「つらさを引き起こす何か」という共通の意味項目を中心とし、形容する対象の性質(飲食物か、物事か)によって「味覚の形容」にも「態度の形容」にもなる多義語であり、<図 15>のような多義構造をもつ。

<図 15> 「苦い」の多義構造



6. 本章のまとめ

本章の多義構造と従来の多義構造(図14)と比較すると、従来は味覚が基本義になり、そこからメタファー、メトニミーによって別の意味へ派生し、派生した別義からまた派生する「派生による意味の連鎖」である。一方、本研究の多義構造は<図15>のように中心になる意味構造があり、対象の性質によって意味が転義する形をしていることが特徴である。

「苦い」という形容詞には「「つらさ」を引き起こす」という意味項目が存在し、この意味項目が形容する対象の性質によって意味が変わる多義語である。そして、多義語「苦い」の意味の転移は連鎖的ではなく個別的に生じる。

第6章 味覚・嗅覚を表す形容詞「酸っぱい」

1. 本章の目的

「酸っぱい」は「甘い」、「辛い」、「渋い」、「苦い」と違って「味覚の形容」以外の用法はあまり観察されない。「味覚の形容」以外の意味があるとしても修辭的な表現であったり、慣用的な表現であったりする。「酸っぱい」は他の形容詞に比べてまだ多義語化していない段階である。本章は、「酸っぱい」を多義語として分類した従来の研究の問題点を指摘し、「酸っぱい」が多義語化していないことを明らかにする。

2. 先行研究及び問題提起

「酸っぱい」を対象とした意味の研究は管見の限り、小出(2003)、安部(2010)、武藤(2015)そして辞書類くらいでほとんど行われていない。まず、辞書における「酸っぱい」の記述を確認し、その後、小出、安部、武藤の研究を確認する。「酸っぱい」に関する辞書の記述は<表 10>のとおりであり、『広辞苑』と『現代形容詞用法辞典』では単義語として扱っている。『日本国語大辞典』の場合は四つの意味の中で二つが俗語と隠語である。俗語と隠語は特定の社会、集団で使われ、仲間同士以外の人には意味を知らせない目的で使う用語で、一般的な多義語とは性質を異にする。例えば、警察用語で「星」は「犯罪の容疑者」を指す。「星」は「犯人の目星をつける」から「目」が省略された言葉であるという説があり、「星」の本来の意味とは何の関わりもない。このような俗語や隠語の意味は本来の意味とは違う性質の場合があり、多義語として認めるかどうかは再検討する必要がある。

<表 10> 「酸っぱい」の辞書記述

辞書名	意味記述
『日本国語大辞典』	①酸味がある。すい。 ②盛んな時期を過ぎる。終わりに近い。 ③景気が悪い、調子が悪い、都合が悪いなどの意の俗語。 ④時機が悪い、折が悪いことをいう、盗人仲間の隠語
『広辞苑』	①酸い味がする。酸い。
『学研国語大辞典』	①酸い。酸味のある。②(転じて)不快である。
『現代形容詞用法辞典』	①酸味のある様子を表す。

次に、安部(2010)は「酸っぱい」の方言語形の歴史とその語源説について論ずる。酸味を表す形容詞は名詞ス(酢)を元にして生まれたという説に対して、自然にあった酸味の認識

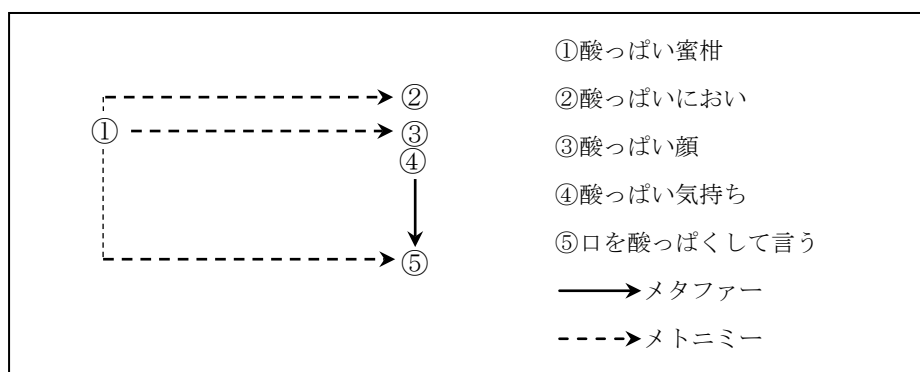
より液体「酢」の存在を前提しなければならない点をあげ、再検討の必要性を指摘した。安部は、「スカシ・スハシ」が「酸っぱい」の祖語形として蓋然性が高いとしながら、「酸味も、果物や酢などは、ある種の心身全体での清涼感を伴う味覚と言えるから、このスガシ・スガシと近似する意味領域を持つと見なし得る」³¹とする。しかし、安部(2010)が「酸っぱい」の意味は触れずその語源を探る研究であるとしても、「ある種の心身全体での清涼感を伴う」感覚を「味覚」として捉えているのは問題がある。味覚は舌から感じる感覚で清涼感は味覚より嗅覚の方に近い感覚であって、安部の説明は味覚と嗅覚を複合的に考えている。

小出(2003)は、「酸っぱい」を「味覚」、「心的な事象」、「表情」に分類している。「心的な事象」と「表情」の例としては、「酸っぱい思い」、「酸っぱい表情」を挙げているものの、両方「臨時的な用法」、「安定性はまだ獲得していない」としている。なおかつ、「味覚」と「心的な事象」、「表情」との関連性については説明していないため、「酸っぱい」を多義語として分類するには無理がある。

武藤(2015)の研究は、「酸っぱい」の意味を五つに分類した上で、〈図 16〉のように多義構造を説明する。

- ①別義 1 : (基本義)〈酢や夏ミカンなどが持つ〉〈味覚的刺激〉
- ②別義 2 : 〈別義 1 の主体が発する〉〈嗅覚的刺激〉
- ③別義 3 : 〈不快感あるいは拒否感が〉〈表情に表れているさま〉
- ④別義 4 : 〈(結果的に口中に別義 1 を生じさせる不快感あるいは拒否感)〉
- ⑤別義 5 : 〈繰り返し同じことを言い続け(結果的に口中に別義 1 を生じさせる)さま〉

〈図 16〉 武藤(2015:169)「酸っぱい」の多義構造



³¹ 安部(2010:21)

別義1(基本義)から別義2、3、5へそれぞれメトニミーによって派生すると説明している。武藤が多義語として分類した例が一般的に認められるかどうかについて改めて確認する必要がある。実際使われているかを確認するために、朝日新聞データベース、毎日新聞データベース、読売新聞データベースを利用して「酸っぱい顔(表情)」を検索した結果が<表11>であり、他の形容詞の使用状況と比較する。

<表11> 新聞社データベースにおける「酸っぱい顔(表情)」の用例数³²

	酸っぱい		甘い		苦い		渋い	
	表情	顔	表情	顔	表情	顔	表情	顔
朝日新聞	0	6	3	119	248	279	1148	1410
毎日新聞	0	7	0	76	256	240	1037	908
読売新聞	2	7	8	88	199	173	1419	980
計	2	20	11	283	703	692	3604	3298
計	22		294		1395		6902	

「酸っぱい顔(表情)」の出現頻度数は3社のデータベースを合わせても22例しかなく、他の形容詞に比べても著しく低い数である。そして、実際使われた文の「酸っぱい顔(表情)」は(104)、(105)のように酸っぱいものを食べた後の顔を形容していた。

(104) 長門さんは「無法松の一生」(1943年)に子役で出演した際、主役の阪東妻三郎にラッキョウを食べさせられてすっぱい顔をするシーンでうまく演技ができず、カメラの横で阪東さんが演技指導をしてくれた話を披露。(2015.9.15.毎日新聞記事)

(105) ヒロのようす この頃あげたもの(中略)ベビーダノン甘すぎる気がしたので、(こんなにおいしいものを覚えてしまったら、後が怖い)プレーンヨーグルトに切り替えた。でもますます酸っぱい顔をして嫌そうだ。(武藤2015:164から引用)

(104)、(105)は「酸っぱい顔」とは表現しているものの、「ラッキョウ」、「プレーンヨーグルト」という酸味のある食べ物を実際食べて歪んだ顔を「酸っぱい」と形容している。この場合は「酸っぱい」が多義語化し意味の転用が起こると判断するより「酸っぱいものを食べた

³² 検索日(2017年6月7日)基準、「酸っぱい表情」のように正規表現で検索を行った。

表情」という感覚主体への共感による描写として解釈するのが適切と思う。そして、新聞データベースで検索した 22 件の例も詩の一部であったり、(104)、(105)のように酸味のあるものを食べた顔を形容したりする意味として使われている。更に、武藤の別義 4、5 は慣用句「酸いも甘いも噛み分ける」、「口を酸っぱく言う」などという表現を用いて「酸っぱい」の多義の一つとして説明している。ところが、慣用句の場合は一定の語の連鎖の中で運用される表現であり、その語の連鎖を離れては慣用句中での意味がそのまま維持されない可能性が高くなる。例えば、「酸いも甘いも噛み分ける」という慣用句全体が「経験をつんで微妙な事情や人情の機微に通じ、分別がある」³³という意味を示すことであって、「酸いを・噛む」のみを切り取って「不快感を表す」(武藤の別義 4 の意味)と解釈するのは無理がある。この慣用句での「酸い」の意味は酸味(味覚の形容)と分類したほうが適切である。なお、別義 5 も同じ理由で「酸っぱい」の意味を「繰り返し同じことを言い続けるさま」と分析するのは無理がある。武藤(2015:168)にも「同じことを何度も言うという原因によって、口中に酸味が生じるという結果が生じる」(下線は引用者)と説明しており、「口を酸っぱくして言う」の「酸っぱい」は酸味を示し、「繰り返し同じことを言い続けるさま」(別義 5)は「酸っぱい」の意味ではなく「口を酸っぱくして言う」という慣用句全体の意味としてみるのが妥当である。

3. 味覚・嗅覚の形容

2 節は「酸っぱい」を多義語として分類した従来の研究の問題点を指摘し、「酸っぱい」を多義語とみるには無理があることを主張した。本節では「酸っぱい」の「味覚の形容」の意味にバリエーションがあることを指摘する。

〈表 12〉は『現代日本語書き言葉均衡コーパス』から収集した「酸っぱい」の用例を意味別に分類した表である。

〈表 12〉 「酸っぱい」の意味分類

	味覚の形容	嗅覚の形容	慣用表現	その他	計
用例数	264	31	51	9	355
割合	74%	9%	14%	3%	100%

〈表 12〉で示したように「酸っぱい」全用例の 83%(味覚、嗅覚)が食物を形容する例であり、慣用表現が 14%で、合わせると約 97%を占めている。残り 3%は以下のような例である。

³³ 『日本国語大辞典』から引用。

- (106) なめると、うめぼしの赤さが、タケノコの皮にしみて、まっかになるのだ。「見ているだけで、こっちまでつばがわいてくるよ。」山村さんが、すっぱそうな顔をしかめていうと、リンゴちゃんは、「あら、おじさんにも持ってきてあげればよかったわね。」と、いった。(長崎源之助(1986)『長崎源之助全集』)
- (107) 「五目ずし」という小説では、召集令状を受け取った夫が毎日のように妻貞子にすしを食べたいと頼む。妻は「いくら好きだからって、からだがすっぱくなりますよ、ほんとに呆れた、今日で三日、おすしつづきじゃないの」と呆れながらも、「戦争に行ってしまうえば、そうそうはすしも食べられないだろうからね」と納得し、そのうち姑のひろが台所に立って五目ずしを作りはじめる。(嵐山光三郎(2002)『文人暴食』)
- (108) つきあってみて本当に楽天的な人が“神経質”と書いてくることは少なく、“楽天的”と書いてあるのに、実はものすごい神経質で悲観的な性格だった、という場合のほうが多いよう。もちろんこれは、病いのせいでそうなる、ということもあるんでしょうけど、神経質で悲観的な人のなかには、“楽天的でありたい”という思いが根強くあるのかもしれませんが。こうありたい自分と、現実の自分のギャップって、どんな人にもつきものだから。そんな思いで性格の欄を見ると、またすっぱい思いになったりします。(宮子あずさ(2001)『看護婦だからできること』)

(106)、(107)、(108)は何れも2節の<表 11>で確認したような一般的に通用されない、あるいは修辭的な表現である。(106)の「すっぱそうな顔」は実際うめぼしは食べてはいないものの過去にうめぼしを食べた経験からその味を想起させて顔を歪めることを形容する。(107)は毎日すしを食べる人に対して「からだがすっぱくなる」と修辭的に表現している。(108)は言語表現者が、神経質で悲観的な人が楽天的でありたいという気持で性格の欄に楽天的と書くことを見て「すっぱい思いになる」と表現した。「すっぱい思い」のような表現は「酸っぱい」用例の僅か数例しか観察されなためその意味を分析するには無理があるものの、「甘酸っぱい思い」という表現の「甘い(快い)」の部分を除いて「切ない、やるせない」などの意になると推測される。

慣用表現と修辭的な表現である「その他」を除いて、残り約 83%が食物に関連する意味である。その中で「嗅覚の形容」の用法を先に確認する。なぜ味覚表現の形容詞である「酸っぱ

い」が「味」ではなく「匂い」を形容することができるのか。従来の研究は「味覚と嗅覚という二つの性質の同時性に基づくメトニミーにより意味が転用されると考えられる。つまり、ある種の匂いが酸っぱい味を連想させる場合、その匂いを酸っぱいという」³⁴(下線は引用者)と説明したように、「酸っぱい匂い」は「酸っぱい味」の連想なのか。

- (109) 和歌山県みなべ町の工場に一步足を踏み入ると、梅干しの酸っぱい匂いが全身を包み込む。タンクの中には、あめ色の液体に漬けられた梅がびっしり並ぶ。
(2016. 8. 15. 朝日新聞記事)
- (110) 朝ごはんのとき、大根おろしの上にイクラが乗ってる小皿を差し向けられて、匂いを嗅いでみると、思いつき、酸っぱい匂いがする。「腐ってるよ、これ」
(横森理香(2004)『ワルツ』)
- (111) 歩いたあとには、汗と何の匂いなのか鼻にしみる酸っぱい臭気が航跡のように漂った。(川崎徹(2005)『彼女は長い間猫に話しかけた』)

(109)は梅干しの匂いを、(110)はイクラが腐っている匂いを、(111)は食物ではないが汗などの匂いを「酸っぱい」と形容している。以上のすべての用例は対象物を口に入れず匂いを嗅いで「酸っぱい」としている。味覚と嗅覚は化学物質による刺激という共通点があり、味覚の場合は感覚器官(味蕾)による接触感覚である一方、嗅覚は遠距離感覚という違いがある。そして、生理学における「酸味(酸っぱい)」について栗原(1998:138)は、

酸っぱい味がするものの代表は酢である。レモンのような柑橘類にはクエン酸が、ヨーグルトには乳酸が含まれている。…(中略)…酸は水素イオンと陰イオンから構成されているが、酸っぱい味は水素イオンに由来する。…(中略)…塩酸や酢酸は揮発性であるため、ツーンとした匂いがある。これに対して、乳酸、酒石酸、アスコルビン酸は揮発性でないので、ツーンとした匂いはない。(下線は引用者)

と論じている。要するに、「酸味」はある化学物質による味であり、場合によっては匂いを伴うと言える。このような生理学の説明からみると、以上の「酸っぱい味を連想させる」という比喩表現より実際「酸っぱい匂いがする」と言った方が適切である。さらに、〈表 12〉の「嗅覚の形容」の割合が全体の約 10%という数字は高いとは言えない。しかし、次の〈表 13〉

³⁴ 武藤(2015:164)

朝日新聞データベースを利用して他の形容詞との用例数を比較すると、

〈表 13〉 朝日新聞データベースにおける「匂い(香り)」との共起用例数³⁵

	甘い匂い(香り)	酸っぱい匂い(香り)	苦い匂い(香り)	辛い匂い	渋い匂い
用例数	5375	932	21	27	1

「甘い」と「酸っぱい」が他に比べ、その用例数が著しいことが確認できる。味覚を表す形容詞の全体の使用頻度で「甘い」が「酸っぱい」より約 45 倍以上³⁶の用例数があることを考えると、〈表 13〉の「酸っぱい」の用例数は決して劣る数ではない。なお、嗅覚の形容詞が「くさい、こうばしい、かぐわしい」などで複合形容詞(あおくさい、なまぐさいなど)を除くとその数が著しく乏しく、「くさい」の場合は特定の匂いの形容というより評価語としての性格が強い³⁷。そのため、嗅覚を形容する際は味覚を表す形容詞を借用する場合も多い。〈表 13〉の「甘い匂い(香り)」の用例が多いことについては、次の西尾の説明が参考になる。

「まずい」に対しては「うまい」「おいしい」があるが、「くさい」に対しては、快く感じられるにおい一般を表す形容詞が欠けている。「においがいい」「いいにおいだ」のような連語がその役割りを分担している。(西尾(1972:105))

他の感覚領域から移行してきて、ある種のおいを一般的に表す語として「あまい」がある。(西尾(1972:107))

不快の匂いは「くさい」が表すが、快の匂いを表す単独の形容詞がないため「甘い」を借用するということである。つまり、「甘い匂い(香り)」はある具体的な匂いを形容するのではなく、ある種の快の匂いを形容すると理解するのが自然である。

しかし、「酸っぱい」の場合は、味覚の借用ではなく、石井(2012)が「酸は嗅覚系や体性感覚系でも受容されるため、食事の際に我々が(広義に)酸味として捉える感覚は、これらを混同した複合的な感覚であると類推される」³⁸としたように、味覚とともに嗅覚の属性も含意する。この点が他の味覚を表す形容詞とは性質を異にし、この違いによって「酸っぱい」

³⁵ 検索日(2017年6月10日)基準、「甘い匂い」のように正規表現で検索を行った。

³⁶ 7章の〈表 16〉を参照。

³⁷ 西尾(1972:105)は「くさい」はにおいの種類・性質を具体的に規定する語ではなく、どんなにおいであれ、不快に感じられるようなにおいがすることを言う語であるから、味覚における「まずい」とやや似た位置をしめているといえよう」としている。

³⁸ 石井(2012:255)

が味覚と嗅覚に限定され多義化しない。ここで嗅覚の形容詞について少し触れておく。

西尾(1972:105)は、「においに関する形容詞のうちで、よく使われる代表的な語」である「くさい」について「「まずい」とやや似た位置を占めている」とし、嗅覚を表す形容詞は属性より評価語に近いとしている。また、森田(1998:166)も次のように説明する。

感覚形容詞と言われる一群の語彙も、表現される文型次第で、属性説明ともなれば、感覚表現ともなるのである。…(中略)…対象物の属性と己の感覚という面で見直すと、嗅覚と聴覚が特に感覚性が強い。というのは、匂いや音に関しては「くさい」とか「香ばしい」「うるさい」「静かだ」といった、それを受け止める当方側の感じの語彙しかなく、匂いや音の細かい種類を区別して対象物に命名する属性説明の語彙が見当たらない。

(下線は引用者)

西尾と森田の説明によると、嗅覚を表す形容詞は具体的な匂いを形容するより言語主体の感覚を表す評価語である。こういう説明は「酸っぱい」を味覚の専用の形容詞として考え嗅覚の意味を見逃したからである。

次に、食物の味覚を形容する「酸っぱい」についてみる。以上の生理学の説明にもあるように、「酸っぱい」は酸味を形容する。

(112) レモンとか夏みかんとかの酸っぱいものをたくさん買ってくるんだ。(高毛礼誠(1993)『あなたを忘れきれない男たち』)

(113) 箱を開けると少しツーンとするにおいとともに、大きなビンが出てきた。真っ赤な梅干しがビッシリ詰まっていて、私は思わず口をすぼめた。梅干しは苦手なのだ。蜂蜜がたくさん入った甘い梅干しは大丈夫だが、これは明らかに酸っぱそうだ。(2009. 11. 19. 朝日新聞記事)

(112)はレモンと夏みかんの酸味を、(113)は梅干の酸味を「酸っぱい」としている。そして、(113)の場合は鼻を刺激する感覚も伴われる。一方、(114)、(115)の「酸っぱい」は(112)、(113)とは異質の酸味を表す。

(114) 喜多方市、会津坂下町、湯川村、北塩原村の小中学校21校の給食に出た紙パック入りの牛乳で、「酸っぱい」など風味の異常の訴えがあり、製造した会津中

央乳業（会津坂下町）が自主回収を始めた。（2008. 7. 20. 朝日新聞記事）

(115) 熟成しすぎて酸っぱくなったキムチはこうやって汁物に活用するとおいしく召し上がれます。（池成姫(2001)『韓国食堂の味方』）

(114)は牛乳が酸っぱいていることを、(115)は発酵しすぎたキムチを「酸っぱい」と形容しており、(112)、(113)のように食物の本来の味とは異質ではあるものの「酸味」に対する形容は同一である。山添(2003:235)は(114)、(115)のような「酸っぱい」から(116)、(117)の「酸っぱい」へ意味が派生したと説明する。

(116) 実は神戸の新開地で常打ち芝居がある。そこへ一人欲しいので、コケ脅しに使うのですから、役者は酸っぱくてもいいので（山添(2003:235)から引用）

(117) 馴染みでも無えのに、こんな酸い(すっぱい)内幕までぶちまけて話したのだ（山添(2003:235)から引用）

「古くなって腐れば酸っぱくなる。ここからメタファーに転じて、「盛んな時期を過ぎてだめになった」を表す³⁹としている。山添の「酸っぱい」に「盛んな時期を過ぎてだめになった」の意は(116)、(117)以外の用例からも検討する必要があるが、一般的に使われている用例ではないため今の段階では何とも言えない。

以上のことをまとめると、「酸っぱい」は酸味を形容しており、食物の本来の属性としての酸味を表す一方、発酵しすぎた状態を表す場合もある。そして、場合によっては鼻の刺激も伴う。

4. 本章のまとめ

本章では味覚を表現する形容詞「酸っぱい」について考察した。従来の研究で修辭的な表現、慣用的な表現を例にして「酸っぱい」を多義語として分類したことの問題点を指摘した。そして、「酸っぱい」には「味覚の形容」とともに、「嗅覚の形容」の意味があることを生理学の研究と実例を基に明らかにした。

従来の研究において「酸っぱい」の嗅覚の意味は、味覚から嗅覚への比喩表現(共感覚的な表現)の一種で、「酸っぱいを連想させる匂い」と説明する。「酸っぱい」の嗅覚の意味が従来の指摘通り比喩的に転義するものならば「酸っぱい」にも他の味覚表現の形容詞(甘い、辛い、

³⁹ 山添(2003:236)

苦い、渋い)のように多義(嗅覚以外の意味)を形成するはずである。しかし、「酸っぱい」は味覚と嗅覚以外の意味はない。これは、「酸っぱい」が味覚と嗅覚の専用の形容詞であることを意味し、「酸っぱい」が多義化しない理由でもある。さらに、逆に考えれば、味覚を表現する形容詞が味覚からの転義ではないことを裏付ける証でもある。

第7章 「味覚の形容」と「態度の形容」の語彙体系

1. 本章の目的

1章で生理学と形容詞のズレと、従来研究における味覚を表現する形容詞の体系の問題点を指摘した。本章では「味覚の形容」用法を形容詞の重要度の観点で見直し新しい体系を提案する。

国広(1982:157)は「語を体系に組み立てる時は、体系化に先立って語の意義素分析が一応終わってなければならない」としている。本研究では「意味項目」という用語を設け、2章から6章にわたって五つの形容詞の用法を意味項目に分析し、構造化した。これを基に「味覚の形容」用法の体系化を試みる。そして、多義的な意味のなか、「酸っぱい」を除外した四つの形容詞⁴⁰に共通する「態度の形容」も体系化を試みる。最終的に「味覚の形容」の体系と「態度の形容」の体系化を比較することで、味覚を表現する形容詞の多義性は「味覚」を「基本義」としていないことを確認する。

2. 「味覚の形容」の語彙体系

生理感覚と言語レベル(従来の研究)における「味覚」に対する捉え方の大きな違いは、「渋味(渋い)」の位置づけである。生理学では舌から感じられる味覚を基本味と定めたため、収斂感を表す「渋い」は除外されている。

しかし、西尾(1972:101)が「辛い」「しぶい」などの他の形容詞も言語的にみてそれらと特に区別される理由はない」と指摘したように、言語レベルでは「渋い」も味覚を表現する形容詞の一つとして位置づけられている。何故、基本味から除外された「渋い」が他の味覚表現の形容詞と同じ線上に位置付けられるのか。以下では、「渋い」を入れた五つの形容詞が互いに関係付けによって体系をなしているのかについて考察すると共に、味覚表現の形容詞としての「渋い」の位置づけも確認する。考察方法としては、前章までの「味覚の形容」用法の内容を踏まえ、対立関係と、使用頻度などの重要度に注目して、五つの形容詞の弁別的な特徴から体系化していく。

「味覚の形容」の意味項目を改めてまとめると以下のようなものである。

⁴⁰ 味覚を表現する形容詞の用法別の表れ方は以下のようなものである。

	味覚の形容	態度の形容	モノの動き・ありよう	様態に対する評価
甘い	○	○	○	○
辛い	○	○	×	×
渋い	○	○	○	○
苦い	○	○	×	×
酸っぱい	○	×	×	×

- ・「甘い」は糖分の味、美味、他の味覚を基準に相対的に刺激が弱いことを形容し、おもに快の反応である。
- ・「辛い」は塩味、辛味、他の味覚を基準に相対的に刺激が強いことを形容し、場合によっては舌を刺すような刺激も伴われ、不快の反応を導きやすい。
- ・「苦い」は苦味を形容し、場合によっては肉体的な「つらさ」が伴われる。不快の反応を帯びる。
- ・「酸っぱい」は酸味を形容し、場合によっては嗅覚刺激も伴い、不快の反応を帯びる。
- ・「渋い」は渋味を形容し、食品が円滑に飲み込まれるのを期待するものの、嚥下を突っ返す感覚が伴われる場合があり、主に不快の反応である。

次に、五つの形容詞の対立関係から相互関係性を確認してみる。食物の味覚として対立関係を示すことは簡単ではないが、『日本国語大辞典』を基に言語レベルでの対立関係を確認する。

「甘いー辛い」は 3 章「辛い」の多義構造でも確認したように、他味覚に比べて多様な食べ物で幅広く対立している。例えば「甘菜」の説明は、「味の甘い菜。ナズナなどの類。→辛菜」としており「甘菜と辛菜」が対になっている。「甘いー辛い」の関係は具体的な食べ物のみならず「甘煮と辛(鹹)煮」、「甘口と辛口」などのペアもある。次に、柿の場合は、渋柿と甘柿の区別があり、「甘いー渋い」の対立関係が認められる。また、「酸いも甘いも噛み分ける、酸いも甘いも知っている」という慣用句があることから「甘いー酸い(酸っぱい)」の対立関係も考えられる。最後に、「苦言は薬なり、甘言は病なり」という言葉があつて、味覚と直接関係がないかもしれないが、「甘い」と「苦い」が快の味覚と不快の味覚の代表として対立していることは確かである。因みに「ほたるこい」という童謡にも「あっちのみずはにがいぞ、こっちのみずはあまいぞ」という句があり、「甘い」と「苦い」を快の味覚と不快の味覚としても対立させている。

このように五つの形容詞が、食べ物の種類、状況などによって一様ではなく個別的ではあるものの、「辛い」、「酸っぱい」、「渋い」、「苦い」が「甘い」と一対一の対立関係をなしながら、そのなかで「甘いー辛い」は、一次的な味覚(具体的な味覚)のみならず、二次的(相対的な刺激の味覚)においても対立している。

次に、それぞれの形容詞の共起可能性に注目して調査を行った。共起可能性は、二つの味覚が一つの形容詞で現れるかどうかを判断基準にした。インターネット上では五つの形容詞がすべて共起可能と現れる(表 14)ため、『日本国語大辞典』を基にして調べた結果がく

表 14)である。

〈表 14〉 五つの形容詞の共起性

前項 \ 後項	甘い	辛い	苦い	酸っぱい	渋い
甘		甘辛い	—	甘酸っぱい	—
辛			—	—	—
苦		—		苦酸っぱい	—
酸	—	—	—		—
渋	—	—	渋苦い	—	

太線に囲まれた、「甘辛い」、「甘酸っぱい」、「苦酸っぱい」、「渋苦い」の四つの形容詞が辞書レベルで確認できる共起可能な味覚であり、各形容詞にあたる実例が以下である。

- (118) 小さく切ったタコとレンコンに、かたくり粉をまぶして油で揚げ甘辛いしょうゆだれを絡ませた。市教委小郡学校給食センターの調理員が考案した。(2016. 12. 2. 毎日新聞記事)
- (119) 朝収穫したばかりのイチゴ約5個をのせたソフトクリームが大人気。甘酸っぱいイチゴをあっさりしたクリームがひき立て、多い日は1000個以上売れることもある。(2016. 12. 18. 毎日新聞記事)
- (120) 枝は緑で、ピンポン球ほどの果実がなる。苦酸っぱく食用には不向きだが、柑橘(かんきつ)類の接ぎ木の台木に活用。耐寒性をオレンジにもたせるため、オレンジと細胞融合させた「オレタチ」が18年前、果樹試験場で作出、品種登録されている。(2003. 1. 9. 朝日新聞記事)
- (121) カラマツなどの落葉を踏みながら歩くと、特有の匂いが漂う。ちょっと薬草湯に浸かったときのような、渋苦い匂いなのだ。(2005. 12. 26. 読売新聞記事)

(121)の「渋苦い」は「味覚の形容」ではなく匂いを形容する例であり、『日本国語大辞典』に載っている「Xibunigai(シブニガイ)〈訳〉果物のしんのうように渋くて苦いこと」も『日葡辞書』からの引用である。この例以外に「渋苦い顔」も載ってあるもののこれも「味覚の形容」ではない。「渋苦い」は実例がなかなか見当たらず、現在の言語生活とは甚だ離れている

形容詞もあったため、インターネット (Google) 検索⁴¹を通して実際の用例数を調べた結果が〈表 15〉である。

〈表 15〉 インターネット検索による味覚形容詞の共起可能性

前項 \ 後項	甘い	辛い	苦い	酸っぱい	渋い
甘		1,760,000	36,300	5,740,000	1,200
辛	3,100		780	13,300	44
苦	6,610	2,540		13,400	1,360
酸	2,030	826	1,040		189
渋	1,460	360	1,840	1,080	

〈表 15〉の数字はインターネット上で実際使われる用例数である。網掛け部分は検索数が一万件以上の形容詞であり、太線は〈表 14〉の辞書レベルで確認できた形容詞である。インターネット上ではすべての形容詞が現れるが、表現の個人差、修辭的表現、など普遍的ではない用例が数多く含まれていると思われるため、検索数一万件以上の形容詞のみを一般的な語として認めても問題はないと判断する。太線の部分より網掛け部分の方が多いのは、社会発達とともに食文化にも変化が起こり本来存在しなかった味の融合が新しく生じたり、なくなったりするためであると見られる。このように考えると〈表 14〉と〈表 15〉はほとんど一致していると見ても差し支えない。

次に、各形容詞の使用頻度による重要度を確認する。1章でも指摘したように、従来の研究は五つの形容詞を等価値、つまりレベルの違いを考慮しない体系であった。各形容詞の使用頻度を確認した結果を示したのが〈表 16〉である。

⁴¹ 検索日 (2017 年 7 月 17 日) 基準、“甘辛い”のように正規表現で検索を行った。

〈表 16〉 味覚を表現する形容詞の使用頻度

		甘い	辛い	苦い	酸っぱい	渋い	合計
Google 検索 ⁴²		140,000 千	74,300 千	7,120 千	3,530 千	13,100 千	—
中 納 言 ⁴³	味覚の 形容	1570 (64%)	245 (10%)	282 (11%)	348 (14%)	25 (1%)	2470
		44%	87%	42%	100%	7%	
	味覚の 形容 以外	2010	38	394	0	319	2761
		56%	13%	58%	0%	93%	
合計		3580 (68%)	283	676	348	344	5231

()内の%は右側の合計に対する各形容詞の割合)

〈表 16〉の Google 検索は各形容詞の使用頻度である。「味覚の形容」用法とそれ以外の意味とを区別しない全体の使用頻度ではあるが、他形容詞より「甘い」が遥かに上回る数値であることは確認できる。この結果は「中納言」の結果とも一致している。中納言の全用例 5231のうち「甘い」は 3580 で全体の 68%を占め、「味覚の形容」のみも全体の 64%であることから、使用頻度の面で「甘い」は他の形容詞とはレベルが違う。使用頻度で五つの形容詞をレベル化すると①「甘い」と②「辛い」、「苦い」、「酸っぱい」と③「渋い」で三つにグループ化できる。更に言えば、「甘い」とその他形容詞のレベルの違いは使用頻度のみならず、意味項目でも見られる。2 節の冒頭にまとめたように、「甘い」は快の反応を導きやすい味覚であり、それ以外の形容詞は一般的に不快である。使用頻度と反応の面において「甘い」は他の形容詞とは区別されるレベルに位置している。

五つの形容詞の「味覚の形容」の形容内容に、以上の内容を加えまとめると〈表 17〉のようになる。

⁴² 検索日(2017年7月17日)基準、「甘い」のように正規表現で検索を行った。

⁴³ 国立国語研究所の『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』のことで「中納言」と表記する。

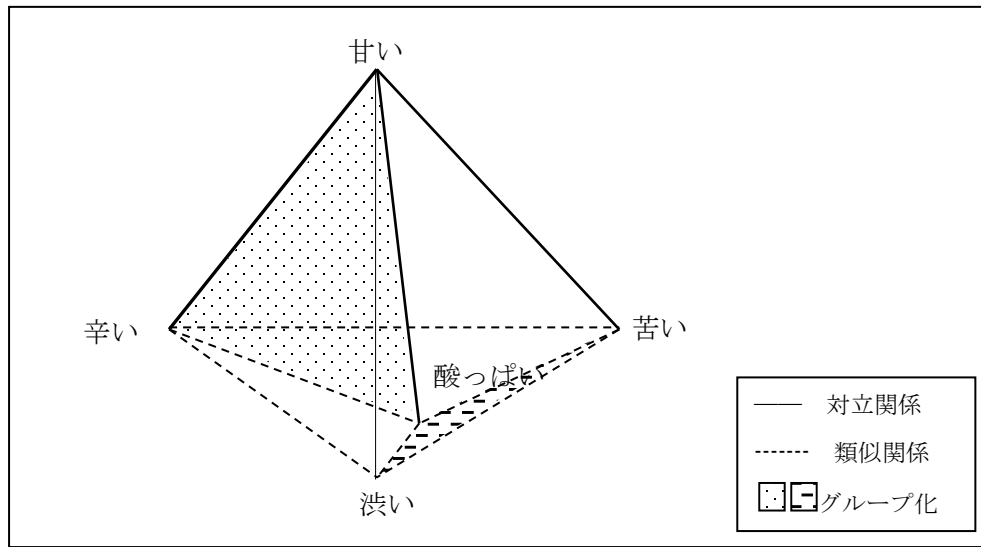
〈表 17〉 「味覚の形容」における弁別的特点

	甘い	辛い	苦い	酸っぱい	渋い
生理学	基本味	基本味	基本味	基本味	基本味外
形容内容	糖分の味、美味	塩味、辛味	苦味	酸味	渋味
	相対的に 弱い刺激の味	相対的に 強い刺激の味			
対立関係	辛い、酸っぱい、 渋い、苦い	甘い	甘い	甘い	甘い
共起味	辛い、酸っぱい	甘い	渋い、 酸っぱい	甘い、苦い	苦い
使用頻度 ⁴⁴	64%	10%	11%	14%	1%
反応	快	不快	不快	不快	不快

五つの形容詞は生理感覚の「味覚」を出発点としているから、「生理学の基本味」を基準に「甘い・辛い・苦い・酸っぱい」と「渋い」に二分される。また、五つの形容詞はそれぞれが特定の味を形容する一方、「甘い」と「辛い」の場合は「相対的に弱い(強い)刺激の味覚」という二次的な意味もある。そして、「甘い」対四つの形容詞が対立関係にありながら、「辛い」の場合は他形容詞に比べて二次的な意味においても「甘い」とは強い対立関係にある。反応は言語レベルでの快・不快を基準に「甘い」対「辛い、苦い、酸っぱい、渋い」に二分される。以上を図式化すると〈図 17〉のような形になる。

⁴⁴ 「使用頻度」は〈表 16〉各形容詞の中納言全用例のうち「味覚の形容」が占める比率である。

<図 17> 「味覚の形容」の体系



「甘い」は使用頻度と反応(快・不快)の面において他の形容詞とは区別される特別な位置にある。「渋い」は舌から感じられる味覚でないため基本味から除外されたことを考えて、基本味である「甘い、辛い、酸っぱい、苦い」と「渋い」を違う平面上に位置する。こうすると「味覚の形容」の体系にはレベル(平面)の違いによって、「甘い」、「辛い、酸っぱい、苦い」、「渋い」という三つのレベル(平面)が生じることになる。さらに言えば、この三つのレベルは使用頻度の面(「甘い(64%)」、「辛い(10%)、酸っぱい(14%)、苦い(11%)」、「渋い(1%)」)でも合致している。

五つの形容詞は対立関係と類似関係で互いにつながっている。「甘い」を中心とした「辛い」、「苦い」、「酸っぱい」、「渋い」は対立関係(実線)でつながり、その中で「甘い」と「辛い」は二次的な意味も対立しているから太い実線で示される。そして、「甘い」を除外した「辛い」、「苦い」、「酸っぱい」、「渋い」は不快という類似関係(点線)でつながっている。こうして五つの形容詞は三つのレベルを持つ六面体の形になる。先行研究(1章の<図 2>と<図 3>)の体系と違って使用頻度の差異を示すため、「辛い、酸っぱい、苦い」が含まれた平面より比較的に高いところに「甘い」が、平面より比較的に低いところに「渋い」が位置する形になる。

なお、六面体の面は三つの頂点を含めており各頂点に位置する三つの形容詞が関係し合う構造になっている。味覚を表現する形容詞の体系における面は<表 17>の共起味の関係でグループ化でき、「甘い」を中心として「辛いー甘いー酸っぱい」と、「苦い」を中心とした「酸っぱいー苦いー渋い」とに分けられる。それぞれのグループは同じ面に位置し、両方同時に含まれる「酸っぱい」が両面の中心に位置する形になる。

以上の論考によって味覚を表現する形容詞の体系の特徴は、二つにまとめられる。

一つは、味覚を表現する形容詞の体系は他の形容詞に比べて形容内容が個別的で一様でない。例えば、次元形容詞の体系⁴⁵は「空間」という共通のドメインで意味的に対になる語が存在し、全ての形容詞を大小という同じ尺度の下で弁別が生じる。しかし、味覚を表現する形容詞は味覚という共通のドメインであるとしても、その内容は甘味、塩味、苦味、酸味、渋味という個別的で一様でないため、次元形容詞のような「大小」という同じ尺度では説明できない。

もう一つの特徴は、地域と時代の変化によってその体系が変わり得る。1章<図3>の山口方言の体系と<図17>の体系は違う形をしている。両図は同じ基準で体系化したものではないため比較するには無理があるかもしれないが、地域によって使われる言葉とその意味に違いがあることから地域によって体系が一律ではないことは言える。なお、加藤(1966)の<図18>の、[美味]、[砂糖の味]、[塩のうすい汁の味]の意味が(一)、(二)、(三)の順に変化すると指摘からも、時代によっても体系は変わっていくことがわかる。つまり、<図17>の味覚を表す体系は、地域と、時代の変化によって変わる、絶対的なものではなくあくまでも便宜的なものである。

⁴⁵ 国広(1982:157)はベクトルを持たない四対の形容詞(長い・短い、広い・狭い、厚い・薄い、太い・細い)を対象に次元形容詞を体系化した。四対の形容詞の意義素を、

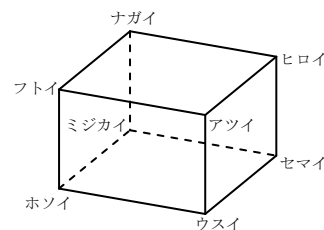
長い・短い：線的な広がり標準値より大きい(小さい)

広い・狭い：厚さを考慮に入れないで見るときの物の面積が大きい(小さい)

厚い・薄い： $A > B > C'$ という長さの関係にある立方体において、ほかに限定的な条件がない時、Cの値が標準値より大きい(小さい)

太い・細い：多少とも円形の断面を持ち、中心線が通っているように見える立体物の直径が標準値より大きい(小さい)>ただし<長さは直径より大きい>

とし、線を含む、肉付けがある・ない、平面を含むというパラメーターによって四対の形容詞を正六面体に組み立てることができることを説明した。



〈図 18〉 加藤(1966:69)の「甘い」の意味の変化

	(一)	(二)	(三)
〔美味〕	ウ	ウ マイ	ウ マイ
〔砂糖の味〕	マ イ	ア	ア マイ
〔塩のうすい汁の味〕	ア マイ	マ イ	ウスイ・アワイ・ ミズクサイ・ シヨムナイ

3. 「態度の形容」の語彙体系

「態度の形容」はある事態(対象)に対して言語主体がいかなる態度でその事態を捉えているのかを形容する用法である。この用法は「酸っぱい」を除外した「甘い、辛い、苦い、渋い」の四つの形容詞で観察される。五つの形容詞には「味覚の形容」と「態度の形容」用法以外にも「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」という用法があるが、この二つの用法は「甘い」と「渋い」以外の形容詞には観察されない用法である。そのため「モノの動き・ありよう」、「様態に対する評価」は体系化できず、「態度の形容」を多義語化した用法の代表として体系化を試みる。

6 章まで述べてきた各形容詞における「態度の形容」の意味項目を改めてまとめると以下のようなになる。

- ・「甘い」の態度の形容の対象は、「顔(表情)」、人、人間活動の領域に当たること(人の内部事態、外部事態)である。形容内容は、社会一般的な「厳しさ」あるいは「厳しさ」が求められる場面で、言語主体が求める厳しさの基準に達していないことを形容し、主に不快である。
- ・「辛い」の場合は、人間活動領域の中で特に評価類語(人の外部事態)を対象にする。形容内容は、社会一般的な「厳しさ」あるいは「厳しさ」が求められる場面で、言語主体

が求める厳しさの基準を超えることを形容し、不快の反応を帯びる。

- ・「渋い」の場合は「顔(表情)」、人間活動領域(人の外部事態)を対象にする。形容内容は、言語主体の要求・願望が円滑に展開することを期待するものの、妨げなどによって期待が外れることを形容し、不快の反応を帯びる。
- ・「苦い」は「顔(表情)」、記憶、思い出、経験などの主に人の内部事態を対象にする。形容内容は、言語主体の経験が前提になり、過去の事態や能力・努力の範囲を超える事態に対する悔しさ、後悔、つらさを形容し、不快の反応を帯びる。

四つの形容詞の「態度の形容」は、ある事態に対する言語主体の捉え方という点では一致するものの、その形容内容は一様ではない。「甘い」と「辛い」は事態の厳しさについて形容し、「渋い」は言語主体の期待通り事態が捗らないこと、「苦い」は言語主体の不愉快な経験について形容する。四つの形容詞がそれぞれ異なる内容を形容するため互いの関係を把握するのは無理があるが、同一の対象(事態)を形容する場合は比較することができる。以下では、同一の対象を形容する四つの形容詞を比較し、互いにいかなる共通点、相違点があるのかを明らかにすることを試みる。

これまで述べてきたように「態度の形容」用法の対象は、「顔(表情)」、人間活動の領域の人の内部と外部という三つの領域に分かれる。人間活動の中で人の内部領域には考え、思い出、経験、体験などの思考および習慣として分類⁴⁶される事柄が属する。人の外部は態度、計画、評価などの人間活動の領域のみならず、状況、条件などの抽象的関係を表す語類も含まれている。「顔(表情)」の場合は、言語主体の顔(表情)を形容すると言うより、ある事態に対する言語主体の態度が顔(表情)に表れると解釈する。そして、その事態は例によって個別的であり、多様であるため人の内部、外部領域から切り離して別扱いした。以下では「顔(表情)」、人の内部、人の外部という対象の領域順に各形容詞が形容する内容を比較する。

(122)、(123)、(124)は「顔(表情)」と「甘い」、「辛い」、「渋い」との組み合わせである。「辛い」の場合は「顔(表情)」を形容する例は観察できない。「甘い」の対立関係で事態の厳しさを表す場合は「辛い顔(表情)」と表現せず「厳しい顔(表情)」とする。

- (122) 朝ご飯を抜き、昼ご飯を抜いて午後の三時ごろ、次男はまだ勉強をやっています。きっと頭の中に何にも入ってないだろうと思っただけでいたわり心が噴出しそうでしたが、甘い顔は一つだってできません。(長田百合子(2003)『イジメ・

⁴⁶ 国立国語研究所(1964)『分類語彙表』の主に 1.305、1.306 として分類された語彙。

不登校・ひきこもりと親はどう向き合うか』)

- (123) 会見に同席していた阿部勝征・東大名誉教授も「地震予知ができれば、人命と財産の喪失を防ぐことができますから、日本の長年の悲願…」と話したが、続けて「しかし学問的にはできることとできないことがある」と苦い顔をみせた。(2012. 12. 27. 朝日新聞記事)
- (124) 居酒屋アルヒーベでの話題も、日照りの深刻さの報告会になってきた。エドワルド親爺は「今年のワインはできがよさそうだが、収穫は大幅に減るな、それに野菜は全滅だ」と長びく日照りに渋い顔をしていた。(石井崇(2005)『南スペイン、白い村の陽だまりから』)

(122)は、母親が次男に罰として食事なしに反省することを命じた厳格さが求められる場面である。その際の「甘い顔」というのは、言語主体が考える厳格さの基準に達していない表情(顔)のことを指す。(123)の「苦い顔」は、地震研究家(言語主体)の能力と努力の範囲を超える状況で、その事態に対する心的つらさや悔しさを「苦い顔」で形容している。(124)はワインのできがよさそうという期待があるのに、日照りの影響で期待通りの収穫ができない状況について話す際の顔を「渋い」と形容している。「形容詞+顔」の組み合わせは言語主体が置かれた状況での表情を形容する。「甘い」は厳格さが求められる状況、「苦い」は能力、努力ではどうしてもできない状況、「渋い」は望んだ通りに事態が展開しない状況で生じる表情である。「苦い顔」と「渋い顔」は言語主体の不快感が明確に読み取れるのに比べて、「甘い顔」の場合は不快感がやや弱いかもしれないが「優しい顔」と表現せず「甘い顔」とすることで、厳格さが求められる場面でそうではない表情であるという前提まで内包するから不快と分類できる。

次に、人間活動の領域の中で人の内部の事態を形容する例である。(125)、(126)は「経験」を、(127)、(128)は「人生」を「甘い」と「苦い」がそれぞれ形容する。

- (125) 棗弁護士は、「会社に退職を勧められたり、ひどい配置転換をされたりしたとき、30代までの若い世代の人は、『いないなら辞めてやる』と思ってしまうが、今の転職市場の現実には厳しい。弁護団では、できるかぎり辞めないで会社に残るほうがいと勧めている」と話す。しかし、多くの人が、就職のときの「甘い経験」からしか判断ができないという。(2003. 6. 20. 朝日新聞記事)
- (126) 半導体製造、ルネサスエレクトロニクスは、自動車用マイコンを製造する子会社の川尻工場(熊本市)が被災した。ルネサスは東日本大震災で茨城県の工場が3カ月間、操業停止した苦い経験がある。(2016. 5. 25. 毎日新聞記事)

(125)は今の厳しい転職市場と過去の転職市場を比較して、過去に転職した経験を「甘い」としている。(126)は東日本大震災の時、工場を3カ月間停止したことを「苦い経験」と形容しており、言語主体の能力を超える事態が生じて、どうしようもない事態に対するつらさを表す。「甘い」も「苦い」も「経験」を形容するものの、その内容は「厳しさ」と「つらさ」で異にしている。が、「甘い経験」の厳しさが足りないことは今の状況からみれば「楽」なことであり、「苦い経験」は手が付けられない状況のつらさは「苦」であって、「楽」と「苦」で対立している。(127)、(128)からも同じことが言える。

(127) オハイオ大の大学院で社会福祉を学びたいと技術者の夫に伝えると、「おまえ、中部大学でらくしてきたからね。これまでの甘い人生とはちがう、きびしい現実を知るのもいいじゃない」とユーモラスな云いまわしで賛成してくれる。(加藤仁(2001)『Yomiuri Weekly』)

(128) その後2人が再会したのは25年後のこと。早紀は結婚して姓が変わっています。子供はいません。夫は穏やかな人柄ですが、すでに寝室を別にしています。克巳も離婚や経営した会社の倒産など、苦い人生経験をしていました。(2009.4.8.朝日新聞記事)

(127)の「甘い人生」は「らくしてきた、きびしい現実」という文脈から厳しさ、つらさが欠けていることを形容し、(128)の「苦い人生経験」の場合は「離婚、倒産」を指し、厳しさ、つらさを「苦い」と形容している。「甘い」の厳しさが欠けていることはある側面では「楽」であり、同じ文型で意味の対立関係をもつ「苦い」とは「苦楽」の観点で対立する。ただし、「甘い」と「苦い」が苦楽の観点で対立しているとは言え、全ての用例において対立関係にあることは意味しない。「甘い評価」の対立関係は「辛い評価」であり「苦い評価」とは言わないからである。そもそも「苦い」より「甘い」の方が形容する対象の範囲も広く、「苦い考え」のように「苦い」で形容できない例も少なくない。「甘い」と「苦い」における「苦楽」の対立は一部の例でのみ観察される。

人の外部の領域を形容対象とするのは「甘い」、「辛い」、「渋い」である。「甘い」と「辛い」の関係は3章「辛い」の多義構造で取り上げたため簡単に振り返ると、

(129) 点数の評価は一般にテストで行なわれるから、特別な採点ミスでもない限り大きな不公平はない。ただ絶対評価の場合、(高校では一般に絶対評価である)、教師によって甘い辛いの差がつく場合が多い。これは点数を合計する時に不公

平になる。(坂本秀夫(1990)『校則の話』)

「甘い」と「辛い」は教師の評価を形容しており、厳しくないか厳しいか(寛大か厳格か)の意で対立関係にある。ただし、3章でも述べたように「甘い」は「顔(表情)」、人の内部、人の外部という全領域の対象を形容する一方、「辛い」は人の外部、特に(129)のように評価関連の語彙を対象にする。「甘い」と「辛い」は意味的(寛大－厳格)には他形容詞(渋い、苦い)に比べて強い対立関係にあるものの、その範囲は限られている。

次に、「甘い」と「渋い」の比較で、(130)、(131)は「見通し」を、(132)、(133)は「結果」をそれぞれ形容する。

(130) 番組は、廃炉作業、避難者への賠償、除染などで必要なコストが膨らむ実態を細かく検証。除染の、ある一つの作業について、見込みの8倍以上の費用が必要になることを独自試算で明らかにするなど、国の「甘い見通し」を告発している。(2016.11.6.朝日新聞記事)

(131) 増収が予想される法人税がすでに当初予算で大幅な伸びを見込んでいるうえ、酒税の不振などから、景気上昇のわりには予想外に渋い見通しとなった。したがって、これを土台とする来年度税収も大幅な自然増収は期待できそうになく、大蔵省は財源確保に苦慮することになりそうだ。(1984.12.1.朝日新聞記事)

(130)は国の見込みに対して改めて試算すると8倍以上の費用が必要であることを確認して、国の見通しが「甘い」としている。国の見込みに徹底さ、厳しさが足りないことを「甘い」と表現して指摘している。(131)は景気上昇もあって増収を予想したのに酒税の不振などの原因で言語主体が予想した見通しには及ばないことを「渋い」としている。

(132) 最終段階で、加盟27カ国の原子力規制機関でつくる専門家集団の欧州原子力安全規制機関グループ(ENSREG)の検証を受ける。自国の検査だけでなく、他国の専門家が検査に入る「相互監視」を実施することで、身内に甘い結果にならないようにする考えだ。相互監視の結果は、来年4月末までに報告される。(2001.5.26.朝日新聞記事)

(133) スタンドの歓声を背に助走に入ったものの、逆風が吹きだして失速し、目標のバーを落としてしまった。春闘の前半戦は、こんな尻すぼみに終わった。大手

製造業の賃上げは、多くが前年並みにとどまった。3年連続の賃上げとはいえ、渋い結果である。(2008. 3. 14. 朝日新聞記事)

(132)は身内が検査すると厳しくとがめない恐れがあるため他国の専門家を検査に入れて「甘い結果」にならないようにするとしている。「甘い」は厳しくとがめない結果であり、厳しさが足りないことを表す。(133)「渋い結果」は3年連続して賃上げはしているがその内容は前年並みであることを指し、望んだ通りの結果ではない。以上の例から「甘い」は言語主体の基準に「厳しさ」が足りないことを、「渋い」は言語主体の予想あるいは期待通り捗らないこと、つまり期待に及ばないことを形容する。両語は言語主体の基準(期待)に何かに至らない、足りないことを形容する。その何かは「甘い」は「厳しさ」であり、「渋い」は事態の進捗・展開であったりする。その点で、「甘い」と「渋い」は何か足りないという点では類似する。これに比べ、「辛い」は言語主体の基準を超える「厳しさ」を形容し、「苦い」は言語主体の「つらい」経験を形容しており「何かの足りなさ」とは関係していない。

「態度の形容」における四つの形容詞の関係性とその使用頻度をまとめると<表 18>のようになる。

<表 18> 「態度の形容」の弁別的特徴

	形容対象			形容内容				使用頻度 ⁴⁷
	顔	人の内部	人の外部	不足	苦楽	厳しさ	反応	
甘い	○	○	○	不足	楽	寛大	不快	1177 (69%)
辛い	×	×	○	×	×	厳格	不快	38 (2%)
苦い	○	○	×	×	苦	×	不快	394 (23%)
渋い	○	×	○	不足	×	×	不快	103 (6%)
酸っぱい	—	—	—	—	—	—	—	0 (0%)

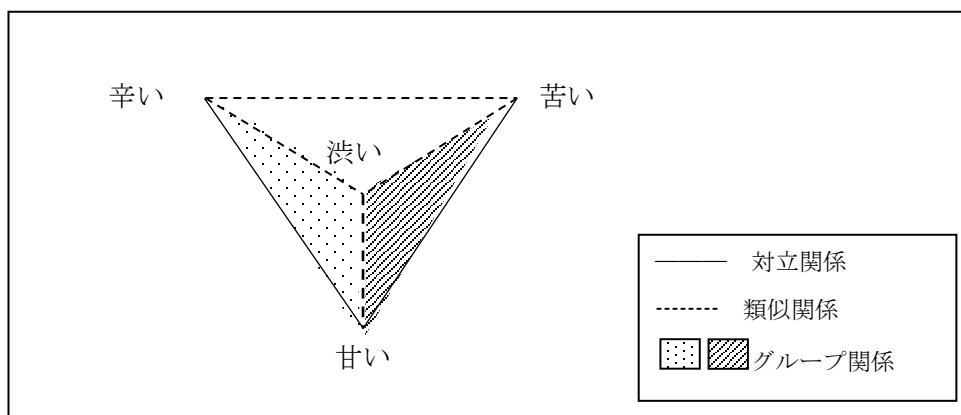
五つの形容詞の中で「酸っぱい」は味覚以外の意味は持たない。「甘い」、「辛い」、「苦い」、「渋い」の間の関係性を、形容対象と形容内容に分けて比較した。形容対象を「顔(表情)」、人の内部、人の外部という三つの領域に分けて調べた結果、「甘い」が全ての領域で観察され、四つの形容詞の中で観察範囲が一番広がった。「辛い」は人の外部、「苦い」は「顔(表情)」、人の内部、「渋い」は「顔(表情)」、人の外部の領域で観察され、「甘い」を除外した三つの形

⁴⁷ 使用頻度は2節<表 15>の中納言における「味覚の形容以外」に含まれる「態度の形容」用法の比率である。

容詞が少しずつズレていた。

形容内容は意味と事態の事柄によって、「不足」、「苦楽」、「厳しさ」、「反応」という四つの側面に分けて比較した。まず、四つの形容詞はある事態に対して共通的に不快の反応を帯びていた。「甘い」の場合は「甘い顔(表情)、甘い言葉」などにおいては必ずしも不快とは言えなく、快としてみる可能性もなくはないが、主に不快の評価であることは否定できない。不足の観点で「甘い」と「渋い」は類似関係にある。「甘い」は事態の厳しさの不足、「渋い」は事態の進捗、展開の足りなさを形容する。苦楽の観点では「甘い」と「苦い」が対立関係にあり、厳しさの観点では「甘い」と「辛い」が対立関係にある。以上の表を図式化しまとめると<図 19>のようになる。

<図 19> 「態度の形容」の体系図



四つの形容詞「甘い」、「辛い」、「苦い」、「渋い」は形容対象と形容内容から「甘い」とそれ以外の形容詞で二つのレベル(平面)が存在する。「甘い」は、顔(表情)、人の内部、人の外部という全ての領域で観察されることと、「甘い」を中心に他の形容詞が何らかの意味で対立、あるいは類似の関係を結んでいることから「甘い」は他の形容詞と区別される。さらに、使用頻度においても「態度の形容」用法の約 7 割の比率を「甘い」が占めていることから他形容詞とは区別される。「甘い」と「辛い、渋い、苦い」の二つのレベル(平面)がある。「甘い」の位置を三つの形容詞より上に位置すると<図 17>のように平面より上は「快」、平面を含む下は「不快」の形になるため、三つの形容詞より下に位置付けることで四つの形容詞全てが不快の領域にありつつ、「甘い」のみが他と区別される。こうすることで四面体の各頂点に四つの形容詞が位置付けられる。

四面体における面は三つの頂点を含んでおり、形容対象の領域別でグループ化できる。

「顔(表情)」を形容する「甘いー苦いー渋い」と、人の外部領域を形容する「甘いー辛いー渋い」とが同じ面に位置する。

次に、形容内容から各形容詞の関係性を線で示すと、「甘いー渋い」は何かの不足の側面で類似関係(点線)にあり、「甘いー辛い」、「甘いー苦い」は厳しさと苦楽の観点で対立関係(実線)にある。また、「辛いー渋いー苦い」は不快の反応で類似(点線)している。以上の内容で「態度の形容」の体系の特徴は以下の点が指摘できる。

- ① 「態度の形容」は二つのレベルが存在する。
- ② 各形容詞が形容する内容は個別的であり一様ではない。
- ③ 「甘い」は「辛い」、「苦い」、「渋い」と対立、あるいは類似の関係にあるものの、対立あるいは類似する内容は各形容詞によって個別的である。
- ④ 「渋い」は、形容対象の観点からグループ化した際には「甘い」とともに両グループに属し、形容内容の観点からみると「辛い」、「苦い」と共に「甘い」と対立(類似)の関係にある。

4. 本章のまとめ

本章は「甘い」、「辛い」、「苦い」、「酸っぱい」、「渋い」という五つの形容詞の用法の中で「味覚の形容」と「態度の形容」を取り上げてそれぞれの用法の体系化を試みた。

「味覚の形容」は「甘い」、「辛い、苦い、酸っぱい」、「渋い」という三つのレベルが存在し、「甘い」とそれ以外の形容詞は「味覚」という共通の属性で対立の関係にあった。一方、「態度の形容」は「甘い」、「辛い、苦い、渋い」という二つのレベルが存在しており、「甘い」とそれ以外の形容詞は対立、類似の関係にあった。両用法は「甘い」が中心になって他の形容詞と関係しているという共通性はあるものの、「味覚の形容」は快、「態度の形容」は主に不快である点から、体系内での位置には大きな違いがあった。なお、「味覚の形容」と「態度の形容」は対立関係においても違いが見られた。「味覚の形容」が「味覚」という共通の属性で「甘い」を中心に対立関係をなす中で、「甘い」と「辛い」が強い関係にある。「態度の形容」は「甘い」と他の形容詞が対立(あるいは類似)の関係にはあるものの、対立(あるいは類似)の内容はそれぞれの形容詞によって異なっていた。

各用法は、「味覚の形容」の場合は共起味の可能性で「辛いー甘いー酸っぱい」と「酸っぱいー苦いー渋い」とにグループ化でき、「態度の形容」の場合は共起対象の観点で「甘いー苦いー渋い」と「甘いー辛いー渋い」がグループ化できた。両用法をグループ化した際に、「味覚

の形容」の中心は「酸っぱい」であり、「態度の形容」の場合は「甘い、渋い」が中心になっており、両用法の共通点は見られなかった。

「味覚の形容」の体系と「態度の形容」の体系を比較すると、「甘い」が両用法において特別な位置を占めているという点以外の共通点は見られない。さらに、各用法を体系化した際に観察される特徴というより「甘い」という形容詞が持つ独特の性質である点を考えると、両用法の共通点は考えられない。

この結果は、従来の研究で五つの形容詞が「味覚」を基本義にして多義化したという主張に反する。もし、五つの形容詞が、「味覚」から転義した多義語であるとしたら、「味覚の形容」の体系と「態度の形容」の体系の間には何らかの関係性があると想定できる。しかし、以上の論考において両用法の間には特別な関係性は見つけられなかった。

また、味覚レベルにおいては「甘い」と「辛い」が強い対立関係を成しているのに反して、五つの形容詞の全体の用法からみると、「甘い」と「渋い」が対立と類似の関係にあった(第4章5節)。「甘い」と「辛い」の関係は味覚レベルの限定⁴⁸であり、味覚(基本味)から外された「渋い」が用法的には「甘い」と強い関係にある。

さらに、五つの形容詞が味覚から転義していないことは6章でも確認した。五つの形容詞が比喩的に転義するものなら「酸っぱい」も同様に転義するはずだが、「酸っぱい」は味覚と嗅覚以外の意味がない、味覚・嗅覚の専用の形容詞である。このように考えると、味覚を表す形容詞が味覚からの転義であるという主張の妥当性は失う。

以上のことをまとめると、味覚を表す形容詞「甘い」、「辛い」、「渋い」、「苦い」、「酸っぱい」は味覚を基本義として転義した多義語ではないということになる。

⁴⁸ 「態度の形容」において「甘い」と「辛い」が意味(厳しさ)的に対立してはいるが<表16>の全体の使用頻度からみても、「甘い」と「辛い」が強い関係にあるとは言にくい。

第8章 おわりに

本論文では、現代日本語多義形容詞「甘い」、「辛い」、「渋い」、「苦い」、「酸っぱい」を対象に、多義の構造を分析した。その結果、これらは「味覚」を「基本義」とした多義語ではないことを確認した。そして、「味覚の形容」の語彙体系と「態度の形容」の語彙体系を比較し、その違いについて記述した。以下は本論文のまとめと、今後の課題について述べる。

1. 本論文のまとめ

本論文は全8章の構成である。1章は従来の研究と生理学における「味覚」について概観し、2章から6章は個別の形容詞の意味構造を記述し、7章は「味覚の形容」と「態度の形容」の体系化を試みたものである。8章は本論文の全体のまとめである。

1章は本論文の目的、本研究の立場、研究方法と先行研究を提示した。先行研究では、本研究が言語を問題としているものの、「味覚」という生理感覚を出発点としているため生理学における「味覚」について概観した。そして言語レベルにおける味覚を表す形容詞の体系の問題についても指摘した。

2章から6章までは、「甘い」、「辛い」、「渋い」、「苦い」は多義語であり、その多義性は従来の研究で指摘したように「味覚」を「基本義」としたものではない。それぞれの形容詞は、「前提になる基準」、「意味内容」、「反応」という項目に分けられる意味構造からなる多義語である。なお、「酸っぱい」の場合は多義語ではないことも指摘した。

2章の「甘い」は、味覚の形容、態度の形容、モノの動き・ありよう、様態に対する評価という四つの用法がある。「味覚の形容」は、糖分の味、美味、相対的に味覚の刺激が弱いことを形容し、反応は主に快である。「態度の形容」は言語主体が想定する厳しさを基準に、その基準に達していないことを形容し、主に不快の反応である。「モノの動き・ありよう」は、ある物の動き(ありよう)に対して言語主体が想定する基準に達していない不十分さ(余裕があるさま)を形容し、反応は主に不快である。「様態に対する評価」は、ある様態に対する言語主体の快い評価で、場合によっては度を超える同類のものが基準になる。以上の特徴から「甘い」は「基準に達していない」と「快い」という二つの意味項目を基に、形容する対象の性質によって多義化する多義語である。なお、本章は金容美(2015)において発表した内容に修正を加えたものである。

3章は、「辛い」を対象に、味覚の形容、態度の形容という二つの用法があり、金容美(2016)の初出論文に修正を加えたものである。「味覚の形容」は、言語主体が許容する範囲の味覚の刺激を基準にして、塩味、辛味、相対的に味覚の刺激が強いことを形容し、主に不快の反応である。「態度の形容」は言語主体が想定する、あるいは社会一般的な厳しさを基準に、その基準を超える厳しさを形容し、主に不快の反応を導く。以上の特徴から「辛い」は「基準

を超える」と「不快」という意味項目を基に、形容する対象の性質によって意味が変わる多義語である。さらに、「辛い」は「基準を超えるか超えないか」という観点で「甘い」と対義関係にあることを指摘した。

4章は、基本味から除外された「渋い」を対象にその意味構造を分析することで多義の構造を明らかにした。なお、多義語としての「渋い」と「甘い」の関係性を記述したもので、金容美(2017)の初出論文に修正を加えたものである。「渋い」は、味覚の形容、態度の形容、モノの動き・ありよう、様態に対する評価の用法がある。「味覚の形容」は、食品が円滑に飲み込まれる期待に対して、渋味と嚥下を突っ返す感覚でうまく飲み込めないことを形容し、主に不快の反応が伴われる。「態度の形容」は要求・願望の円滑な展開を望むものの、実際はある妨げ要因による期待外れの事態が生じることを形容する。「モノの動き・ありよう」は、言語主体の期待に反して物の動きが円滑でないことを形容する。「様態に対する評価」は、ある物事が一般的な美意識という基準からズレてはいるものの、奥深さなどの要素により快と評価することを形容する。以上の特徴から、「渋い」は「展開が円滑でない(期待外れ)」と「不快」という意味項目を基にした多義語である。さらに、味覚レベルにおいて「渋い」と「甘い」は対義関係ではなかったものの、転義し多義化した際には「甘い」と「渋い」が対立、あるいは類似の関係にあることも明らかになった。

5章は、「苦い」の多義構造について分析した。「苦い」は味覚の形容、態度の形容という用法がある。「味覚の形容」は、肉体的な「つらさ」を伴う苦味という不快な味覚を形容する。「態度の形容」は、言語主体の経験が前提になり、過去のこと、あるいは言語主体の能力・努力を超えた事態が引き起こす心理的な「つらさ」を形容する。「苦い」は「つらさ」を引き起こす」と「不快」という意味項目により、形容する対象が食物か物事かによって意味が変わる多義語である。

6章は、「酸っぱい」を対象に、従来の研究で修辭的な表現、慣用的な表現を例にして多義語と分類したことの問題を指摘し、「酸っぱい」は多義語でないことを解明した。また、「酸っぱい」には味覚の形容と共に、嗅覚の形容の意味もある。この点が他の形容詞と区別される特徴であり、「酸っぱい」が多義化しない理由でもある。

7章は、2章から6章までの分析を基に、「味覚の形容」の体系化と「態度の形容」の体系化を試みた。そして、この両用法の体系を比較することで、共通点、相違点について探った。その結果、両用法の体系には「甘い」が特別な位置を占めている以上の共通点は見られなかった。従来で五つの形容詞は「味覚」が基本義になって多義化したという主張に反する結果である。もし、「味覚」が基本義であるとしたら、多義化した「態度の形容」の体系にも何ら

かの影響を与えるはずではあるが、結果はそうではなかった。さらに、「味覚の形容」においては「甘い」と「辛い」が強い対義関係にあったものの、五つの形容詞の全用法からみると、「甘い」と「渋い」が他より強い関係にあることが確認できた。

味覚を表す形容詞の多義性を分析する際に、従来の研究は認知意味論の観点でメタファー、メトニミー、シネクドキーという動機付けによって多義を説明するのが一般的なやりかたであった。しかし、本研究は従来の方法とは違う「意味構造」の分析という方法で多義を説明し、五つの形容詞が味覚という基本義から意味が派生したという従来の主張を再検討するものである。

「甘い」、「辛い」、「渋い」、「苦い」の四つの形容詞は「味覚」ではなく、各形容詞にある固有の意味項目を基にし多義化したことを確認した。つまり、「基準に達していない」、「基準を超える」、「展開が円滑でない」、「「つらさ」を引き起こす」という評価的な意味から味覚へ転義した仕組みである。五つの形容詞は味覚というカテゴリーに含まれていても転義した際には「味覚」以外の特徴によって意味が生じ、味覚カテゴリーは便宜的に作られたカテゴリーである。これは、「味覚」というのが人間の生理から始まるとしても、言葉は使われる社会によって便宜的な存在であるため時代、地域、言語によって表現の体系が変わることを意味する。すなわち、日本語の味覚を表現する形容詞の体系は、人間の生理感覚を基にして一次的に用意されたものではなく、様態を評価する形容詞から二次的に構築され運用するものである。

2. 今後の課題

今後の課題としては、以下のような研究を考えている。

① 複合形容詞の多義構造

本論文では「甘辛い、甘酸っぱい」などの複合形容詞は対象外にしている。しかし、複合形容詞のうち「甘酸っぱい思い出」のように物の属性(味覚、嗅覚)以外の対象を形容し多義語化する場合もある。さらに「酸っぱい」の場合は味以外の対象は形容していないという特徴があるにも関わらず、複合形容詞の場合は味以外の対象を形容している。このような複合形容詞の多義構造も試み、単独形容詞との違いについても考察する。

② 評価語としての「おいしい、うまい、まずい」の多義構造

本論文では具体的な味覚を持つ形容詞を対象にしているため、味覚に対する評価語である「おいしい、うまい、まずい」は対象外であった。この三つの形容詞も、「おいしい話、まずい仕事ぶり」などで食物以外を対象にしてよく使われる多義語である。このような形容詞は食物の具体的な属性の意味がなく、快か不快かという評価のみを表す形容詞の多義構造も試みたい。

③ 意味構造の分析に基づく次元形容詞の多義構造

形容詞を一般化するとき基本となる次元形容詞を対象にして意味構造の分析による多義構造を明らかにする。次元形容詞は本論で取り上げた五つの形容詞とは違って、基準をどこにおいて設定するかの違いはあるものの、大小という同じ尺度で体系化できるカテゴリーである。例えば、「長い・短い」は線的な広がりを見準値にして大小の関係にあり、「広い・狭い」は面積の広がりを見準値にして大小の関係にある。さらに、こういう形容詞が多義化し、「長い(短い)歴史」として使われた際にも、「線的な広がりを見準にして大小」という意味は変わらない。この点は、味覚の表す形容詞が多義化した際に「味覚」の意味がないのとは遥かに違う特徴である。

④ 同一語幹を持つ他品詞

本論文は形容詞を対象にして多義構造を明らかにした。五つの形容詞と同じ語幹を持つ他品詞にも適用可能かを試みる。例えば、「渋い」は「展開が円滑でない」という特徴によって多義化した語である。「渋い」と同一語幹を持つ「渋る」は「筆が渋る、出席を渋る」などの例があり、「渋い」の「展開が円滑でない」の意味が適用可能である。

味覚表現の複合形容詞、さらに味覚の評価語の意味構造を分析することで、味覚を表現する形容詞の全般的なシステムの理解も深まることが期待される。また、形容詞一般と言われる次元形容詞の意味構造についても試みたい。それによって、感覚形容詞と属性形容詞の意味構造およびその体系を比較することができ、両形容詞のしくみの特徴付けることができると思う。

<参考文献>

*下線は本文の引用文献

- 青谷法子(2001) 「多義語の語彙ネットワークに関する研究(1)-形容詞「甘い」について-」
『東海学園大学研究紀要』(6) pp. 149-159
- 安部清哉(2011) 「日本語の味覚形容詞語彙の類型的構造および方言分布成立-「五味」と
スイ・スッパイ・スッカイの語源(中国語「酢」)の再検討-」『人文』9 学
習院大学 pp. 7-33
- 池上嘉彦(1975) 『意味論』大修館書店
_____(1978) 『意味の世界 現代言語学から視る』日本放送出版協会
- 石井翔(2012) 「酸味を感じる仕組み」『生理工学会誌』90(5) 日本生理工学会 p. 255
- 近江政雄(2008) 『講座<感覚・知覚の科学>4 味覚・嗅覚』朝倉書店
- 小田希望(2003) 「甘くてスウィート」『ことばは味を超える』海鳴社 pp. 186-214
- 柏柳誠(2006) 「味覚の生理学」『口腔・咽頭科』18(2) 日本口腔・咽頭学会
- 加藤正信(1966) 「「日本語地図」から-<砂糖が>あまい・<汁の塩味が>うすい-」『言語
生活』177 筑摩書房 pp. 66-71
- 木原美樹子(2010) 「味覚形容詞「甘い」と sweet-「甘い」の対義的転用-」『中村学園大学・中
村学園短期大学部研究紀要 第42号』pp. 55-61
- 金容美(2015) 「日本語味覚形容詞「甘い」の多義構造-<評価性><程度性>による意味の転
用-」『日語日文学研究』94-1 韓国日語日文学会 pp. 121-139
- _____(2016) 「日本語形容詞「渋い」の多義構造」『日語日文学研究』97-1 韓国日語日文学
会 pp. 213-229
- _____(2017) 「日本語形容詞「カライ」の多義構造」『大学院研究年報』46 文学研究科篇
中央大学 pp. 1-14
- 九鬼周造(1930) 『「いき」の構造』岩波書店
- 楠見孝(1988) 「共感覚的メタファの心理・語彙論的分析」『ことばとかたちのポエティクス
(記号学研究 8)』東海大学出版会 pp. 237-248
- _____(1995) 『比喩の処理過程と意味構造』風間書房 pp. 125-152
- _____(2005) 「心で味わう味覚表現を支える認知のしくみ」『味ことばの世界』海鳴社
pp. 88-122
- 国広哲弥(1970a) 『意味の諸相』三省堂

- _____ (1970b) 「日本語次元形容詞の体系」『言語の科学』2号 東京言語研究所 pp. 13-26
- _____ (1982) 『意味論の方法』大修館書店
- _____ (1989) 「五感をあらわす語彙-共感覚比喩的体系」『言語』18巻11号 pp. 28-31
- _____ (1997) 『理想の国語辞典』大修館書店
- _____ (2002) 「類義語・対義語の構造」『現代日本語講座4 語彙』明治書院 pp. 152-171
- _____ (2006) 『日本語の多義動詞-理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店
- 栗原堅三(1998) 『味と香りの話』岩波書店
- _____ (2012) 『うま味って何だろう』岩波書店
- 小出慶一(2003) 「味覚形容詞-体系とその意味拡張-」『群馬県立女子大学国文学研究』23
群馬県立女子大学文学部国語学国文学研究室 pp. 1-17
- 国立国語研究所(1964) 『分類語彙表』秀英出版
- _____ (1966) 『日本言語地図解説 - 各図の説明 1』大蔵省印刷局
- _____ (西尾寅弥)(1972) 『形容詞の意味用法の記述的研究』秀英出版
- 近安里(1997) 「多義語「甘い」の構造的考察-英語 sweet との比較を通じて-」『明治大学
日本文学』25 pp. 53-66
- 崔明愛・馬場俊臣(2010) 「日本語と中国語の味覚表現の比較-「甘い」「辛い」を中心に」『北
海道教育大学紀要(人文科学・社会科学編)』2号 pp. 65-78
- 佐藤昌康(1991) 『味覚の生理学』朝倉書店
- 佐藤昌康・小川尚編(1997) 『味覚の科学』朝倉書店
- 柴田武(1995) 『日本語はおもしろい』岩波書店
- JantimaJantra(1999) 「日本語形容詞「あまい」の意味拡張と広告における多義的使用の分
析 - 英語<sweet>及びタイ語<waan>と対照しながら」『DYNAMIS』3 京
都大学 pp. 142-193
- 孫京鎬(2005) 『韓日両言語における感覚語場の対照研究』金沢大学博士学位論文
- 長尾勇(1982) 「五味考-味覚用語の変遷と分布-」『語文』55 日本大学国文学会 pp. 34-46
- 中村明(1971) 「比喩とはなにか」『言語生活』233号 筑摩書房 pp. 55-61
- 西尾寅弥(1971) 「形容詞の意味の一側面」『言語生活』234号 筑摩書房 pp. 59-65
- _____ (1983) 「食の感覚を表す形容詞」『食のことば』ドメス出版 pp. 99-111
- 仁田義雄(1998) 「日本語文法における形容詞」『月刊言語』3月号
- _____ (2002) 『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 白静姫(2005) 「日本語と韓国語の味覚形容詞の多様性-「甘い」「辛い」と「달다」「맵다」を

- 中心に-」『日本学報』62 韓国日本学会 pp. 51-68
- 前橋健二(2011) 「甘味の基礎知識」『日本醸造協会誌』106 卷 12 号 日本醸造協会
- 丸岡真紀穂(2014) 『スペイン語味覚形容詞の認知言語学的研究-日本語との対照を通して-』関西外国語大学博士論文
- 皆島博(2005) 「日英語の味覚形容詞:「アマイ」と”sweet”」『福井大学教育地域科学部紀要 I』人文科学外国語・外国文学編 61 号 pp. 11-29
- 武藤彩加(2001) 「味覚形容詞「甘い」と「辛い」の多義構造」『日本語教育』110 日本語教育学会 pp. 42-51
- _____ (2008) 「『共感覚的比喩』の一方性仮説」における反例の検証と課題—7つの言語を対象とした「視覚を表す語」に関する予備調査の結果から—」『琉球大学留学生センター紀要 留学生教育』5 号 pp. 1-18
- _____ (2015) 『日本語の共感覚的比喩』ひつじ書房
- 梶山洋介(2002) 『認知意味論のしくみ』研究社
- 森田良行(1998) 『日本語をみがく』PHP 研究所
- _____ (2007) 『日本語質問箱』角川学芸出版
- 安井稔(1978) 『言外の意味』研究社
- 山添秀剛(2003) 「苦くてビター」『ことばは味を超える』海鳴社 pp. 215-240
- 山田進(1972) 「現代宮古方言味覚語彙考—東京方言との比較を中心に—」『沖縄文化』39 号 沖縄文化協会 pp. 30-37
- 山梨正明(1988) 『比喩と理解』東京大学出版会
- 山野善口(1994) 『おいしさの科学』朝倉書店
- 山本隆(1996) 『脳と味覚 - おいしく味わう脳のしくみ』共立出版 pp. 9-25

<辞書類>

- 大野晋他(1985) 『類語国語辞典』角川書店
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一(1994) 『言語学大辞典-術語編』三省堂
- 金田一春彦(1994) 『学研現代新国語辞典』学習研究社
- 新村出(1998) 『広辞苑』岩波書店
- 清水秀晃(1984) 『日本語語源辞典』現代出版
- 情報処理振興事業協会(1990) 『計算機用日本語基本形容詞辞書 IPAL(basic adjectives)—解説篇—』情報処理振興事業協会技術センター

- _____ (1994) 『計算機用日本語基本形容詞辞書IPAL(basic adjectives)―
辞書篇一』 情報処理振興事業協会技術センター
- 日本大辞典刊行 『日本国語大辞典 第二版』 小学館オンライン版
- _____ 『日本大百科全書』 小学館オンライン版
(<http://japanknowledge.com/library/>)
- 飛田良文他(1991) 『現代形容詞用法辞典』 東京堂出版
- 山田俊雄他(1985) 『新潮現代国語辞典』 新潮社
- 吉田金彦 (2000) 『語源辞典形容詞編』 東京堂出版

<資 料>

- 国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス・中納言』 (<https://chunagon.ninjal.ac.jp>)
- _____ 『NINJAL-LWP for BCCWJ』 (<http://nlb.ninjal.ac.jp/>)
- 朝日新聞社データベース 『聞蔵Ⅱ』 (<http://database.asahi.com/index.shtml>)
- 毎日新聞社データベース 『每索』 (<http://mainichi.jp/contents/edu/maisaku/>)
- 読売新聞社データベース 『ヨミダス歴史館』 (<https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>)